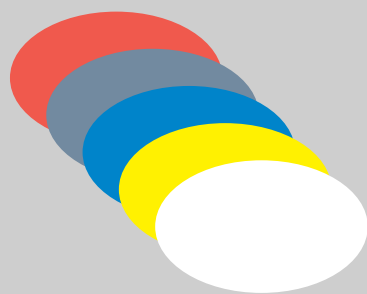


2025年度 福知山公立大学 北近畿地域連携機構

年次報告書

ANNUAL REPORT 2025



北近畿地域連携機構長ごあいさつ



北近畿地域連携機構長
(福知山公立大学副学長)

西田 豊明

北近畿地域連携機構（キターレ）は、福知山公立大学の地域協働・連携のハブとして、2020年4月にオープンしました。2022年度には組織改革を実施し、次の4つを柱とする体制へと再編しました。

- 機構長と部局長で構成される運営委員会のもと、地域からの相談に応じて俊敏な意思決定を行うリエゾンオフィス
- 市民の関心の高い話題を扱うフォーラム形式の市民講座と、教員の専門性に基づく実践的な技術セミナー
- 大学内外でチームを組んで独自の地域協働活動を推進・深化させるユニット群
- 北近畿地域全体に広がる多様なセクターのステークホルダーが常時オンラインと対面で交流できる、無料のコミュニケーション基盤「北近畿コラボスペース」

これにより、日常の交流からプロジェクト活動までの幅広い地域協働を強力に支援できるようになりました。

2025年度は、これまでの実績を上回る発展を遂げるとともに、生成AIを活用した独自のDXにも取り組みました。その結果、

- 年次報告書のeBook化により閲覧性を高めました。

－ 学内DXのFUJINを使った執筆体制を導入し、年次報告書の内容充実とタイムリーな刊行を可能にしました。

－ DXによる地域協働の起点となるFUJIN-Pソムリエ実証実験を開始しました。

加えて、北近畿コラボスペースでは地元企業の工場見学会を実施しました。また、会費無料期間の無期延長を決定し、より参加しやすい環境を整えました。

次のとおり、活動指標にも体制強化の成果が表れています(カッコ内は2024年度実績です)。

- 連携相談88件(前年度62件)のうち、共同研究・受託研究・共同事業・受託事業のいずれかに発展したもの72件(前年度44件)
- 市民講座2回(前年度2回)、技術フォーラム(FabLab)2回(前年度2回)
- 9ユニット(前年度8ユニット)による地域協働体制
- 北近畿コラボスペース会員数402人(2026年3月31日現在、2025年1月末日現在302人)

この報告書では、日ごろご支援いただいている市民の皆様には北近畿地域連携機構全体の取り組みを知っていただけるよう、可能な限り情報を公開し、詳細かつわかりやすい記述に努めました。どうぞご活用ください。

本報告書の内容についてご不明の点や、今後の取り組みについてのご提言がありましたら、ご遠慮なくご連絡ください。

2026年度、福知山公立大学は開学10周年を迎え、記念事業を実施いたします。皆様とともに、地域の底力を引き出し、新たな価値創造にチャレンジいたします。

目次

Kita-re

北近畿地域連携機構長ごあいさつ	1
キターレ基幹事業	
NEXT ユニット NEXT 産業創造プログラム	3
まちかどユニット まちかどキャンパス吹風舎の活動	10
FabLab Fukuchiyama for 北近畿ユニット 地域の FabLab 活用事業	13
学校組織レジリエンスユニット 北近畿地域の教育機関を対象とした様々な支援/協働	15
STL 助成金	18
シニアワークカレッジ	23
小学生のためのプログラミング教室、中学生のための夏休み IT 講座	26
産学公連携組織 北近畿コラボスペース	31
市民講座	33
長田野工業団地との連携	35
地域との連携・地域への貢献に関する教員の活動	
地域経営学部	
・経済産業省「地域の人事部」事業における講演・講義の実施	37
・京都府の文化的景観についての研究	38
・観音寺自治会所蔵近代史料調査・保存プロジェクト	39
・「すぐに役立つ日本語講座@丹波」サポーター	40
・倉梯第二小学校の防災イベント助言	41
・福知山市内社会福祉施設におけるBCPジレンマゲーム・初動対応BOX設計支援	42
・学生主体による農産加工品の市場拡大を目的とした地域ブランド推進事業 (京都中丹いちおし商品を核とした産学官連携実践)	43
・高齢者生活行動データの分析から高齢者疾患(認知機能低下・その他疾患)の 早期の気づきを促す	44
情報学部	
・北京都デジタルパーク2025	45
・画像を用いた森林の生物データの取得及び管理システムに対する情報技術の開発と運用	46
・土壌水分量の可視化を目的とするIoTの研究	47
・大阪・関西万博での催事出展にかかる体験企画の開発・運用支援業務	48
・大江山みずずの村りサーチベース	49
・京都府PTA研究大会福知山大会のライブ配信、オンデマンド配信	50
・福知山商工会議所 FabLab で始める小さなデジタル革命	51
・兵庫県立和田山特別支援学校「わとくUDゲーム交流会」連携支援	52
・バイオリギング・データサイエンスを用いたオオミズナギドリの行動データの解析	53
附属機関	
・消防活動におけるAI支援	54
小中高大連携	55
各附属機関(国際・防災・数理)の取組特集	
地域防災研究センター	57
国際センター	59
数理・データサイエンスセンター	61
講演講師、委員等派遣実績	63
2025年度研究費獲得実績	69
包括協定団体	73

NEXT 産業創造プログラム

事業代表 地域経営学部：亀井省吾教授（NEXT ユニット長）

担当教員 西田豊明副学長、地域経営学部：谷口知弘教授、加藤好雄准教授、杉岡秀紀准教授、張明軍准教授、情報学部：山本吉伸教授、野村修教授

事業概要

地域の持続的な発展には、社会の変化に柔軟に対応し、新たな価値を創出できる人材の育成が欠かせません。特に、少子高齢化が進む中で、社会人の学び直しを通じた人材の再生産が求められています。本学は、これまで地域協働型教育を実践してきた経験を活かし、起業家教育の新たなモデルを提示することを目指しています。本プログラムでは、大学、福知山市、産業界などが連携し、起業に必要な知識やスキルを短期間で体系的に学べるプログラムを開発・実施します。こうした取り組みにより、地域で挑戦する人材を育成し、産業の活性化と新たなビジネス創出につなげることを目的としています。

本プログラムは、本機構の NEXT ユニットが中心となって推進し、以下の役割を担っています。

事業体制

- 運営統括（計画立案、進捗管理、成果の確認など）
- カリキュラム・授業科目の内容に関する検討
- プログラムの構造や授業環境の整備に関する議論

2025 年度事業の成果

本年度は、開発した教育プログラムに基づき、事業の運用を実施しました。主な成果は以下のとおりです。

- 教育プログラムの運用（講義演習型 3 科目、PBL 型科目）
- NEXT ユニット会議の開催（6 回）
- SHIBUYA QWS における出張イベントの開催（2 回）
QWS CULTIVATION PROGRAM
PBL 受講生チーム主催によるイベント
- F-StartUp・PBL 成果報告会の開催（Zoom）
- 受講生数：20 人（基礎科目修了生 20 人、PBL 型科目修了生 16 人）
- 受講生によるクラウドファンディング成立（2 件）
- 達成総額：252 万円
支援者数：188 人
目標達成率平均：255%
事業連携成立：15 件

2025 年度授業科目一覧および 修了要件

本年度は、表 1 に記載の教育プログラムに基づき、各授業科目を運用しました。

修了要件は、表 1 に記載の基礎科目 3 科目に合格すること。合格者のうち、進級を希望する場合は、「実践事業創造特論」を受講し、修了すること。なお、修了要件としての最小総授業時間数（基礎科目 3 科目、PBL1 科目）は、48 時間（12 時間×4 科目）です。

[表 1 授業科目一覧]

種類	科目名	選択・必修	時間数	実施時期
基礎	地域経営特論	必修	12	2025年8月
	スタートアップ特論	必修	12	2025年8月
	AIからビジネスへ	必修	12	2025年8月～9月
PBL	実践事業創造特論	必修	12	2025年11月～2026年2月

キターレ基幹事業

北近畿地域連携機構（キターレ）が中心となり、地域の課題解決や人材育成を目的に、起業支援、ものづくり支援、地域交流、教育連携など多様な取り組みを実施しています。地域や教育機関、企業と連携して展開している主な基幹事業を紹介します。

担当講師

本プログラムの授業担当講師は表 2 のとおりです。また、「地域経営特論」や「実践事業創造特論」などの授業では、産業界や公共機関からゲスト講師・コンサルタントを招聘し、実践的な学びの機会を提供しました。

[表 2 担当講師]

教員名	専任	実務家	当事業で担当する講義	学位・現職
西田 豊明	○	—	AI からビジネスへ	本学理事、副学長、工学博士、北近畿地域連携機構長
亀井 省吾	○	○	地域経営特論、スタートアップ特論、実践事業創造特論	本学教授、本学大学院地域情報学研究所教授、博士（学術）、北近畿地域連携機構 NEXT ユニット長
谷口 知弘	○	○	地域経営特論	本学教授、北近畿地域連携機構まちかどユニット長、京都工芸繊維大学工芸科学部非常勤講師
杉岡 秀紀	○	○	地域経営特論	本学准教授、大阪公立大学大学院都市経営研究科非常勤講師
加藤 好雄	○	—	AI からビジネスへ	本学准教授、博士（経営学）、愛知大学経営総合科学研究所客員研究員
張 明軍	○	—	実践事業創造特論	本学准教授、本学大学院地域情報学研究所准教授、修士（MBA）、博士（農学）
板倉 宏昭	—	○	地域経営特論	本学客員教授、博士（学術）、東京都立産業技術大学院大学教授
城 裕昭	—	○	実践事業創造特論	高千穂大学教授、東京都中小企業診断士協会理事、北近畿地域連携機構連携研究員
鈴木 宏幸	—	○	スタートアップ特論、実践事業創造特論	豊橋創造大学教授、中小企業診断士
野村 幸雄	—	○	スタートアップ特論	渋谷スクランブルスクエア株式会社 営業一部（オフィス・SHIBUYA QWS Div.）部長、SHIBUYA QWS エグゼクティブディレクター
飯淵 弘成	—	○	実践事業創造特論	株式会社 Lifexia 代表取締役、北近畿地域連携機構連携研究員

プログラム運用結果

本プログラムの科目履修状況は、表3のとおりです。基礎科目においては、受講生20人全員が必修科目として「地域経営特論」、「スタートアップ特論」、「AIからビジネスへ」を履修しました。全員が基礎科目に合格し、そのうち17人がPBL型科目「実践事業創造特論」に進級、PBL受講生のうち16人が本プログラムを修了しました。授業評価アンケートでは、基礎3科目の平均評価が5段階評価で4.4という高い評価を得ました。今後も、担当講師へのフィードバックを通じて、講義内容のさらなる改善を図っていきます。

[表3 プログラム受講生のアンケート集計]

科目名	履修者数	授業評価	合格者	科目名	履修者数	授業評価	合格者
地域経営特論	20	4.5	20	AIからビジネスへ	20	4.2	20
スタートアップ特論	20	4.6	20	実践事業創造特論	17	—	16

福知山発のスタートアップ支援事業「F-StartUp」

NEXT産業創造プログラムの修了者（見込者含む）を対象に、事業拡大を支援する起業家支援事業「F-StartUp」を11月より開始しました。本事業では、起業コンサルタントが伴走し、事業の拡大を支援する「ハンズオン支援型」と、クラウドファンディングを活用して資金調達を目指す企業に対し、ファンドレイザーが支援を行う「クラウドファンディング型」の2つの支援形態を設けています。これにより、福知山発のスタートアップ企業の育成を促進し、地域に根ざした新たなビジネスの創出を目指します。

「F-StartUp」運営委託企業および参加企業

- ハンズオン支援型〔製品開発・販路開拓支援〕
運営委託企業：JGLproducts
参加者：足立 真由美
- ハンズオン支援型〔課題抽出・成長支援〕
運営委託企業：株式会社アルファドライブ
参加者：一般社団法人 NEXTE 福知山
- クラウドファンディング型
運営委託企業：クラファン総研株式会社
参加者：株式会社植物蒸留らぼ .DD

SHIBUYA QWSでのイベント開催

QWS CULTIVATION PROGRAM

2025年9月19日、NEXT産業創造プログラムの一環としてSHIBUYA QWSを訪問し、「QWS CULTIVATION PROGRAM」に参加しました。受講生17人が「あなたの『問い』は、なんですか？」をテーマにワークショップへ参加。QWSコミュニケーターの進行のもと、各自の「問い」を可視化する「問いのアート」制作や対話を通じて探究を深めました。参加者からは、自身の関心や課題意識が明確になったとの声が多く、今後のPBL型科目に向けた視点と意欲を高める機会となりました。



対話を通じて思考を深めるワークショップの様子



持ち寄った問いを可視化する「問いのアート」制作の様子

なぜあなたのスイングは手打ちになるのか？フィジオゴルフワークショップ／QWS LOCAL CONNECT～自治体推薦イノベーターピッチ&エキスポ～

2026年2月18日、本プログラム受講生が主催となり、ゴルフパフォーマンス向上ワークショップを開催しました。本イベントでは、フィジオゴルフフィットネスを講師に迎え、神経科学・バイオメカニクス・生理学・学習理論の4視点から体系化されたトレーニング理論を紹介。アマチュアに多い「手打ち」の原因と改善策を科学的根拠に基づき解説いただきました。参加者にとって実践的な学びの機会となるとともに、本プログラム受講生にとっても企画・運営を通じて事業化視点を深める機会となりました。

また、2026年2月25日には、「地域課題解決に取り組むスタートアップイノベーター」として登壇し、本ワークショップで得られた知見や検証内容を含め、本PBLの成果をピッチしました。



フィジオゴルフワークショップ イベントパナー



QWS LOCAL CONNECTでピッチする本プログラム受講生

F-StartUp・PBL成果報告会

担当講師や連携企業とのPBLコアミーティングを経て、新規事業創出に取り組む「実践事業創造特論」の受講生4チームと、F-StartUpに採択され、11月から4か月間にわたり事業拡大に取り組んだ3社が、2026年2月28日にZoomにて開催された成果報告会に臨みました。各チーム・企業は、表4・表5に記載の計7事業について発表を行いました。

本成果報告会には、福知山商工会議所、福知山市商工会、福知山産業支援センター、金融機関関係者をはじめ、ゲスト講師である地域企業の経営者、講師陣、福知山市、福知山公立大学の関係者、受講生など、総勢78人がオンラインから参加しました。

[表4 2025年度NEXT産業創造プログラムPBL成果報告タイトル]

チーム名	タイトル
Aチーム	業界特化研修事業の社内提案プラン ステークホルダーマネジメントとスピードの重要性
Bチーム	PHYSIO GOLF Re:Design — ゴルフで健康寿命を再設計するReSwing事業 —
Cチーム	教育探求ツアーと地域共創オリーフリアン — B型就労所と大学生が歩んだクラウドファンディング実践 —
Dチーム	学生記者が届ける、世のため人のための企業 繋がり、広がる学生の取材で紡ぐ、地域企業の魅力

[表5 2025年度NEXT産業創造プログラムF-StartUp成果報告タイトル]

参加事業者名	タイトル
一般社団法人NEXTE福知山	NEXTE福知山のこれから — 企業向けインタビュー記事制作サービス —
足立 真由美	「HARUEL」のブランド事業展開 “ヒト”と“モノ”にやさしい移動を
株式会社植物蒸留らぼ.DD	地域資源を価値に変え、経済を循環させる。 福知山発・エシカルブランドによる次世代ハイブリッドビジネス

NEXT 産業創造プログラム PBL 成果報告会及び修了式次第

時間	内容
13:00~13:05	開会挨拶:福知山市 副市長 前川二郎
13:05~13:15	プログラム及び成果報告会の概要説明:本学 教授 亀井省吾(NEXTユニット長)
13:15~14:00	PBL成果報告(受講生発表:4チーム)
14:05~14:45	F-StartUp成果報告(事業者発表:3チーム)
14:45~15:05	総評:株式会社サノス 代表取締役社長 板越ジョージ、東京都立産業技術大学院大学 教授 板倉宏昭、福知山産業支援センター ドッコイセIbiz センター長 西山周三
15:05~15:15	修了式(修了証授与):本学 学長 川添信介
15:15~15:20	総括:福知山市産業部 部長 西畑信寿
15:20~15:30	閉会挨拶:本学 副学長兼北近畿地域連携機構長 西田豊明



Zoom での成果報告会の様子

A チーム 発表資料



発表タイトル

B チーム 発表資料



発表タイトル

C チーム 発表資料



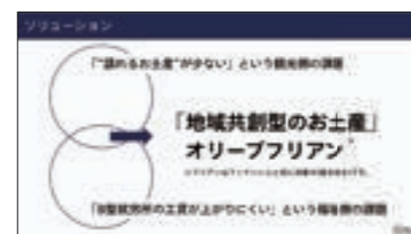
発表タイトル



概要



概要



概要

D チーム 発表資料



発表タイトル



概要

一般社団法人 NEXTE 福知山 発表資料



発表タイトル



概要

足立 真由美 発表資料



発表タイトル



概要

株式会社植物蒸留らぼ .DD 発表資料



発表タイトル



概要

情報コミュニケーション学会第 23 回全国大会

情報コミュニケーション学会第 23 回全国大会 (テーマ:「人と技術の調和が拓くウェルビーイング」) が、大手前大学さくら夙川キャンパスにて開催され、本プログラム担当教職員により「福知山市 NEXT 産業創造プログラムの成果評価 - 産業課題に対する KPI 分析 -」が発表されました。本研究は、福知山市と本学が連携して実施してきた 5 年間の起業家育成プログラムについて、ロジックモデルに基づく KPI 分析を通じ、その成果を検証したものです。地方小規模都市における産業支援の新たなモデルを、実証データに基づき発信する機会となりました。



福知山市NEXT産業創造プログラムの成果評価 - 産業課題に対するKPI分析 -

修了アンケート結果

NEXT 産業創造プログラムの受講満足度は表 6 のとおり、満足度、起業貢献度、修了自慢度、知人推薦度とも 4.4-4.8 と総じて高いものとなりました。一方、より詳細なプログラムの特徴に関する満足度を示した表 7 では、土日開講と受講者間の交流がともに 3.9 とやや低い結果となりました。次年度は、オンデマンド講義導入による期間分散や、一部対面への移行、交流会開催なども視野に入れ改善を図っていきたいと考えます。

NEXT 産業創造プログラムのカリキュラム内容に関する満足度は表 7 のとおり、PBL、知識スキル修得、実践知識修得、2 段階制とも 4.4-4.6 と総じて高いものとなりました。この評価に甘んじること無く、ビジネス環境ならびに受講生ニーズに即した更なるカリキュラムの改善に尽力して参りたいと考えています。

F-StartUp 参加 3 社の評価は表 8 表 9 のとおり、総合的満足度 4.6 となり、プログラム有効性としては、事業課題解決・ビジネスモデル具体化が 4.8 との結果となりました。一方で、期間・時期は 3.8、参加費適価性は 3.2 と評価低く、コメントには伴走支援期間の短さへの指摘もありました。今後、伴走支援の期間設定と参加費の適合につき、更なる検討を進めていく所存です。

NEXT 産業創造プログラム修了アンケート結果

[表6 プログラム受講満足度]

	評価平均	回答者数	満足度が高い	やや高い	どちらとも言えない	やや低い	低い
満足度	4.8	16	13	3	0	0	0
起業貢献度	4.8	16	13	3	0	0	0
修了自慢度	4.8	16	12	4	0	0	0
知人推薦度	4.4	16	8	7	1	0	0

[表7 プログラムの特徴に関する満足度]

	評価平均	回答者数	満足度が高い	やや高い	どちらとも言えない	やや低い	低い
PBL	4.6	16	10	6	0	0	0
知識スキル修得	4.4	16	7	8	1	0	0
実践知識習得	4.4	16	8	7	1	0	0
2段階制	4.6	16	10	6	0	0	0
土日開講	3.9	16	5	5	5	1	0
遠隔授業 (Zoom)	4.6	16	10	6	0	0	0
設備 (Slack)	4.4	16	9	5	2	0	0
受講費	4.3	16	8	4	4	0	0
開講期間・時期	4.3	16	8	5	3	0	0
受講生間の交流	3.9	16	5	6	4	1	0

F-StartUp 修了アンケート結果

[表8 プログラム受講満足度]

	評価平均	回答者数	満足度が高い	やや高い	どちらとも言えない	やや低い	低い
事務局サポート	4.8	5	4	1	0	0	0
内容・スケジュール	4.6	5	3	2	0	0	0
期間・時期	3.8	5	1	3	0	1	0
参加費適価性	3.2	5	0	2	2	1	0
総合的満足度	4.6	5	4	0	1	0	0

[表9 プログラム有効性]

	評価平均	回答者数	とても効果があった	やや効果があった	効果はなかった
ビジネスモデル具体化	4.8	5	4	1	0
プロトタイプ開発・改良	4.4	5	2	3	0
顧客・市場調査実施	4.6	5	3	2	0
事業拡大・成長	4.4	5	2	3	0
事業課題解決	4.8	5	4	1	0

まちかどユニット

まちかどキャンパス吹風舎の活動

事業代表 地域経営学部：谷口知弘教授（まちかどユニット長）

担当教員 地域経営学部：小山元孝教授、大谷杏准教授、張明軍准教授、情報学部：渡邊扇之介准教授

事業概要

まちかどキャンパス吹風舎（ふくちしゃ）は、北近畿地域連携機構が運営するサテライトキャンパスです。本学の学生・教職員と地域の皆さまが出会い、交流し、対話や共同作業を通して学び合う場として設けられました。持続可能な地域社会の形成を担う人材を育むことを目的としています。

まちかどユニットでは、本施設を拠点に、大学と地域をつなぐさまざまな活動を展開しています。これまで、ギャラリーやライブラリー、カフェの運営、地域との協働事業など、多彩な企画を実施してきました。

まちかどギャラリー

2025年度は、文化活動団体や本学学生団体による多様な展示を実施しました。地域で活動する団体の作品発表の場であると同時に、市民と学生が文化に触れ、交流する機会にもなっています。

[2025年度まちかどギャラリー展示一覧]

団体名	展示物	展示期間
公益社団法人福知山市文化協会	福知山書道連盟作品展示	4月15日～6月28日
七福ふっこう隊	能登半島地震写真展 mini ～つながるボランティア～	6月20日～8月31日
うぶやの里フェスタ in みわ実行委員会	だいすきふる里絵画展	7月1日～8月31日
公益社団法人福知山市文化協会	福知山市民川柳同好会作品展示	9月2日～12月24日
公益社団法人福知山市文化協会	丹波歌人社作品展示	1月15日～2月26日

まちかどライブラリー

「本をきっかけに人と人がつながる」ことを目指し、地域の方や本学の学生・教員が持ち寄った本を集めた小さな図書館「まちライブラリー福々 Books@福知山公立大学」を開設しています。

あわせて、福知山市立図書館による「暮らしに読書を、おうえん」貸出セットも設置し、より幅広いジャンルの本に親しめる環境を整えています。本を媒介としたゆるやかな交流が生まれる場となっています。

まちかどベース

本学のゼミやサークル活動、地域の方々の会合など、本学学生・教員、市民の活動や協働を支援する場として、貸切利用や、ふらっと立ち寄れるコワーキング利用を推進しています。

2025年度には、学生団体 DOKKO が主催するイベント「マルシェココモア」の運営をはじめ、学生団体同士によるコラボレーション企画など、特色ある取り組みも実施されました。

また、1階のまちかどベースでは、正課演習が約90回、学生の課外活動が23回、本学事業が7回、市民による貸切利用が18回行われるなど、多様な活動が展開されました。



学生団体KYOTOストリートミュージックProjectが実施したストリートピアノ企画

まちかど Cafe

毎週水曜日の午後1時から2時までの1時間限定で開いている「レコードとおしゃべり まちかど Cafe」は、音楽をきっかけに人と人がゆるやかにつながる場としてスタートしました。気軽に立ち寄れる開かれた時間と空間を設けることで、地域の方々と大学との接点を日常の中に生み出しています。

今年度で3年目を迎え、継続する中で常連の参加者が増え、なかにはホスト役として運営に関わる方も現れました。利用者が担い手へと関わり方を広げる動きが生まれ、市民と大学がともに場をつくる実践へと発展しています。

また、毎週欠かさず参加される高齢者の方や、ベビーカーで訪れる子育て世代の方もおられ、まちかどキャンパスが地域の居場所として機能している手応えを感じています。高齢者に限らず、さまざまな世代で孤立が課題となる現代社会において、誰も排除しない地域の居場所のあり方を模索する実践として、今後も取り組んでいきたいと考えています。

今年度は12月末までに計33回開催し、延べ約260人が参加しました。小さな対話の積み重ねが、地域の日常にゆるやかなつながりを生み出しています。



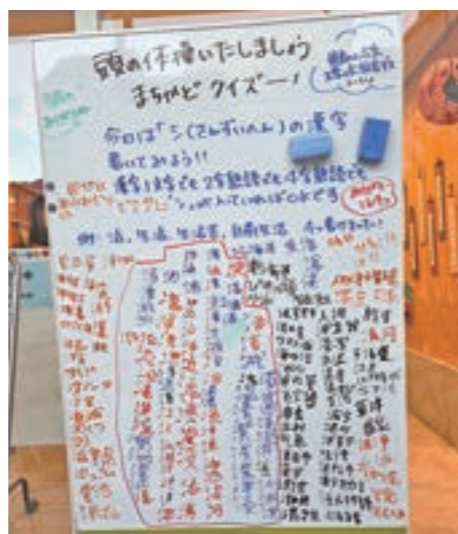
常連の参加者がホスト側として参加し、ともに場をつくるまちかどCafe

まちかどクイズ

「まちかどクイズ」は、まちかどキャンパス吹風舎の前に設置したホワイトボードに日替わりでクイズを出題し、下校途中の児童・生徒や地域の方々に自由に解いていただく取り組みです。日常のなかで気軽に立ち止まり、考え、会話が生まれるきっかけづくりを目的に、2025年4月10日より水・木・金曜日を中心に実施しています。

参加者は小学生から一般まで幅広く、2025年4月から12月までに計98回実施し、延べ1,303人が参加しました。

通りを歩く人と自然に言葉を交わす機会が生まれ、クイズのリクエストをいただいたり、問題を撮影して自宅で楽しむ方や、小中学生が自ら出題する場面も見られました。小さな仕掛けから、参加者が主体的に関わる広がりが出ています。



ホワイトボードいっぱい書き込まれたクイズの回答

福知山の地域資源を活用したシビックプライド醸成事業

福知山の地域資源である「歴史・文化」に着目し、シビックプライドの醸成を目的に、「福知山踊り」と「大工技術」をテーマとした活動を展開しました。地域住民との協働により、多世代が交流し、地域の歴史や文化に触れる機会を創出しました。

福知山踊りまちかど教室／ドッコイセの夏 まちかど連で踊ろう！

新町商店街事業協同組合との共催により、昨年11月から「福知山踊りまちかど教室」を毎月1回開催し、8月の福知山ドッコイセまつりまで継続しました。毎回10～15人が参加し、商店街関係者や近隣住民、本学学生な

どがともに踊りの輪をつくりました。幼児から高齢者まで、多世代が交流する場となりました。

また、地元郷土史家による福知山踊りの歴史を学ぶミニ講座も毎回実施し、好評を得ました。

さらに、3年目となる惇明地区公民館との共催事業「ドッコイセの夏 まちかど連で踊ろう！」では、教室参加者を中心に学生と市民で連を結成し、8月14日と23日の福知山ドッコイセまつりに参加しました。2日間で約50人が参加し、踊りを通じた多世代交流の機会となりました。



郷土史家による福知山踊りの歴史ミニ講座



福知山ドッコイセまつり当日、ご近所の方の指導のもと踊りの稽古をする学生

子ども体験クラブ「大工さんの仕事を知らう！」

2025年11月23日、北近畿地域連携機構と本学任意学生団体「ふく子屋」の主催により、「大工技術」をテーマとした体験活動を実施しました。

福知山市の歴史の中で培われてきた伝統的な技術を、次世代を担う子どもたちに体験してもらうことを目的とした企画です。当日は10人の小学生が参加しました。まちかどキャンパス吹風舎で趣旨説明を行った後、シェアハウス「さつき荘」に移動し、市内で能勢工務店を営む能勢隆明氏の指導のもと、鉛筆立ての製作に挑戦しました。

作業中は「ふく子屋」に所属する本学学生がアシスタントとしてサポートを行い、子どもたちと積極的に関わりました。

本活動を通して、地域住民と本学学生、地域の子供たちが協働しながら交流する機会を創出するとともに、福知山の歴史や文化の価値を再認識する場となりました。参加者にとっても有意義な体験の機会となりました。



先生と学生のサポートのもと、大工技術を体験する地域の子供たち

地域の FabLab 活用事業

事業代表 情報学部：衣川昌宏准教授（FabLab Fukuchiyama for 北近畿ユニット長）

事業概要

本事業は、教職員および市民に開かれたデジタルファブリケーションを中核とするものづくりの場を提供する取り組みです。特に北近畿地域の個人や企業が活用できる環境を整備し、工作や製品アイデアの試作・具現化を迅速に行える体制を構築することで、地域におけるものづくり DX 推進の入口としての役割を担い、産業発展に貢献することを目的としています。

また、FabLab を起点としたコミュニティ形成を進め、アイデア交換や協働を促進することで、「北近畿ものづくりプロトタイピングハブ」としての機能を強化します。ユーザーコミュニティの活性化を通じて、新たな挑戦や連携を生み出し、地域産業のさらなる活力創出へとつなげていきます。

事業内容

2025 年度も継続して、FabLab に導入しているレーザーカッター（xTool P2 オールインワンバンドル）および 3D プリンタ（Stratasys F170）を活用し、デジタルファブリケーションを実践的に学ぶ公開講座を展開しました。単なる機器紹介にとどまらず、設計から試作までを一貫して体験できる機会を創出することで、ものづくり人材の裾野拡大と地域内での活用促進を図りました。

また、FabLab をハブとした連携も広がりを見せ、福知山商工会議所会員事業者向けの活用講座の実施や、レーザーカッターを活用した技術相談・製作支援を行いました。実践的なサポートを通じて、設備の社会実装を着実に進めています。次年度に向けても、自治体・団体との協働企画が具体化しており、FabLab を起点とした共創の動きが継続的に生まれています。今後も環境整備と支援体制の充実を図り、地域とともに新たな価値創出へとつなげてまいります。

レーザーカッター体験講座

2026 年 1 月 31 日（土）、本学 3 号館の「FabLab（ファブラボ）」にて、「レーザーカッター体験講座」を開催しました。本講座には、30 代から 70 代までの地域の方々 5 人が参加されました。本講座は、情報学部・衣川昌宏准教授が講師を務め、地域の皆さまにデジタルファブリケーションの魅力を体験していただくことを目的に実施したものです。

当日はまず、レーザーカッターの仕組みや加工の種類（カット・彫刻など）について説明を行い、実際の加工デモンストレーションを通じて活用イメージを共有しました。その後、専用ソフトを用いた作図に挑戦し、データ作成から加工までの一連の流れを体験。木材を用いてキーホルダーやオリジナル雑貨を製作しました。

初めて機器を操作する参加者も多く見られましたが、教員や学生スタッフのサポートのもと、和やかな雰囲気の中で作業が進みました。完成した作品を手に取りながら、「楽しく学ぶことができた」「丁寧に教えてもらえて安心して取り組めた」といった声も寄せられ、デジタルものづくりを身近に感じていただく機会となりました。



レーザーカッターによる加工に挑戦する参加者

[レーザーカッター体験講座受講者アンケート]



参加者コメント

- 楽しく学ぶことができました。使い次第でいろいろなことができるとうわたり、大変学びが深まりました。
- 衣川先生も学生の方も、とても丁寧に教えてくださり、とても楽しく作品作りをすることができました。
- すばらしい企画だと感じます。様々な人に紹介したいです。
- 今後も体験講座に参加したいと思います。

[レーザーカッター体験講座受講状況]

年代	受講者
30代	1人
40代	1人
50代	1人
60代	1人
70代	1人
計	5人

3D プリンタ体験講座

2026 年 2 月 14 日、本学 3 号館にて 3D プリンタ体験講座を開催しました。本講座には 40 代から 70 代までの 8 人が参加し、情報学部の衣川昌宏准教授と衣川ゼミの学生 2 人が運営・サポートを担当しました。講座は 10 時から 17 時まで実施し、3D プリンタの基礎知識の習得から専用ソフトの操作、3D モデル作成までを一日かけて体験していただきました。

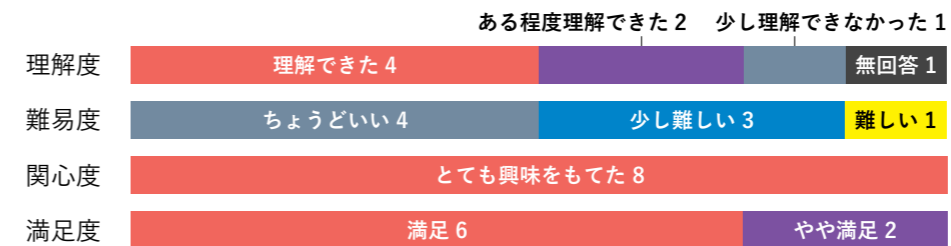
午前は「ミニ講義・デモンストレーション」として、熱溶解積層方式、光造形方式、インクジェット方式、粉末焼結方式、粉末固着方式の 5 種類の 3D プリンタの特徴や用途について解説しました。その後、各自のパソコンに「Fusion 360」をインストールし、基本操作を学びながら、造形の入門課題としてサイコロのモデリングに取り組みました。

午後は、本学が導入している産業用 3D プリンタ（Stratasys F170）の見学を行い、家庭用機との違いや活用事例について理解を深めました。続く「設計演習」では、クッキー型やふた付き小物入れの設計に挑戦し、実践的なモデリングを体験しました。長時間の講座となりましたが、受講後アンケートでは理解度・満足度ともに 92%と高い評価をいただき、参加者にとって充実した学びの機会となりました。講座中は学生スタッフが随時サポートを行い、きめ細やかな指導体制のもとで実施することができました。



学生スタッフのサポートを受けながら進む講座の様子

[3D プリンタ体験講座受講者アンケート]



参加者コメント

- 先生のお話、学生さんのサポートにより、楽しく勉強になりました。ありがとうございました。
- 自宅用の購入も検討しようかと思えます。
- 3D プリンタはどうやって使えるのか、以前から知りたかったので大変良かったです。
- 手取り足取り教えていただいたので最後まで楽しく学ぶことが出来ました。ありがとうございました。

[3D プリンタ体験講座受講状況]

年代	受講者
20代	1人
30代	1人
40代	0人
50代	0人
60代	4人
70代	2人
計	8人

北近畿地域の教育機関を対象とした 様々な支援／協働

事業代表 地域経営学部：福嶋真治准教授（学校組織レジリエンスユニット長）

事業概要

本学は2023年10月、内閣府戦略イノベーション創造プログラム（SIP）第3期「ポストコロナ時代の学び方・働き方を実現するプラットフォームの構築」において、東京大学大学院教育学研究科 能智正博教授率いる研究チームのフィールドワーク研究拠点に指定されました。

これを契機に、北近畿地域の教育機関との連携を一層強化し、多様な教育実践と研究を推進する拠点として、本ユニットを設立しました。

本ユニットでは、主に次の3点に取り組んでいます。

1. 北近畿地域の教育機関をフィールドとした学修機会の創出
本学学生が地域に根ざした学びを深める機会を提供します。
2. 北近畿地域の教育機関を対象とした支援活動
教育機関の課題解決や発展を支援する取り組みを展開します。
3. 新たな価値を提供する研究活動

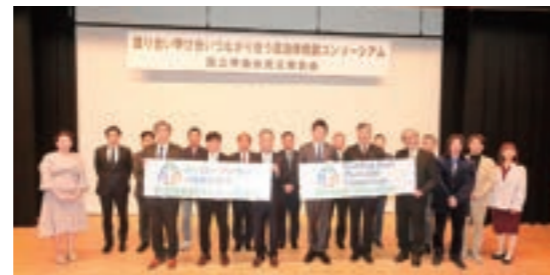
「語り合い 学び合い つながり合う 自治体教創コンソーシアム」設立準備会発足発表会の開催

2025年11月8日、本学北近畿地域連携機構と東京大学大学院教育学研究科 能智研究室の共催により、「語り合い 学び合い つながり合う 自治体教創コンソーシアム」設立準備会発足発表会を、ハピネスふくちやま市民ホールで開催しました。司会は福嶋ユニット長が務め、北近畿地域における教育プロジェクトの展望について発表が行われました。

第1部では、東京大学大学院経済学研究科 柳川範之副研究科長が「教育という営みを与える社会的インパクトへの期待 ー人口減少時代に選ばれる自治体となるためにー」と題して記念講演を行いました。

第2部では「教育という営みでつながる自治体コンソーシアムとは」をテーマに、福知山市の大橋一夫市長、綾部市の岩本正信副市長、舞鶴市の鴨田秋津市長、伊根町の岩佐好正教育長、福知山市の廣田康男教育長、綾部市の小林治教育長、舞鶴市の廣瀬直樹教育長を中心に登壇し、コンソーシアムへの期待や今後の展望を共有しました。

さらに、「北海道伊達市の挑戦 ー選ばれる伊達市になるためにー」をテーマに、北海道伊達市 堀井敬太市長および室蘭工業大学 山中真也教授より、地域での実践事例が紹介されました。



登壇者によるフォトセッションの様子

教育機関・学校関係者に対する取り組み

オンライン教員カウンセリングの実施（JST-SIP 関連）

福知山市・伊根町の小中学校、丹後・中丹地域の高校を対象に、Zoom や Slack を活用したオンライン教員カウンセリングを実施しています。

本ユニットは、教育委員会や学校管理職との調整、教員への説明支援などを担い、継続的なサポート体制を整えています。

学校管理職への支援

北近畿地域の学校管理職と定期的に協議を重ね、学校運営や組織マネジメントの向上に向けた支援を行っています。

特別支援教育に関する研修

1. 中丹地方教育委員会連絡協議会 委員研修会（2025年5月7日）

福知山市教育委員会との共催で開催し、中丹3市の教育長および教育委員、福知山市教育委員会関係者が参加しました。

第1部では、帝京大学文学部心理学科 角南なおみ准教授が「義務教育における特別支援教育の現状と今後の課題」と題して講演。現状分析と教育委員会に求められる役割について解説しました。

第2部では、福嶋ユニット長が「変化や危機に柔軟に対応できる学校組織のために」と題して講演し、レジリエンスの概念や学校組織マネジメントの在り方について説明しました。



角南准教授による講義「特別支援教育に求められるものーADHD傾向をもつ子どもの理解ととらえ方ー」の様子

2. 特別支援教育コーディネーター等研修会（2025年5月29日）

福知山市教育委員会との共催により実施し、市内小中学校教員約30人が参加しました。

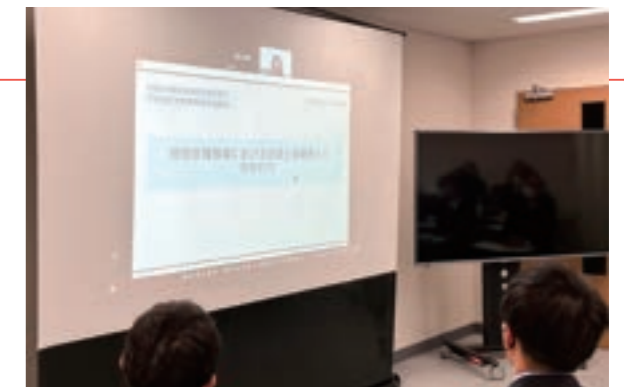
「内閣府戦略イノベーション創造プログラム（SIP）『語り合い学び合う特別支援教育スキリング・プロジェクト』の教員職能開発グループリーダーを務める角南准教授が「特別支援教育に求められるものーADHD傾向をもつ子どもの理解ととらえ方ー」をテーマに講義。グループディスカッションを交えた実践的な内容となり、「さまざまな課題に対応する特別支援教育コーディネーターや特別支援教育に関わる教員にとって、幅広い視点やスキルアップにつながる的確なアドバイスが得られた」と参加者から高い評価を得ました。



研修内で行われたグループディスカッションの様子

3. 両丹地区府立学校特別支援教育研究協議会 研修会（2025年11月18日）

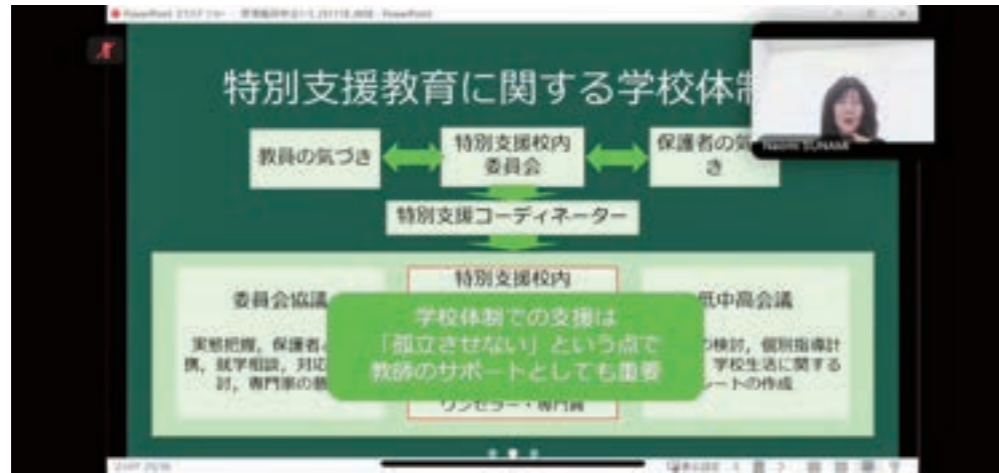
両丹地区府立学校特別支援教育研究協議会と本ユニットとの共催により研修会を実施。高校教員や管理職、京都府教育委員会関係者約35人が参加し、「保護者との関係構築」「事例に基づくケース演習」を中心としたオンライン講演を実施しました。



オンライン講演を真剣に見つめる参加者

4. 福知山市立学校管理職研修会（2025年11月18日）

福知山市教育委員会との共催により、校長約20人を対象にオンライン形式で実施しました。特別支援教育の最新動向やインクルーシブ教育、校長・副校長の役割について理解を深めました。



角南准教授によるオンライン研修会の様子

学校組織レジリエンスに関する研修

1. 京都府総合教育センタープロジェクト研究協議会（2025年7月11日）

福島ユニット長が、『『新たな教師の学びの姿』を実現する中堅教諭等資質向上研修の充実に向けて—中堅教諭等に求められる『新たな教師の学びの姿』とは—』をテーマに講演。

研修デザインや研修転移の視点を整理し、管理職の関与が人材育成サイクルを促進することを示しました。

また、不確実性の高い社会において学校組織がしなやかに適応・成長するためのレジリエンスの重要性を紹介しました。

2. 朝来市教頭研修会（2025年11月18日）

朝来市立小中学校の教頭13人を対象に実施。

「職員のメンタルヘルス」「職員間のコミュニケーション」をテーマに、福島ユニット長による講義とグループワークを行いました。

受講者からは、「実践に生かせる内容だった」「教頭としての在り方を振り返る機会となった」などの感想が寄せられました。



福島ユニット長による講義の様子

STL 助成金

事業概要

STL (Students Launch) 助成金は、本学学生が主体的に取り組む活動のうち、地域活性化に寄与し、成果が期待されるプロジェクトに対して活動費を助成する制度です。学生が自ら企画・実践する取り組みを支援することで、地域課題の解決に向けた実践的な学びの機会を創出しています。

2025年度は12件の申請があり、書類審査およびプレゼンテーション審査を経て、11件のプロジェクトが採択されました。採択団体は地域団体や企業、住民と連携しながら、多様な地域活動を展開しました。

[スケジュール]

時期	内容
2025年4月	申請書提出・書類審査・結果通知（継続枠）
2025年5月	申請書提出・プレゼンテーション審査・結果通知（新規枠）
2025年10月～11月	申請書提出・書類審査・結果通知（後学期追加配分）
2026年3月	成果報告会

STL 採択プロジェクトの紹介

GrowSpiral

GrowSpiral プロジェクトは、2023年度 NEXT 産業創造プログラムの PBL において、株式会社 Lifexia のイントレプレナー事業として立ち上げられました。学生の視点による社会課題の解決と、実践的な学びの場の創出を目的に活動しています。

2025年度は、地域資源を活用した商品の魅力発信として、「キキョウブランド」や美容ブランド「しるくのもと」などを活用したイベントの企画・出展を行い、商品の認知拡大に取り組みました。また、北近畿の地域資源であるオリーブの未活用素材に着目し、B型就労支援施設と連携して焼き菓子「オリーブフリアン」を企画・開発しました。地域資源と福祉を結びつけた、地域共創型のお土産づくりを進めています。

さらに、「オリーブフリアン」の認知拡大と市場ニーズの検証を目的としてクラウドファンディングを実施し、商品の背景にあるストーリーや社会的価値の発信を行いました。

これらの活動を通じて、学生が地域企業や福祉施設と協働しながら、商品企画・開発からマーケティングまでを実践的に学ぶ機会を創出するとともに、地域資源の新たな価値創出と認知向上につなげています。



B型就労支援施設と企画・開発した「オリーブフリアン」



「オリーブフリアン」クラウドファンディングを実施

アグリサーキュラーデザイン in Fukuchiyama

アグリサーキュラーデザイン in Fukuchiyama では、地域の企業や農家から出た規格外品や廃棄ロスを活用した商品開発やメニュー開発、プロモーションから販売までを行っています。今年度は GrowSpiral と共に B 型就労施設の工賃問題と廃棄ロスという社会課題を同時に解決する仕組みづくりを目指す「オリーブプロジェクト」を進めてきました。

このプロジェクトにおいて、フリーアの試作からパッケージデザイン、クラウドファンディングでの宣伝など幅広く活動してきました。

また、広報とフリーアプロジェクトのさらなる発展を目指し、第3回カルチャーフェスティバルでのポスター展示も行いました。



オリーブ農家を訪問し廃棄ロスに向き合う



第3回カルチャーフェスティバルでの展示ポスター

Tsunaga Room プロジェクト

「Tsunaga Room プロジェクト」は、「地方創生」をミッションに掲げて活動しています。運営するフリースペースでは、委託販売サービス「ハコカラ」を展開し、日本各地のクリエイターと地域住民をつなぐ仕組みづくりに取り組んでいます。

2025年度は、ご利用いただくクリエイターが50組を超え、多くの方々にご来場いただきました。ベビーカーに乗ったお子さんから93歳の高齢の方まで、世代を超えた多様な交流が生まれたことも、本プロジェクトの大きな成果の一つだと考えています。

また、「利用者から利用料を取らない」という持続可能な運営モデルを追求し、地域の方々に負担をかけることなく日常的な接点を生み出すことで、地域の活性化に寄与しています。



フリースペースでイベントが開催される様子 日本各地のクリエイター作品が集う「ハコカラ」



Drip Link

「Drip Link」は、コーヒーをきっかけに学生と地域住民が自然につながる場をつくることを目的に活動する学生団体です。

2025年度では、新町商店街にある Tsunaga Room にて土日のカフェ営業を継続し、地域の方が気軽に立ち寄れる交流の場づくりに取り組みました。また、市内のコーヒー焙煎所「Enjoy Coffee Roastery」の協力のもとオリジナルブレンドコーヒーを制作し、市内のベーグル専門店「福知山ベーグル研究所」と学祭でのフードコラボ出店も実施しました。さらに、コーヒー飲み比べイベントや市内の養蜂場「Honey Rock」との共同イベントを開催し、地域企業と連携した交流の機会を広げました。

これらの活動の中で、参加者同士の新たなつながりが生まれ、地域に根ざした団体として一歩ずつ実績を積み重ねた1年となりました。



ブレンドコーヒー制作にご協力いただいた「Enjoy Coffee Roastery」



大盛況となった「Honey Rock」との共同イベント

Nexus

本プロジェクト「Nexus」は、福知山市においてバドミントンを通じた地域交流と練習環境の提供を目的として立ち上がりました。福知山市では体育館の一般開放が少なく、市民や中学生・高校生が部活動以外で気軽にバドミントンをする機会が多くないという課題があります。そのため、バドミントンを引き付けに地域の人々と中高生がつながる場をつくり、スポーツを通して地域交流を生み出すことを目指しました。2025年度は当初想定していた形での事業実施には至りませんでした。活動の過程では地域のバドミントンサークルの方々との交流の機会があり、地域と関わりながら活動することの大切さを感じました。



スポーツを通して地域交流を生み出すことを目指す

IT お困り相談室プロジェクト

IT お困り相談室は、大学の AI サークル「FGR」メンバーが、福知山市の IT リテラシー向上に貢献したいという思いから立ち上げた学生プロジェクトです。

月2回の相談会を継続開催し、スマホの基本操作からアプリの導入・登録、各種設定、データ移行まで幅広い困りごとを対面でサポートしました。

学生が分かりやすい言葉で伴走し、世代を超えた交流の場にも。地域の方が“自分でできた”と感じられる成功体験を積み重ね、デジタル活用的一步を後押ししました。



月2回開催のITお困り相談室



世代を超えた交流の場にもなった

子どもの居場所づくりプロジェクト きっずすとぅに一

「子どもの居場所づくりプロジェクト きっずすとぅに一」は、大学生と子どもたちが一緒に食事をし、遊びや勉強を通じて、互いに安心して自由で楽しい時間を過ごせる場所です。活動を通して、保護者が自分の時間を持つことも考え、親子それぞれで充実した時間になるように取り組んでいます。活動は夏期（8月・9月）および冬期（2月・3月）を除く、毎月第3火曜日を基本として行っています。

2025年度は、新規の子どもたちが増え、この活動が地域の人たちに広がっていることを実感しました。これまでの運営の見直しを行うと共に、今後の課題がよくわかり、来年度のより良い運営に繋げていく1年でした。



本学学生食堂で大学生と子どもたちが交流する様子

nicoful

「nicoful」では、大学生の強みを最大限に活用し、地域住民の方々が地域を新たな視点から眺め、地元への関心を高めるきっかけを作ることなどを目的にフリーペーパーを作成しています。

企画・取材・編集をすべて学生自身で行い、絵・写真・文章などそれぞれの得意分野を活かし、一年間で一冊を完成させます。また、SNSを通してフリーペーパーの内容や活動の様子も発信しています。

今年度は、フリーペーパーの取材範囲の拡大に加え、地域団体と連携した動画制作にも挑戦しました。

大学生ならではの視点を活かし、地域の魅力を多角的に伝えることを目指して活動しています。



2025年度制作した「nicoful vol.5」表紙

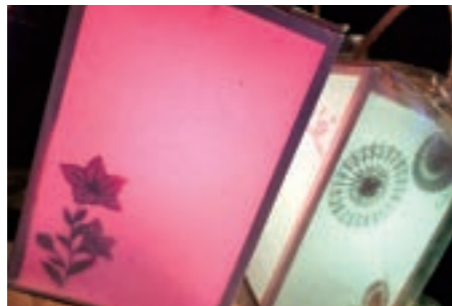


域団体と連携した動画制作にも挑戦

福知山プロジェクションマッピング2025

福知山プロジェクションマッピング2025は、「福知山イル未来と2025」に参加し、学生と地域住民の交流促進および地域イベントの活性化を目的に活動しました。

今年度は10月25日、26日の2日間にわたり実施し、来場者に向けて手持ち行燈の貸し出しとプロジェクションマッピングの展示を行いました。手持ち行燈は、来場者が会場内を回遊しながら楽しめるよう工夫したもので、2日間で延べ47組に貸し出しました。また、プロジェクションマッピングの展示により来場者に視覚的な演出を提供し、夜の会場の雰囲気をもっと深く体験できる機会を創出しました。これらの取り組みを通じて、イベントの魅力向上に寄与しました。



延べ47組に貸し出された手持ち行燈



イベント会場を彩ったプロジェクションマッピング

七福ふっこう隊

「七福ふっこう隊」は、能登半島地震で被害のあった石川県七尾市を中心にサロン活動や視察活動を月に一度行っています。現在の目的は、ボランティアとして能登の皆さんと継続的に関わりながら、地域と住民の皆さんが思う復興へ向けて、役割を考えることです。私たちは、防災や復興には「顔の見える関係が大切」だと考えています。そのため、サロン活動を通して住民どうしの関わりの機会を設けるほか、福知山市周辺で行われる防災訓練や防災系のイベントに参加し、写真展示を通して能登半島の現状について伝えています。また、災害が起こった時に何が必要か考えてもらうために「防災ポトルづくり」にも取り組んでいます。



サロン活動を通して住民どうしの関わりをつくる



福工大×芸観大コラボ企画課

「福工大×芸観大コラボ企画課」は、本学と他大学の学生間交流を促し、新たな発想や挑戦や生むことを目的に活動しています。2025年度は豊岡芸術文化観光専門職大学の学生と共にイベントを企画し、毎年4月に開催される「福知山お城まつり」にて、ストーリー性を持たせた、なぞ解きまち歩き企画「コラ坊の冒険」や、小学校の春休み期間に、放課後児童クラブでのAR体験等を実施しました。2026年度以降は活動の幅を広げ、芸観大の他に京都府内の他大学との交流もしていけるよう、京都市にある大学生交流スペース「学生プラス」に足を運ぶなど計画を進めています。



なぞ解きまち歩き企画「コラ坊の冒険」



放課後児童クラブAR体験の様子

STL採択プロジェクトの活動

STL採択プロジェクトはこの一年間、北近畿地域連携機構が主催する交流会や企業訪問などの機会に参加し、他団体とのコラボレーションや地域企業・団体との連携を広げてきました。こうした交流を通して、新たなアイデアの創出や活動の発展につながる機会が生まれました。



→P.31 産学連携組織 北近畿コラボスペース



→P.35 長田野工業団地との連携

STL2025 成果報告会

実施日：2026年3月24日

会場：本学4号館1階4101教室

STL2025 成果報告会では、STL助成金に採択された11団体が順に成果を発表し、1年間の活動内容や成果、今後の課題・展望について共有しました。各団体からは、団体概要や目的、活動内容、収支報告などの説明が行われ、参加した教職員や学生からの質問に応じました。



STL2025成果報告会チラシ



STL2025成果報告会で、教員からの質問を受けるSTL採択団体の様子

初めて助成を受けた団体からは、地域住民と学生の交流の場づくりを目的としたイベント開催や、地域の店舗・団体と連携した取り組みの成果が報告されました。また、クラウドファンディングを活用した事業の実施や利用者分析、顧客獲得の工夫など、具体的な活動内容や運営上の苦労、やりがいについても共有されました。

このほかにも、地域との協働によるイベントの実施や新たな事業への挑戦など、各団体が特色ある活動成果を発表しました。本報告会を通して、学生が主体的に取り組んできた成果が共有され、今後の学びや地域連携活動につながる有意義な機会となりました。

シニアワークカレッジ

担当教員 情報学部：畠中利治教授、山本吉伸教授、橋田光代准教授、渡邊扇之介准教授

事業概要

地方における労働力不足の顕在化が今後さらに深刻化する中、その対応には行政や企業、事業所におけるデジタルトランスフォーメーション（DX）の推進と、シニア世代の更なる活用が不可欠です。本事業は、これらの課題解決を目的として、福知山市の委託を受け、シニアを中心に幅広い世代を対象とした、ビジネスに役立つ高度な情報教育を提供しています。この取り組みは2025年度で5年目を迎えています。

[受講状況（業種別）]

区分	製造業	建設業	学習・教育・支援業	無業	小売業・卸売業・（教員除く）公務	農業・林業	物品賃貸業・不動産業	医療・福祉	サービス業	情報・通信業	その他・サークル等	合計
数理・データサイエンスコース	1人				1人	1人						3人
Pythonプログラミング入門とドローンの自動操縦コース	2人		1人	3人				1人		1人	1人	9人
広報用動画制作コース	1人		1人	2人	1人			1人				6人
生成AIコース【基礎】	7人	2人	6人	4人	4人	1人		4人		2人	10人	44人
生成AIコース【応用】	1人	1人	3人			1人				1人	2人	9人
合計	12人	3人	11人	9人	6人	6人	1人	0人	6人	0人	4人	71人

数理・データサイエンスコース

担当：畠中利治教授、渡邊扇之介准教授

データサイエンスおよび数理最適化をテーマとした全8回の講座を開催しました。

本講座は、現代社会において必須のリテラシーとされる情報学およびデータサイエンスの基礎を体系的に学び、ビジネスや業務課題の解決に直結する応用力を養うことを目的として実施しました。

前半（第1回～第4回）では、データサイエンスの概論をはじめ、記述統計の基礎として数値データの可視化や代表値の計算などを取り上げ、データを正しく読み解くためのリテラシーを養いました。データの特性を把握し、客観的に分析するための基本的な考え方について、具体例を交えながら解説しました。

後半（第5回～第8回）では、現代社会を支える数理最適化に焦点を当て、生産計画、輸送計画、配属問題、受注管理、経路選択などの具体的なビジネス課題を題材に、数理的アプローチによる最適化手法を学びました。理論の解説にとどまらず、PCを用いた演習も取り入れることで、学んだ知識を実務へ応用する力の養成を図りました。

受講者アンケートでは高い満足度が示され、「統計的品質管理への応用や現場での管理図作成に活用できそう」といった実践的な展望や、「学ぶことの楽しさを改めて実感した」といった前向きな感想が寄せられました。講師による丁寧な解説と質疑応答も評価され、少人数ながら充実した学習機会となりました。



渡邊准教授による数理最適化の説明

[終了後アンケート]



Python プログラミング入門とドローンの自動操縦コース

担当：山本吉伸教授

本講座は、市民を対象に、達成感を得られる実践的なプログラミング入門を提供することを目的としています。短期間の体験型講座では習得内容が限定的になりがちであるという課題を踏まえ、最終的に成果が形として実感できるカリキュラムを構成しました。

講座では、環境構築から始め、Pythonの基本構文（演算子、制御構文、関数）を段階的に学習しました。学びの集大成として、教育用ドローンをPythonコードで制御する課題に取り組み、プログラムによる自動化や制御の仕組みを体験的に理解できる内容としています。受講者自身のPCや大学の機材を用いた実践形式を進めるとともに、Zoomによる補講日を設けるなど、学習を支援する体制も整えました。

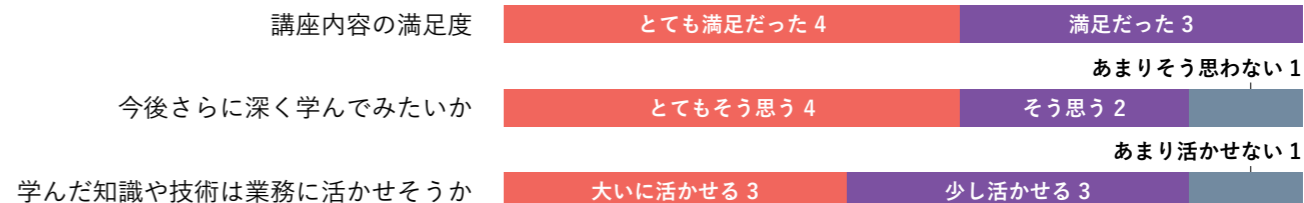
アンケートでは高い満足度が示されました。特に、ドローンが実際に飛行した際の達成感や、学生TAによる丁寧なサポートが高く評価されています。また、業務でのデータ処理や社内システム連携など、実務への活用可能性を見出す声も寄せられ、学習内容が現場での実践につながる手応えがうかがえました。

今後は、発展的内容を扱う機会の提供や、継続的に学べる仕組みづくりについて検討することが課題です。



山本教授の指導のもと行ったドローン操縦

[終了後アンケート]



広報用動画制作コース

担当：橋田光代准教授

本講座は、自らの業務や地域活動における情報発信力の向上を目指し、インターネットやSNS向けの広報動画を自ら企画・制作できる力を身につけることを目的としています。

講座では、撮影・編集・音響効果といった動画制作の基礎技術を学ぶとともに、コンセプト設計やシナリオ作成など、企画構成の考え方についても扱いました。単なる操作方法の習得にとどまらず、「誰に」「何を」「どのように伝えるのか」という視点を重視し、効果的な情報発信のあり方を考える内容です。

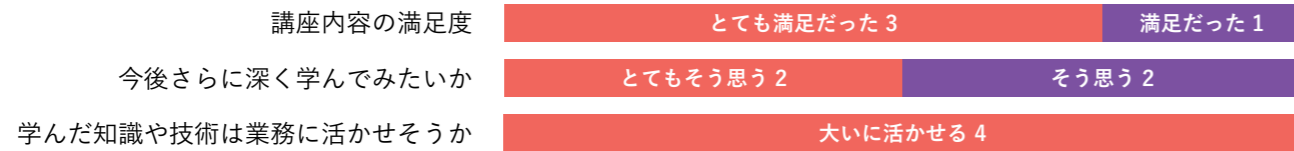
また、受講者自身が素材を収集し、それをもとに映像作品を制作する演習にも取り組みました。企画立案から編集、完成までの一連のプロセスを体験することで、実践的なスキルの定着を図っています。制作過程では、構成や編集の工夫について随時フィードバックを行い、表現の質を高めるサポートを行いました。

受講者は少人数であったため、個々の目的や関心に応じたきめ細かな指導が可能な環境となりました。その結果、それぞれが自身の活動や業務に活用できる動画作品を完成させています。本講座は、動画を活用した情報発信の可能性を広げる機会となりました。



橋田准教授と学ぶ動画制作の基礎技術

[終了後アンケート]



生成 AI コース【基礎】と【応用】

担当：野村修教授

今年度は、生成 AI コース【基礎】および【応用】を新たに開講しました。本講座は、近年急速に普及する生成 AI について、基礎的な仕組みの理解から実践的なプログラミング実装までを段階的に学ぶことを目的としています。

基礎編では、ChatGPT 等のツールを活用した体験を通じて、生成 AI の活用方法や技術的背景（歴史や仕組み）を学び、適切なリテラシーの習得を図りました。定員 30 人に対し 44 人の受講があり、関心の高さがうかがえます。

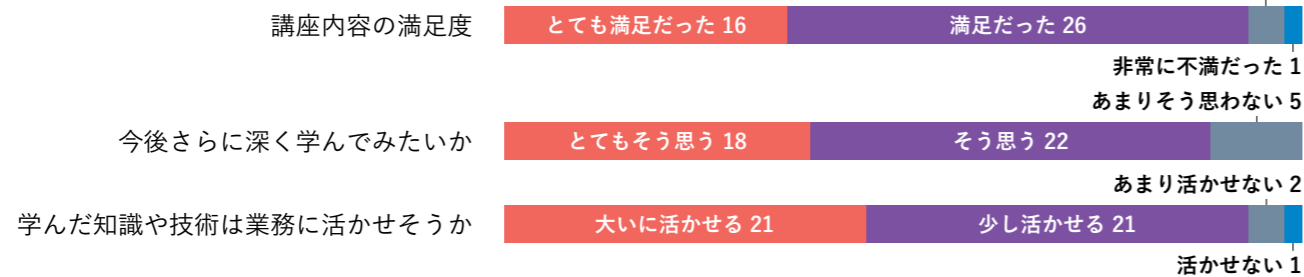
応用編では、Python を用いたプログラミング演習を行い、API を通じて生成 AI を実行・カスタマイズする方法を学びました。環境構築からプログラム実装までを実践的に扱い、AI システムの内部動作を理解する内容です。少人数での実施により、技術的に難度の高い内容にも丁寧に取り組むことができました。

一方で、応用編については進捗の速さを指摘する声もあり、特に初学者にとっては復習時間の確保が課題となりました。今後は、基礎と応用をつなぐ中級的な位置づけの講座やフォローアップ体制の充実を検討し、継続的な学習機会の整備を図る必要があります。



野村教授による生成AI活用デモンストレーション

[終了後アンケート]



シニアワークカレッジ 受講者コメント

- 社会人になってからは業務に追われる日々でしたが、今回のシニアワークカレッジを通じて、学ぶことの楽しさを改めて実感いたしました。
- 今年度も新たな講座を受講させて頂き、学生さんたちに助けてもらいながらも、楽しく学ぶことができました。
- 新しい世界に出会わせてもらい、感謝します。今後も興味関心を広げるきっかけとなる講座を期待しています。
- 大学教授の授業をゼミの学生の支援を受けながら地域の公立大学で学べるという点で、日常ではない時間を過ごすことができました。
- 先生に詳しくご指導いただき、学生さんにも困ったところをサポートしていただき、自分のペースで楽しく学ぶことができました。
- 年齢を重ねるほどに、何歳になっても学びたいと思うようになりました。福知山に公立大学があり、そこで学べる機会を与えてくださるのはとてもありがたいです。
- 今回は、受講生が大変多く、生成 AI への関心の高さがうかがえました。話題的にもタイミングが良かったものと考えます。今後も旬な話題の講座を提供していただければ幸いです。
- 市民や市内で働く方々に向けた講座であり、多くの方々が興味を持たれている生成 AI やドローン、python などの講座は魅力的に感じています。
- 多くの方が出席されている様子を目の当たりにし、学ぶことの大切さを実感しました。
- 近畿北部の知の拠点としての公立大で学べることは、市民として最大のメリットと感じています。

小学生のためのプログラミング教室、 中学生のための夏休み IT 講座

担当教員 情報学部：池野英利教授、橋田光代准教授、藤井叙人講師、眞鍋雄貴講師

事業概要

福知山市・丹波市・朝来市の小中学生を対象に、本学情報学部の教員および学生が、情報技術の楽しさや面白さを優しく丁寧に伝えるプログラミング教室および夏休み IT 講座を開催しました。教室では計 4 講座を提供し、体験を通じて学ぶ機会を創出しました。

本事業は、プログラミング体験を通じて子どもたちに論理的思考や発想力の大切さを学んでもらい、北近畿地域における将来の情報人材の育成に寄与することを目的としています。また、本学と福知山市・丹波市・朝来市の 3 市による連携事業の一環として、将来の産業発展を支える人材の定着や地域を担う人材の育成、産業振興および地域課題の解決につなげることも目指しています。

包括協定団体である丹波市および朝来市とのプログラミング教室における連携は、2025 年度で 4 年目の取組となりました。福知山市を含む関係 3 市から多数の申込をいただき、受講者アンケートの満足度調査では、多くの回答者がプログラミングに興味を持てたと回答する結果となりました。

小学生のためのプログラミング教室

ゲームでプログラミング

担当：藤井叙人講師

日時：2025 年 8 月 7 日（木）～ 8 月 9 日（土）13:00～17:00

小学 5～6 年生を対象に、プログラミング教室「ゲームでプログラミング」を実施しました。本教室では、Minecraft (Minecraft Education Edition を含む) と MakeCode を活用し、ゲームの世界の中でプログラミングの基礎を学ぶ構成としました。MakeCode は直感的な操作でプログラムを作成でき、実行結果が Minecraft 上にすぐ反映されるため、視覚的に理解しやすく、試行錯誤を重ねながら主体的に学ぶことができます。ゲーム性を取り入れることで学習意欲の向上と持続を図りました。

本教室は藤井ゼミの地域情報 PBL の一環として実施し、1 年生 6 人、2 年生 4 人の計 10 人が準備・運営に携わりました。1 年生は教材作成と担当範囲の授業実施、2 年生はサンプルプログラムの作成や全体調整、1 年生の支援を担いました。事前に資料の添削や授業練習、環境整備を重ね、当日はきめ細かなサポートができる体制を整えました。

教室は 3 日間で、20 分授業・30 分作業・10 分休憩のサイクルを基本に進行しました。条件分岐や繰り返し、変数などの基礎を学んだ後、建築物をプログラムで制作し、最終日は自由制作と発表を行いました。福知山城や大学校舎を再現したワールドも活用し、地域への親しみと創作意欲を高めました。

参加した 14 人の児童はグループごとに協力しながら制作に取り組み、発表では工夫した点や今後挑戦したいことを自分の言葉で伝えてくれました。オリジナル作品を完成させる姿から、楽しみながら論理的思考と表現力を育む機会となったことがうかがえました。

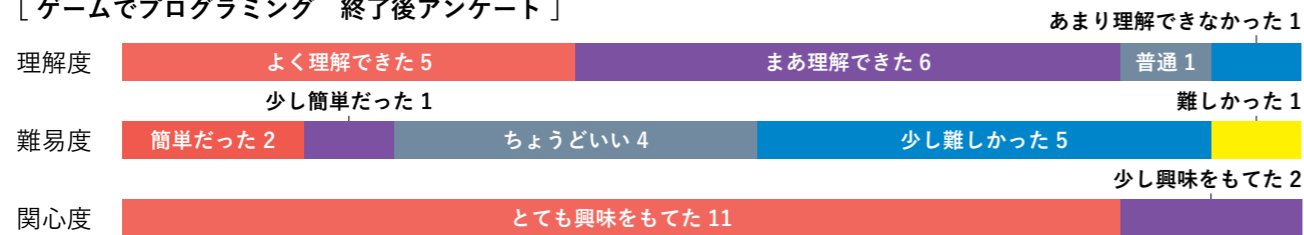


MakeCodeを用いて建築プログラムを作成する児童

[受講状況]

自治体名	参加者(申込者)
福知山市	10人
丹波市	2人
朝来市	2人
計	14人 (35人)

[ゲームでプログラミング 終了後アンケート]



参加者コメント

- 先生や大学生の皆さんがとてもやさしく、良い思い出になりました。
- また来年も参加したいです。今度はジェットコースターを作ってみたいです。
- プログラミングをやってみて、とても興味を持つことが出来ました。少し難しかったけど楽しかったです。

プログラミング道入門

担当：眞鍋雄貴講師

日時：2025年8月7日(木)～8月9日(土) 13:00～17:00

プログラミング経験のある小学5・6年生を対象に、実務でも広く用いられているプログラミング言語 Python を扱った発展的なプログラミング教室を開催しました。本教室では、講義を担当する眞鍋講師に加え、受講生一人ひとりに本学情報学部の学生をアシスタントとして配置し、きめ細かな支援体制を整えました。授業は、50分の演習講義と10分の休憩を1セットとし、これを各日4回繰り返す構成で実施しました。加えて、円滑な運営のために全体把握や記録撮影を担当する学生も配置しました。

初日前半は入門編として、プログラミングの基本概念と Python の基礎を扱いました。各内容をクイズ形式で提示し、まず自分で考えてから実際にソースコードを入力・実行する流れとすることで、直感と結果の違いを体験的に理解できるよう工夫しました。初日後半から2日目1時間目にかけては基礎編として、リスト、繰り返しや条件分岐などの制御構造、関数、モジュールといった重要な仕組みを学びました。コードを書いて動作を確認することを通して、概念の定着を図りました。

2日目後半からは応用編として簡単なゲーム制作に取り組みました。コードを書き進めながらゲームが完成していく過程を体験し、これまで学んだ内容がどのように活用されているかを理解してもらいました。3日目は拡張編として、完成したプログラムを各自が改良し、動きの異なる作品へと発展させ、最後に発表を行いました。講師作成の教材やソースコードは作品とともに USB メモリに収録し、継続学習につなげられるようにしました。



学生のサポートを受けながらプログラムを作成する児童



[受講状況]

自治体名	参加者(申込者)
福知山市	6人
丹波市	1人
朝来市	0人
計	7人 (8人)

[プログラミング道入門 終了後アンケート]



参加者コメント

- 先生の説明が分かりやすく、大学生も優しくサポートしてくれたので、ゲーム作りは難しかったですが最後までやり遂げることができ、とても嬉しかったです。
- 難しかったけど、分かりやすいところもあって楽しく取り組みました。
- いつもパソコンを使っているのですが、思っていたよりも簡単でした。また来年も参加したいです。

中学生のための夏休み IT 講座

ロボットカー製作講座

担当：池野英利教授

日時：2025年8月8日(金) 13:00～17:00

今年度は、1日完結型の講座を2回実施しました。1回目は夏休み期間中に本学を会場として開催し、2回目は10月の土曜日に夜久野ふれあいプラザへ出張して実施しました。いずれも、教育用ロボットカーを組み立て、その動作を制御するプログラムについて学ぶことをテーマとしました。

本学会場での講座では、午前中にロボットカーの組み立てを行い、テスト走行用のプログラムを作成して基本的な動作確認を行いました。午後は、赤外線コントローラを用いたリモコン走行、光センサを活用したライントラッキング走行、超音波センサによる衝突回避機能の実装に取り組みました。各種センサを実際に取り付け、それらを活用するプログラムを作成して走行させることで、プログラムがモータを制御している仕組みや、パラメータの調整によって走行性能が変化することを体験的に理解できる内容としました。

組み立てからプログラム実装、動作確認までを一連の流れとして体験できる構成としたことで、短時間でも達成感のある学習機会を提供することができました。一方で、内容が多岐にわたったため、プログラムの詳細な仕組みまで丁寧に解説する時間を十分に確保することが難しく、主にパラメータを変更して動作の違いを確認する段階にとどまった点は課題として残りました。講座内容と時間配分のバランスについて検討する必要性が明確となり、次年度に向けた改善の方向性を得る機会となりました。



センサの反応を確認しながらプログラムを改良する生徒

出張講座（10月・夜久野ふれあいプラザ）

夜久野ふれあいプラザでの開催は、本学が地域に赴いて学習機会を提供する取組として意義のあるものでした。一方で、定員8人に対して申込は2人にとどまりました。その要因として、中学校の定期試験のおよそ2週間前という時期であったこと、また夜久野地区が市街地から距離があり、市内中学校の生徒にとって参加しづらい立地であったことが考えられます。遠隔地での開催は対象となる母集団が限定されるため、申込数が伸びにくいという課題が明らかになりました。

他方、少人数での実施であったことから、受講生一人ひとりの理解度に応じた丁寧な個別対応が可能となりました。その結果、講座は円滑に進行し、1日で予定していた内容を十分に実施することができました。参加者の満足度も高く、少人数ならではのきめ細かな指導による学習効果が得られたものと考えられます。

また、両講座に共通して、補助を担当した学生にとっても大きな学びの機会となりました。教材の事前組み立てや資料作成、提供プログラムの不具合修正などに主体的に関わることで、知識の定着だけでなく、実践的な問題解決力や運営力を養う経験となりました。

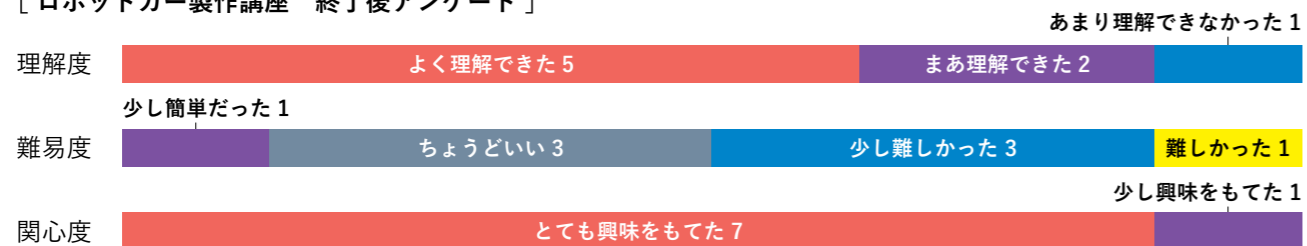


夜久野ふれあいプラザで実施したロボットカー製作講座の様子

[受講状況]

自治体名	参加者(申込者)
福知山市	6人
丹波市	0人
朝来市	2人
計	8人(8人)

[ロボットカー製作講座 終了後アンケート]



参加者コメント

- 大学生の皆さんが丁寧に優しく教えてください、安心して楽しく取り組むことができました。
- パソコンでのプログラミングは英語や専門用語が多く難しく感じましたが、とても楽しく学ぶことができました。
- 初めての制作でしたが、説明がとても分かりやすく、最後までうまく完成させることができました。

サウンドクリエイト講座

サウンドクリエイト講座

担当：橋田光代准教授

日時：2025年8月7日（木）～8月9日（土）13:00～17:00

各中学校で導入されているiPadには、楽曲制作アプリGarageBandが標準搭載されていますが、本来は教育用途を前提とした設計ではないため、入門者にとっては操作が難しく感じられる場合もあります。本講座では、専門的な音楽知識に必ずしも依らず、「選ぶ」「組み合わせる」「繰り返す」というプログラミング的思考を手がかりに、短時間で多様な楽曲制作を体験できる内容としました。会場は1テーブルを囲む配置とし、橋田ゼミ所属の学生3人がサポートを担当しました。

1日目は、GarageBandの起動方法や基本操作、画面構成を学んだ後、演奏機能を用いてさまざまな楽器音に触れました。鍵盤やギター、ドラムなどの画面操作を通じて音色や音階の違いを体験し、音への理解を深めました。続いて、講座の中心となるLive Loops機能を学び、数百種類の音源から好みの素材を選び、格子状の画面に配置して再生する方法を習得しました。A・B・Cの三部構成でシンプルな楽曲制作に取り組み、イヤホンを使用して試行錯誤を重ねながら制作しました。制作データは自宅でも継続できるよう配慮しました。

2日目は、前日の作品発表に続き、ABA形式の制作やリレー方式、大学生との共同制作などを行い、他者のアイデアを発展させる体験を重ねました。3日目は自由制作の仕上げと発表を行いました。

受講生は操作にすぐ慣れ、主体的に機能を試す姿が見られました。特にリレー制作は好評で、少人数ならではの活発な学びの場となりました。

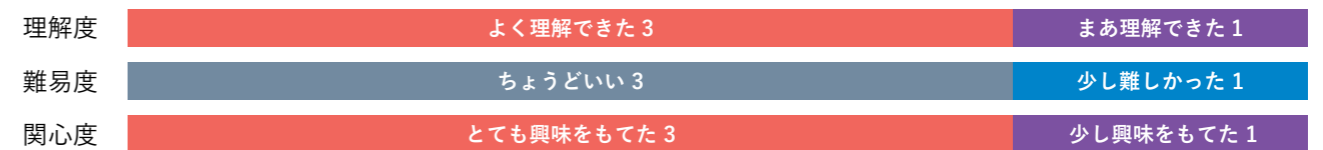


GarageBandを用いて楽曲制作を行う生徒

[受講状況]

自治体名	参加者(申込者)
福知山市	3人
丹波市	1人
朝来市	0人
計	4人(5人)

[サウンドクリエイト講座 終了後アンケート]



参加者コメント

- 大学生と一緒に共同制作をしたり、曲の一部をつないでリレー形式で音楽を作ったり、完成した作品を発表して交流できたことがとても楽しかったです。
- 1日目は操作が難しく感じましたが、2日目、3日目と続けるうちにだんだん分かってきて、3日目の最後に完成した曲はとてもよい曲になったと思います。
- 前から音楽を作りたいと思っていたので、学校のタブレットに入っているアプリを使って自分で音楽を作ることができ、とても楽しかったです。

産学公連携組織 北近畿コラボスペース

きっかけや背景

本学では産学公連携体制として、2022年までは対面会議がメインである「北近畿地域連携会議」を運営していました。しかし、この会議では会員同士が自発的に連携する仕組みがなく、さらにコロナ禍により会議自体が開催できない状況が課題として浮き彫りになりました。こうした背景を踏まえ、情報ツールを活用して連携や情報共有を促進し、新たな価値創出を目指す産学公連携組織「北近畿コラボスペース」を立ち上げました。2022年12月には設置記念交流会を開催し、2023年度には拡大期として会員数の増加を目指し、自治体との共催による交流会を実施しました。さらに2024年度、2025年度と継続して、自治体等との共催による交流会や全体集會を実施し、多様な連携を深めています。

活動内容

北近畿コラボスペース全体集會

実施日：2025年6月14日（土）

会場：福知山公立大学食堂「PILLAR Dining」

北近畿コラボスペース全体集會を開催し、活動報告や会員同士の交流、本学学生による課外活動のプレゼンテーションを実施しました。

はじめに川添学長による開会挨拶、西田副学長からのこれまでの活動報告と今後の展望についての発表がありました。続いて実施された「ユニット+STLのピッチ『フラッシュリレー』」では、教職員による地域課題解決に向けたユニット活動と、学生主体で地域とつながるSTL (Students Launch) プロジェクトの11チームが、それぞれの活動成果を3分間で発表しました。

イベントの後半では、大学職員の原田翔さんによる観客参加型の即興トークショーや、橋田先生の指導のもと「ふるさと」のハンドベル演奏を参加者で楽しみました。この集會には総勢36人が参加しました。



全体集會での活動発表の様子

北近畿コラボスペース交流会 with 社会福祉協議会

実施日：2025年7月12日（土）

会場：福知山市総合福祉会館

「北近畿コラボスペース交流会 ～"福祉"ってなあに？福祉のプロに聞いてみよう！～」を開催しました。

今回は、福知山市社会福祉協議会とのコラボレーションで、他機関と共催という初の試みとなりました。当日は、本学学生、明治国際医療大学の学生を中心に約20人が参加しました。

前半プログラムでは、STL採択団体である「アグリサーキュラーデザイン」「nicoful」「GrowSpiral」「Tsunaga Room」の4団体が活動紹介を行いました。後半は「"福祉"ってなあに？福祉のプロに聞いてみよう！」と題し、福祉の現場で活躍する専門職をゲストに迎えたワールドカフェ形式の交流プログラムを実施しました。高齢、障害、児童、地域といった多様な福祉分野の実践者が各グループを順に回り、参加者との対話を通じて、仕事の内容ややりがい、課題について紹介しました。

本交流会は、地域の福祉専門職と学生が直接つながる貴重な機会となり、今後の活動や連携のきっかけとなりました。



ワールドカフェで福祉について学ぶ参加者たち

北近畿コラボスペース交流会 in 与謝野

実施日：2026年1月10日（土）

会場：与謝野町石川農業構造改善センター

「北近畿コラボスペース交流会 in 与謝野 ～Next Generation Agri～」を開催しました。

今回は、与謝野町との連携のもと、農業をテーマにした企画として実施し、与謝野町で活躍する若手農業者をはじめとする地域関係者、企業、本学教職員・学生など約30人が参加しました。

前半プログラムでは、株式会社AGRIST代表取締役の太田桂史氏を講師に迎え、「Next Agriのビジョン」と題した特別講演が行われました。太田氏からは、農業の3K（きつい・汚い・危険）のイメージを払拭し、若者にとって魅力ある職業とするための実践について紹介がありました。ドローンや自動操舵システム、圃場管理アプリの導入といった積極的な機械投資による効率化、多様な農産物の生産と地域循環型農業の推進、従業員の働きがいや待遇改善に向けた取り組みなど、次世代の農業法人としての挑戦が語られました。

続いて、STL採択団体である「Tsunaga Room」「GrowSpiral」「アグリサーキュラーデザイン」の3団体が活動紹介を行いました。後半は、参加者による自己紹介タイムが設けられ、特に与謝野町から参加された若手農業者を中心に、各自の取組や地域の魅力が共有されました。交流会終了後には同会場にて懇親会も開催され、引き続き参加者同士の交流が深められました。



若手農業者を中心に行われた自己紹介タイムの様子

成果や課題

昨年から比べて、会員や連携団体数は以下のように大きく増加しました。

[会員・連携団体の増加状況]

	2025年1月末	2026年3月末
会員数	302人	402人
連携団体数	73団体	81団体

2025年度は、全体集會1回、交流会2回を開催し、福知山市社会福祉協議会との共催や与謝野町での開催など、これまでにない新しい展開が実現しました。会員や連携団体も着実に増加し、Slackを活用した日常的な情報交換や、リアルな場での交流を通じて、産学公連携のネットワークが一層充実してきています。

学生からは「多様な分野の方々と気軽に連絡を取り合えるようになり、視野が大きく広がった」といった声が寄せられており、学生が地域で活躍する機会も増えています。

今後は、さらに多様な分野・地域との連携を深め、具体的な共創プロジェクトの創出を促進していくことが課題となっています。

北近畿コラボスペースの 会員登録はこちら
会費は無料※今後変更となる場合がございます。



登録申請用QRコードです。
※申請から登録完了まで
3～5日程度かかることがあります。

北近畿コラボスペースとは

「slack (スラック)」というチャットツールを使い、Web上で意見交換・情報共有を行うことができる新しい形の産学公連携組織です。オープンで簡単につながることによって新しいアイデアが生まれることを目指します。

市民講座

担当教員 地域経営学部：神谷達夫教授、情報学部 才木常正教授

事業概要

本学が有する専門的知見を広く市民に還元し、持続可能な地域社会の形成に寄与することを目的として、市民講座を開催しています。2025年度は、地域経営学部および情報学部よりそれぞれ1回、計2回の講座を実施しました。

観光行動データ分析の最前線～福知山から未来へ～

開催日：2025年7月4日（金）18:30～19:45

講師：本学地域経営学部 教授 神谷達夫

会場：福知山公立大学4号館1階102教室

講座のポイント

観光地を訪れる人々が「どこを歩き」「何に関心を持ち」「どのように滞在しているのか」を把握することは、地域の魅力を引き出し、効果的な観光施策を検討するうえで重要です。

近年は、従来のアンケート調査に加え、GPSや無線LANなどの位置情報技術を活用することで、観光行動をより詳細に把握することが可能になっています。

本講座では、こうした技術を用いた観光行動データの分析手法について、福知山での事例を交えながら紹介しました。あわせて、AI（人工知能）を活用した新たな分析システムの開発状況や、今後の観光地づくりへの展望についても解説しました。

講座の内容

本講座は本学4号館1階102教室で開催し、20人が参加しました。

講演では、Wi-FiパケットセンサーやGPS（NSS）、デジタル小電力無線などの位置情報技術を活用し、観光者の移動経路や滞在傾向を可視化・定量化する取り組みが紹介されました。北近畿エリアにおける観光者の滞在データや移動履歴の分析事例をもとに、地域観光の現状と可能性について具体的な説明がありました。

また、福知山城で開催されたイルミネーションイベント「イル未来と」における調査結果を例に、実際のデータから読み取れる行動特性や空間利用の傾向が示されました。混雑緩和を目的とした「ディスタンス行燈」の取り組みも紹介され、データと空間設計を組み合わせた実践例として関心を集めました。



神谷達夫教授による講演



第1回市民講座チラシ

さらに、プライバシーに配慮したAI（大規模言語モデル）による画像・音声データの要約や分析といった先端的研究にも触れ、今後の観光政策や地域振興への応用可能性が示されました。会場では熱心に聴講する参加者の姿が見られ、地域観光とデータ活用への関心の高さがうかがえました。

生体計測技術が切り拓く将来の地域産業～私の研究開発事例をもとに紹介～

開催日：2025年12月12日（金）18:30～19:45

講師：本学情報学部 教授 才木常正

会場：市民交流プラザふくちやま

講座のポイント

ヒューマンインタフェース技術やMEMS（微小電気機械システム）技術を活用した「生体計測」は、安心・安全な社会の実現に向けて大きな可能性を持っています。

本講座では、釣りやダイビングなどの海洋レジャーにおける研究事例を紹介するとともに、心電図や筋電図などの生体情報の計測方法を分かりやすく解説しました。さらに、これらの研究成果を北近畿地域の一次産業へどのように応用できるのか、その将来展望についても考える機会となりました。

講座の内容

本講座は、市民交流プラザふくちやまで開催し、7人が参加しました。

講演では、ヒューマンインタフェース技術およびMEMS技術を基盤とする生体計測の研究開発について、具体的な事例を交えながら紹介しました。

前半では、半導体製造技術を応用した超小型センサーの仕組みを解説し、株式会社がまかつとの共同研究による「釣り支援システム」の開発事例が紹介されました。釣り竿の先端に取り付けたセンサーによって魚の微細な動きを検知する技術であり、レジャー分野における新たな応用例として注目を集めました。

後半では、スキューバダイビング時の安全性向上を目的とした、生体情報計測技術について説明がありました。海水を活用して筋肉の疲労度を測定する新たな手法に加え、心電図や筋電図、行動データの計測方法についても丁寧な解説が行われました。

さらに、水産業や農業など北近畿地域の一次産業への応用可能性や、公設試験研究機関の役割についても言及があり、先端技術と地域産業の接点を具体的に考える機会となりました。



才木常正教授による講演



第2回市民講座チラシ

長田野工業団地との連携

きっかけや背景

長田野工業団地は、福知山市の産業を支える中核的な工業団地として、多様な分野の企業が集積する地域産業の拠点です。本学では、地域に根ざした企業との連携を通じて、学生が最先端のものづくりや技術開発の現場を体感し、実践的な学びを得る機会を創出することを目的に、工業団地内企業との交流事業を展開しています。また、本取り組みは学生の教育機会の創出に加え、教員が地域企業の技術や事業内容への理解を深め、共同研究や産学連携の可能性を探る契機としても位置づけています。

2025年度は、株式会社PILLARおよびエスベック株式会社福知山工場との連携により、工場見学・交流会を実施しました。地域に立地する世界水準の企業を訪問し、その技術力や企業理念に触れることで、地域産業への理解を深める取り組みとなりました。

活動内容

株式会社PILLAR工場見学・交流会

実施日：2025年9月16日（火）

会場：株式会社PILLAR第2工場（福知山市）

株式会社PILLARは、大阪市に本社を置く機械メーカーであり、水・油・薬液・ガスなどを制御する流体制御機器を製造販売しています。特に半導体製造装置向けのふっ素樹脂製継手において高いシェアを有する東証プライム上場企業です。

当日は、企業概要の説明の後、工場内を見学し、製品開発の歴史や製造工程、品質管理体制について学びました。精密な製品を支える高度な技術力と現場での丁寧な作業工程を間近に見ることで、ものづくりの現場に対する理解を深めました。

見学後には、「PILLAR基金」により支援を受けている学生団体STL (Students Launch) が活動発表を行い、3チームが地域での取り組みを紹介しました。企業担当者からは具体的な質問や助言が寄せられ、今後の連携可能性についても意見交換が行われました。



株式会社PILLAR第2工場での交流・見学の様子



発表を行った STL 採択団体

- GrowSpiral
- アグリサーキュラーデザイン in Fukuchiyama
- Tsunaga Room プロジェクト

また、同社とは教育環境整備の面でも連携が進んでおり、2025年4月より本学食堂施設のネーミングライツパートナーとしてご支援をいただいています。食堂の愛称は「PILLAR Dining」となり、本学初のネーミングライツ契約として、地域企業と大学の新たな協働の形を築いています。



本学食堂施設「PILLAR Dining」

エスベック株式会社工場見学会

実施日：2026年2月19日（木）

会場：エスベック株式会社福知山工場

エスベック株式会社は、環境試験器の分野で国内外トップシェアを誇る企業です。自動車や電子部品などの「使用環境（温度・湿度・光など）」を再現し、製品の信頼性・安全性を評価する技術で社会を支えています。福知山工場は同社の「マザー工場」として、世界最高水準の技術を担う重要拠点です。

当日は、DVDおよびスライドによる工場概要説明の後、標準製品工場3か所を見学しました。環境試験器の社会的役割や製造工程への理解を深めるとともに、品質を支える現場の工夫や高い技術力を学ぶ機会となりました。見学後には質疑応答の時間が設けられ、活発な意見交換が行われました。



西田北近畿地域連携機構長による挨拶



見学を実施した福知山第2工場
(写真提供:エスベック株式会社)

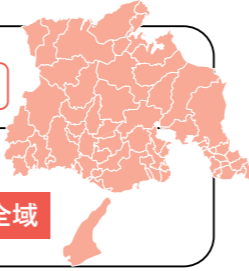
成果と今後の展望

本取り組みを通じて、学生は地域に立地する世界水準の企業の技術力や製造現場を直接体験し、地域産業への理解を一層深めることができました。また、企業との対話や活動発表を通じて、実社会で求められる視点や課題意識に触れる貴重な学びの機会となりました。さらに、教員にとっても地域企業の技術や事業内容を直接知る機会となり、今後の共同研究や産学連携につながる関係構築の場としても機能しています。

今後も長田野工業団地をはじめとする地域企業との連携を継続・発展させ、工場見学や交流事業を通じた実践的な教育機会の充実を図ります。大学と企業の双方向の関係構築を進めることで、地域社会への貢献と新たな価値創出につなげていきます。

経済産業省「地域の人事部」事業における講演・講義の実施

対象地域



担当教員／地域経営学部 教授 亀井省吾
関係組織／MIYAZU 未来デザインセンター
(宮津市・京都北都信用金庫・人材ニュース株式会社)

きっかけや背景

少子高齢化や人口減少の進行に加え、デジタル化への対応、物価高、人材不足、賃上げ対応など、地域中小企業を取り巻く経営環境は大きく変化しています。さらに、経営者の高齢化に伴う事業承継の課題も重なり、企業の持続的成長に向けた経営の高度化・アップグレードが急務となっています。

こうした状況を踏まえ、経済産業省「地域の人事部」事業の一環として、MIYAZU 未来デザインセンターより依頼を受け、都市圏ビジネス人材と地域企業との新たな接点を創出することを目的に、講演および講義を実施しました。

研究・事業内容

MIYAZU 未来デザインセンターでは、経済産業省令和7年度「地域の人事部」事業として、京都府北部5市2町に本社を置く「海の京都」地域企業と都市圏ビジネス人材をつなぐ「経営幹部(CxO候補)インターンシップ・プログラム」を実施しています。インターンは2025年11月1日から2026年1月31日までの3か月間(最長6か月)、月2回程度の現地勤務を行い、経営者・従業員と協働しながら、事業成長シナリオや企業価値向上計画の策定に取り組んでいます。

本プログラムに関連し、本学地域経営学部の亀井教授が講演および講義を担当しました。9月23日のキックオフでは「いま、地域中小企業の経営職をめざす意義と醍醐味—イノベーションと成長の実装—」をテーマに講演し、経営キャリアの“第三の選択肢”として地域企業で挑戦する可能性を提示しました。

また、10月15日に開催された企業向けセミナー「『海の京都』地域企業の経営アップグレードセミナー」では、「承継は未来への投資—『第二創業』とストックオプションによる価値経営—」をテーマに講演し、事業承継を成長投資として捉える視点と、その実装方法について共有しました。

さらに、11月23日には地域企業の経営者およびインターンを対象に、ベンチャーファイナンスに関する講義を実施しました。



「海の京都」地域企業の
経営アップグレードセミナー チラシ



セミナーでの基調講演の様子

成果や課題

得られた成果について

9月23日のキックオフには、首都圏を中心に50人を超える参加があり、地域企業で経営職をめざす意義や課題認識について共有する機会となりました。質疑応答も活発に行われ、インターン応募や受入に向けた具体的な検討が進みました。

10月15日の企業向けセミナーにも約60人が参加し、「承継×第二創業」という視点やストックオプション活用の可能性について理解を深める場となりました。

感想と今後の課題について

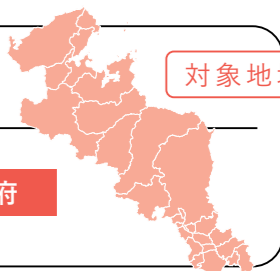
本事業を通じて、地域における事業承継を「守りの課題」ではなく「成長への投資」として捉え直す重要性をあらためて確認しました。また、人材と制度を組み合わせる価値経営を実装するためには、支援機関や金融機関との連携が不可欠であることを再認識しました。

今後の課題としては、企業側の受入体制の整備(権限設計・評価指標の明確化・伴走支援体制の構築)とともに、インターン後の登用や定着までを見据えた継続的なマッチング運営が挙げられます。

あわせて、インターン人材が成果を発揮しやすい業務設計の工夫や、「企業価値向上100days計画」の成果測定および事例化を進めていく必要があると感じています。

京都府の文化的景観についての研究

対象地域



担当教員／地域経営学部 教授 小山元孝
関係組織／京都府立京都学・歴史館、浅茂川区

きっかけや背景

京都府立京都学・歴史館では、京都府内の多様な文化をテーマに、その意義の解明と活用方策の検討を目的とした共同研究事業を実施しています。2025年度から2027年度にかけては「文化的景観」をテーマとする研究が開始され、関係研究者による横断的な調査が進められています。

本研究では、その一環として京都府京丹後市網野町の浅茂川地区を対象に設定しました。同地区は、地場産業である丹後ちりめんをはじめ、海との関わり、地域に伝わる伝説や祭礼など、多様な要素が重層的に存在する地域です。これらを包括的に捉え、「文化的景観」という視点から調査・研究を行うこととしました。

研究・事業内容

浅茂川地区は、日本海に面した海岸沿いに位置し、山陰海岸国立公園の区域内に含まれています。また、日吉神社本殿(京都府登録文化財)が所在するほか、日本遺産「300年を紡ぐ絹が織り成す丹後ちりめん回廊」の構成文化財の一つ「網野・弥栄の機屋の町並み」にも含まれるなど、歴史的・文化的資源が集積しています。

これまで、個別の文化財や自然環境に関する調査・研究は行われてきましたが、「景観」という総合的な視点からの検討は十分とはいえませんでした。そこで本共同研究では、「丹後ちりめん」「海」といった地域の基盤となる要素に加え、地元に伝わる「浦島伝説」や現在も継承されている「祭礼」などを含め、それらが織りなす複合的な景観構造について調査・分析を行いました。

2025年度は、現地踏査による景観の現状把握を行うとともに、浅茂川区所蔵の古地図・古文書の調査、さらに京都府立京都学・歴史館所蔵の「上野家文書」のうち浅茂川関連資料の精査を実施しました。また、地元住民への聞き取り調査を通じて、近年の街並みの変化や産業構造の変遷についての情報収集も行いました。これらの成果を踏まえ、次年度以降は報告書作成に向けた整理・分析を進める予定です。



水無月祭の風景



福田川河口付近

成果や課題

得られた成果について

浅茂川区所蔵資料の調査では、江戸時代の絵図を確認することができ、当時の道路構造が現在も多くの地点で踏襲されていることが明らかになりました。また、「上野家文書」の調査からは、地元でもほとんど知られていなかった明治期の写真資料が発見されるなど、景観の歴史の変遷を把握する上で重要な成果が得られました。

さらに聞き取り調査により、丹後ちりめん産業の隆盛に伴い旅館や商店が発展するなど、地場産業の動向が地域景観の形成に大きな影響を与えてきたことが確認されました。産業・生活・信仰が相互に関係しながら景観を形成してきた実態が、具体的に浮かび上がりました。

感想と今後の課題について

本研究により、浅茂川地区には歴史的・文化的に重要な景観が数多く存在することが改めて明らかとなりました。また、これまで景観という観点から体系的に検討されてこなかった地域であることから、新たな知見が多く得られた点も大きな成果といえます。

一方で、景観の保全や活用については、地域内で十分な議論がなされてきたとは言えない状況です。今後は、研究成果の共有を通じた地域への還元や啓発活動を進め、文化的景観の価値を広く共有するとともに、持続的な保全のあり方を検討していくことが課題となります。

観音寺自治会所蔵近代史料調査・保存プロジェクト

対象地域

担当教員／地域経営学部 教授 小山元孝
関係組織／観音寺自治会

福知山市

きっかけや背景

福知山市観音寺地区には、地名の由来ともなった補陀落山観音寺が所在し、「あじさい寺」として広く知られています。6月から7月にかけては多くの参拝者が訪れる地域です。これまで寺院そのものに関する調査・研究は数多く行われてきましたが、地域全体の歴史や文化に焦点を当てた研究は十分に進められてきたとはいえませんでした。

2024年、地元住民から「自治会が所蔵する古文書や絵図の内容や価値を知りたい」との相談が寄せられました。これを契機として、教員および学生が中心となり、観音寺自治会所蔵資料の調査を開始することとなりました。

研究・事業内容

観音寺自治会には、江戸時代から昭和初期にかけての文書や絵図が衣装ケース等に収蔵されていました。自治会関係文書のほか、観音寺地区と興地区が管理する阿比地神社に関する資料も多数含まれていました。

まずは資料の全体像を把握するため、目録の作成に着手しました。特に数量の多い神社関連文書から整理を進めた結果、明治時代から昭和30年代にかけての文書38点が確認されました。明治期の文書の中には、当時の神社運営や地域の状況を詳細に記したものが含まれており、重要資料については写真撮影による記録保存も行いました。

2025年度中にすべての資料の目録作成および撮影を完了することはできませんでしたが、11月1日には観音寺公会堂において、自治会所蔵資料特別大公開「観音寺村の変遷」と題した展示・解説会を開催しました。当日は地元住民を中心に約70人が参加し、教員・学生による解説に熱心に耳を傾けていただきました。解説会終了後も、展示資料を囲んで参加者同士の活発な意見交換が行われ、地域の歴史への関心の高さがうかがえました。

当日の様子は地元新聞にも大きく取り上げられ、今後の活動の発展に向けた大きな弾みとなりました。



観音寺公会堂における資料調査風景



自治会所蔵資料特別大公開「観音寺村の変遷」の様子

成果や課題

得られた成果について

2025年度は、とりわけ神社関連文書の調査と撮影を進めることができました。その結果、鉄道敷設に伴い神社用地の一部を提供していたことや、神社移転計画が存在していたことなど、明治期の地域動向を具体的に示す新たな知見が得られました。

また、展示・解説会の開催により、地域住民に貴重な史料の存在とその価値を広く知っていただく機会を創出できたことも大きな成果です。

感想と今後の課題について

一部の文書について目録化を進めることはできましたが、未整理の資料が依然として多数残されています。今後は、目録作成の継続、ラベル貼付、保管環境の改善など、基礎的な整理・保存作業を着実に進める必要があります。

また、資料の長期的な管理体制の構築や、教育・地域活動への活用方法についても検討が求められます。本プロジェクトを通じて、地域史料の保存と活用の両立を図りながら、持続的な地域連携の仕組みを構築していくことが今後の課題です。

「すぐに役立つ日本語講座@丹波」サポーター

対象地域

担当教員／地域経営学部 教授 渋谷節子
関係組織／丹波市まちづくり部人権啓発センター、丹波市国際交流協会

丹波市

きっかけや背景

丹波市では、2024年3月末時点で人口の約2%にあたる1,276人の外国籍市民が暮らしており、その数は10年前と比較して約2倍に増加しています。国籍も35カ国にわたり、多様なバックグラウンドを持つ人々が地域社会を構成していることがわかります。

こうした状況を背景に、外国人市民が安全かつ安心して生活できるよう、日常生活に直結する「すぐに使える日本語」を学ぶ講座が企画・実施されることとなりました。本学では、丹波市職員向けワークショップにおいて「やさしい日本語」を学ぶ機会をいただいた経緯もあり、そのご縁から教員および学生が本講座のサポーターとして参加することとなりました。



すぐに役立つ日本語講座@丹波で
ごみの仕分けについて学ぶ外国人市民

研究・事業内容

「すぐに役立つ日本語講座@丹波」は、2025年11月から2026年1月までの土曜日に計8回開催されました。そのうち4回に本学教員と学生がサポーターとして参加しました。

受講者は、丹波市に在住・在勤・在学する外国人市民で、入門から初級レベルの学習者12人が参加しました。講師は兵庫県国際交流協会の日本語教育担当者および同協会登録日本語講師が務め、教員と学生は講師の指示のもと、学習者への個別支援や活動補助を行いました。

各回のテーマは、日常生活に密接に関わる内容で構成されました。

サポーターとして参加した学生の中には、これまで地域で暮らす外国籍住民と接する機会が少なかった者もいました。当初は、どのように接すればよいか、どのように説明すれば分かりやすいかと戸惑う様子も見られましたが、回を重ねるごとに自然なコミュニケーションが生まれ、学習者と学生が互いに支え合いながら学ぶ姿が見られました。

開催日時	テーマ	概要
12月13日	防災	災害の名称や発生時の行動について学ぶとともに、非常食を実際に作って試食する体験を行いました。
12月20日	防災ボトルづくり	近隣店舗で購入可能な物品を用いて防災ボトルを作成する体験型講座を実施しました。商業施設内で来店客と交流しながら活動を行い、実践的な学びの機会となりました。
1月10日	ごみ	ごみの種類や出し方を学び、実際にごみの仕分けを体験しました。
1月17日	丹波を楽しむ	丹波市の好きな場所や行ってみたい場所について話し合いながら、日本語での会話練習を行いました。

成果や課題

得られた成果について

地方都市では外国籍住民の増加に伴い日本語学習ニーズが高まる一方で、支援に携わるボランティアの不足が課題とされています。本事業において大学生がサポーターとして参加したことは、地域における日本語教育の充実に一定の貢献を果たしたと考えられます。

また、日本語学習者は職場以外で地域住民と接する機会が限られ、孤立しやすい側面もあります。大学生が関わることで、外国籍市民と地域社会をつなぐ新たな接点生まれ、相互理解の促進につながった点も大きな成果といえます。

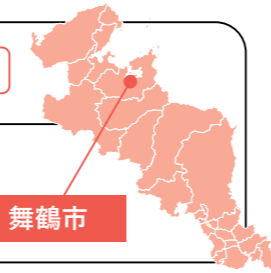
感想と今後の課題について

本講座は、学習者にとってだけでなく、教員や学生にとっても多文化共生について考える貴重な機会となりました。今年度は教員とゼミ学生が中心となって参加しましたが、今後は大学と丹波市がより緊密に連携し、継続的かつ持続可能な支援体制の構築を目指すことが望まれます。

さらに、学生自身が課題意識を持ち、主体的・積極的に関わることで、教育的効果と地域貢献の双方を高め、事業のさらなる発展につなげていくことが期待されます。

倉梯第二小学校の防災イベント助言

対象地域



舞鶴市

担当教員／地域経営学部 准教授 大門大朗
関係組織／舞鶴市立倉梯第二小学校、倉梯第二小学校 PTA・子育て支援協議会

きっかけや背景

舞鶴市校長会の防災研修（2025年度）での講演をきっかけに、倉梯第二小学校より「地域とともに学ぶ防災イベントの新設」についてご相談をいただきました。

従来のPTA行事や子育て支援協議会の行事は、参加者が主に児童や保護者に限られる傾向がありました。また、「防災」を前面に打ち出した訓練形式のイベントは参加者が伸びにくいという課題もありました。

一方で、学校は災害時に地域の避難所となる重要な役割を担っています。そのため、子ども・保護者・地域住民が、日常的な学校行事の延長線上で自然に防災を体験できる新たな学びの場が求められていました。

こうした背景を踏まえ、2025年10月より、倉梯第二小学校における新規防災イベントの企画に対し、専門的助言を行うこととなりました。

研究・事業内容

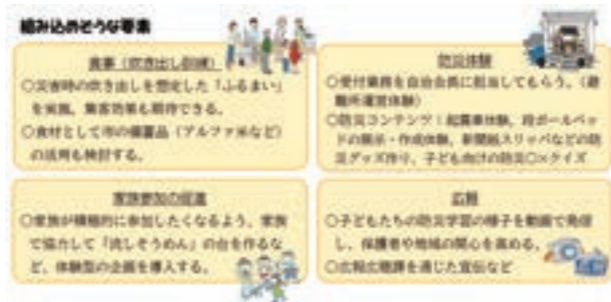
2025年10月より、舞鶴市倉梯第二小学校で新たに計画されている防災イベントの企画会議に複数回参加し、学校・PTA・地域団体が協働して取り組む体制づくりについて専門的助言を行いました。

本取組では、防災を前面に押し出す従来の訓練ではなく、既存の学校行事である「秋祭り」や「作って遊ぶ」といった活動の中に、防災要素を自然に取り入れる方針を提案しました。このアプローチにより、子どもや保護者だけでなく地域住民も楽しみながら、気づけば防災を学んでいるという体験の実現を目指しました。

企画会議では、新聞紙スリッパづくり、段ボールベッドの展示、避難所受付体験、防災〇×クイズなど、気軽に取り組める多様なアイデアが検討されました。また、炊き出しを「振る舞い」として提供することで、訓練という印象を和らげながら食の防災体験を取り入れる方法についても助言しました。

さらに、車椅子利用者や高齢の地域住民、乳幼児を連れた保護者など、多様な方々が参加しやすいよう、動線設計や授乳スペースの確保など、今後取り組むべきアクセシビリティ向上の視点も共有しました。

併せて、自治会、子育て支援協議会、女性会、ボーイスカウトなど地域団体との協働体制づくりを支援し、学校のみでは担いきれない役割を地域と分担する仕組みの必要性を提案しました。これらの議論を通して、無理のない初年度計画と、次年度以降の発展を見据えた継続的なイベントモデルの方向性が整理され、実現可能性の高い企画案として取りまとめられました。



防災イベント企画に対する専門的助言の一部

成果や課題

得られた成果について

本助言活動により、学校・PTA・地域団体が共通のイメージを持って取り組める防災イベントの方向性が明確になったことが大きな成果です。

防災色を強く打ち出すのではなく、既存行事に防災体験を自然に「織り込む」という考え方が関係者に共有され、楽しさと学びを両立させるイベント構想の基盤が整いました。

また、地域の多様な主体が企画段階から関わることで、受付運営や炊き出し、高齢者支援など、学校単独では難しい内容についても現実的な形で検討が進みました。これにより、地域との協働が一層強化される契機となりました。

その結果、本イベントは単なる一日限りの行事にとどまらず、「災害時に地域を支える関係づくり」へと発展する可能性を備えた取組となりました。

感想と今後の課題について

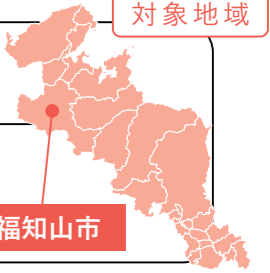
今回の助言を通して、楽しさの中に防災要素を自然に組み込む手法は、子どもや保護者の参加意欲を高めるうえで非常に有効であることを改めて実感しました。

今後は、地域主体で継続的に運営できる仕組みづくりが課題となります。防災イベントは単なる啓発活動にとどまらず、学校と地域を結びつける重要な機会でもあります。本取組を契機に、災害時の支え合い体制が日常的に強化されていくことが期待されます。

引き続き、学校の教育活動と地域コミュニティの関係構築の双方を視野に入れながら、実践的な支援を行ってまいります。

福知山市内社会福祉施設におけるBCPジレンマゲーム・初動対応BOX設計支援

対象地域



福知山市

担当教員／地域経営学部 准教授 大門大朗
関係組織／福知山市（危機管理室・福祉保健部）、株式会社栄光サービスセンター、駅南ニコニコハウス、厚ニコニコハウス

きっかけや背景

福知山市はこれまで度重なる水害を経験しており、特に2014年・2018年には高齢者施設や居宅介護事業所が大きな被害を受けました。2024年度から社会福祉施設にBCP（事業継続計画）の策定が義務化されたこともあり、現場で実際に機能する防災体制の整備が急務となっています。

一方、介護現場では人員不足や高齢化が進んでおり、複雑な計画書だけでは十分に対応できないという課題があります。そのため、「誰が見ても初動対応ができる仕組み」や「判断に迷う場面を共有できる実践的な研修」が求められていました。

こうした背景を踏まえ、市内の居宅介護事業所・福祉施設と連携し、BCPジレンマゲームの開発と初動対応BOXの設計支援に取り組みました。

研究・事業内容

1. BCP研修およびジレンマゲームの開発（株式会社栄光サービスセンター）

2024年度は、市内社会福祉施設を対象に、災害時に実際に役立つBCP（事業継続計画）の構築を目指し、研修設計と初動体制整備を中心に支援を行いました。

株式会社栄光サービスセンターでは、訪問介護員やケアマネジャーが災害時に直面する葛藤や迷いに着目し、現場の声をもとに「災害BCPジレンマゲーム」を開発しました。

利用者ではない判断場面をカード化し、参加者同士が意見を共有する形式としています。

専門用語をできるだけ避けた解説と組み合わせることで、計画内容の理解を深めるとともに、職員一人ひとりが自らの判断軸を持てる研修モデルを構築しました。



オリジナル教材「災害BCPジレンマゲーム」

2. 初動対応BOXの設計支援（厚・駅南ニコニコハウス）

厚・駅南ニコニコハウスでは、過去の水害経験を踏まえ、災害発生時に最初に到着した職員が迷わず行動できる「初動対応BOX」の設計支援を継続しています。

BOXには、安全確認、利用者の安否確認、関係機関への連絡などの初動行動を写真付きカードで整理しています。止水板の設置手順や浸水時の衛生管理、エレベーター停止時の対応など、施設特有のリスクも反映しました。

また、常駐型施設と無人拠点では必要な初動が異なるため、施設タイプに応じた複数モデルの検討を進めています。

これらの取り組みにより、災害時の「判断のしやすさ」と「行動の再現性」を高め、現場に根ざしたBCP運用体制の強化を図っています。



「初動対応BOX」設計支援の様子

成果や課題

得られた成果について

社会福祉施設の実情に即した、実践的で分かりやすいBCP研修モデルと汎用性のあるジレンマゲームを構築することができました。

研修を通じて、職員同士が経験や価値観を共有し、判断の根拠を言語化する機会が生まれました。

また、初動対応BOXの整備により、災害時の行動手順が可視化され、誰が初動を担っても一定の質を確保できる体制が整いつつあります。

BCPと日常の安全対策（止水板、浸水センサー、備蓄など）を結びつけることで、施設全体の防災力向上にもつながっています。

感想と今後の課題について

介護現場は少人数体制や高齢職員の多さなどの制約がありますが、現場の声を丁寧に反映することで「実際に動けるBCP」への道筋が見えてきました。

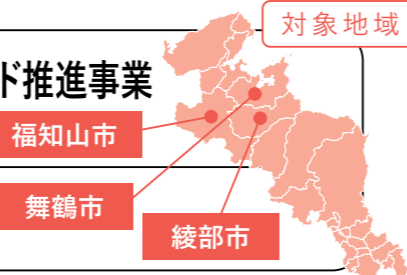
一方で、初動対応BOXやカード教材は継続的な見直しが必要であり、年1回の訓練と改善を通じたPDCAサイクルの確立が今後の課題です。

また、24時間型施設と無人事業所では必要な対応が異なるため、複数モデルの整理と標準化も求められます。

今後は、市の防災計画や地域包括ケアシステムと連動し、地域全体でリスクと資源を共有できる仕組みづくりへと発展させていくことが重要です。

学生主体による農産加工品の市場拡大を目的とした地域ブランド推進事業 (京都中丹いちおし商品を核とした産学官連携実践)

担当教員/地域経営学部 准教授 張明軍
関係組織/京都府中丹広域振興局、京都中丹いちおし商品認定事業者



きっかけや背景

農産加工品は、気候条件や原材料、生産規模など農業特有の制約を受けやすく、工業製品と同様のマーケティング手法をそのまま適用することが難しい分野です。特に中小規模の加工事業者にとっては、新商品開発は投資負担やリスクが大きく、必ずしも持続的な成長につながらないという課題があります。

そこで本事業では、新商品開発ではなく、既存商品の価値を再発見し、その魅力を再編集・再発信することによる市場拡大に着目しました。大学生が主体となり、地域ブランドの推進に取り組む実践型プロジェクトとして実施しています。

研究・事業内容

本事業では、京都府中丹地域の農産物を活用した「京都中丹いちおし商品」を中心に、学生主体による地域ブランド推進活動を展開しました。

具体的には、①地域産品の販売・PR活動、②AIを活用したアレンジレシピの開発、③加工事業者の製造現場視察、④専用ホームページのリニューアル、⑤レシピ試作会およびCM動画制作、⑥AIセミナーの開催など、多角的な取組を実施しました。

販売・PR活動では、百貨店、地域イベント、クルーズ船寄港時の歓迎イベント、産産フェア等、異なる販売環境に出店し、消費者属性ごとの購買行動や反応の違いを観察・分析しました。その過程で、場所や客層によって有効な商品説明や訴求方法が異なることを、学生が実体験として学ぶ機会となりました。

また、AIを活用したアレンジレシピ開発では、AIが生成したレシピを地域の老舗料理店シェフが監修する仕組みを導入し、「学生×AI×プロ料理人」によるハイブリッド型のレシピ開発モデルを構築しました。これにより、地域性・信頼性・実用性を兼ね備えた情報発信が可能となり、既存商品の新たな価値提案につなげることができました。本事業は、産学官に加え、消費者やAIも含めた連携による実践的な地域ブランド推進モデルとして位置づけられます。



実地販売を通じたマーケティング実践の様子

成果や課題

得られた成果について

本事業を通じて、学生は地域産品の価値を「どのように伝えるか」という実践的なマーケティング力を大きく向上させました。また、AIによる情報生成と専門家による監修を組み合わせることで、信頼性と独自性を両立した地域ブランド発信が可能であることを示しました。

さらに、大学が地域産業と連携し、既存商品の市場拡大を支援する実践モデルを構築できたことは、地域経済循環の観点からも意義のある成果です。

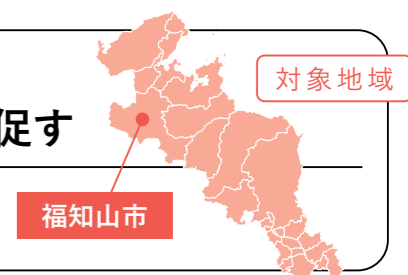
感想と今後の課題について

学生にとって、自らの学びが地域産業の課題解決に直結する経験は、大きな達成感と成長につながりました。一方で、単発のイベント出店にとどまらず、継続的な販路形成やデータ蓄積の仕組みづくりが今後の課題です。

今後は、販売データや消費者反応を体系的に分析し、地域事業者に還元できる支援体制を強化するとともに、地域ブランド推進の持続可能性を高めていく必要があります。

高齢者生活行動データの分析から高齢者疾患 (認知機能低下・その他疾患)の早期の気づきを促す

担当教員/地域経営学部 准教授 星雅丈
関係組織/株式会社アイトシステム



きっかけや背景

2018年10月、星准教授のご家族が脳卒中で倒れる出来事がありました。当時、持病もなく自立した生活を送っておられたことから、ご家族が異変に気づくまでに時間を要しました。救急搬送により治療が行われましたが、その後は退院することなく療養生活を送られました。

この経験を通じて、星准教授は、それまで取り組んでいた高齢入院患者を対象とするITやデータ利活用の研究に加え、医療・福祉サービスの支援対象となっていない独居高齢者の現状に強い問題意識を抱くようになりました。特に、日常生活を自立して送っている高齢者ほど、異変の発見が遅れる可能性があるという課題に着目しました。

こうした背景のもと、独居高齢者の異変を早期に察知する見守りシステムの必要性を認識し、株式会社アイトシステムに研究協力を依頼したことが、本事業の出発点となりました。

研究・事業内容

株式会社アイトシステムは、福知山市内の十数家庭に対し、独居高齢者見守りシステム「見守りプラス認知のアイシル」を提供し、約10年にわたり高齢者と家族の安心を支援してきました。

同システムは、高齢者が日常的に滞在する部屋にセンサ機器を設置し、赤外線・温度・照度センサによって生活データを自動的に収集します。加えて、起床・食事・服薬・外出などの日常行動を申告するボタンが備えられている点の特徴です。行動を自ら申告する習慣は、独居生活に一定の緊張感や生活リズムをもたらす可能性があり、見守り機能にとどまらない独自性を有しています。

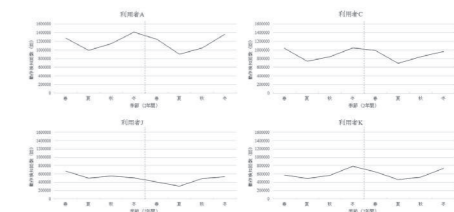
本研究では、同システムが長期間にわたり取得してきた活動データ、室温・照度データ、ならびに行動レスポンスデータを分析しています。これらのデータは高齢者に負担をかけることなく自然な生活環境下で取得されている点の特徴です。

本研究では、独居高齢者の活動特性やその時間的変化を抽出し、MCI(軽度認知障害)、脳卒中、急性心筋梗塞などの発症を事前に検知できる可能性を探っています。

すでにセンサデータの分析から、独居高齢者の活動性について「夏季に活動性が低下し、冬季に活動性が上昇する」という従来の知見とは異なる結果が得られています(星・日月(2023)『福祉情報研究』第18号)。これは福知山特有の高温多湿な気象条件の影響である可能性があり、単純なセンサデータから地域特性を反映した重要な知見が得られた点に研究的価値があります。



「見守りプラス認知のアイシル」のセンサ機器
(出典:株式会社アイトシステムWebサイト)



季節別にみた動作検知回数(2年間)の変化
(出典:星・日月(2023)『福祉情報研究』第18号)

成果や課題

得られた成果について

アイシルのセンサデータの分析から、独居高齢者の活動の長期的変化を抽出する新たな手法を見いだしました。この成果をもとに、海外学術誌「Journal of Sensor and Actuator Networks」に論文を投稿しています。

また、独居高齢者の活動特性に関する研究成果は、「見守りシステムのセンサデータからみた独居高齢者の活動性の特徴抽出」として『福祉情報研究 第18号(2023)』において発表済みです。

感想と今後の課題について

今年度は、新たに複数の独居高齢者世帯がアイシルを導入し、60代から80代まで幅広い年代のデータが取得可能となりました。

今後、長期間にわたり活動データやレスポンスデータを蓄積・分析することで、本事業の目標である「MCI、脳卒中、急性心筋梗塞などの早期の気づき」につながる知見を得たいと考えています。

将来的には、独居高齢者の生活行動の変化から疾患リスクを事前に察知し、早期対応につなげる技術の確立を目指します。

北京都デジタルパーク2025

対象地域

京都府北部

担当教員／北近畿地域連携機構長 西田豊明
 関係組織／福知山市、福知山商工会議所、福知山市商工会
 連携・協力者／情報学部 教授 倉本到、准教授 橋田光代、准教授 衣川昌宏、DX アシスタントオフィサー 公手敏裕

きっかけや背景

2025年3月、福知山市より、同年9月26日・27日に開催予定の「北京都デジタルパーク2025」への協力依頼がありました。これを受け、本学では西田北近畿地域連携機構長が実行委員として参画し、大学として全面的に協力することを決定しました。本イベントは、デジタル技術を活用して京都府北部地域の企業や地域課題を支援する見本市として開催されたもので、福知山市、福知山商工会議所、福知山市商工会および本学により構成される「北京都デジタルパーク2025 実行委員会」が主催しました。本学にとっては、デジタル活用に関する研究成果や教育活動を広く発信するとともに、地域との連携を一層推進する機会として出展いたしました。

研究・事業内容

2025年9月26日（金）・27日（土）の両日、福知山市三段池総合体育館および周辺にて「北京都デジタルパーク2025」が開催されました。本イベントには、38の事業所と6つの公的機関が出展し、AIやデジタル技術を活用した多様な取組が紹介されました。

会場では、農業を使わない水田専用除草ロボット、ペーパーレス会議システム導入アプリ、VTuberを活用した映像制作など、地域産業や社会課題に直結する先進的な展示が行われ、京都府北部におけるデジタル活用の広がりが示されました。

本学は「DXで地を究め 知を創る福知山公立大学」をテーマに出展し、地域課題の解決と人材育成を両立させる実践的な取組を紹介しました。展示ブースでは、「体験」「対話」「共創」を重視し、来場者が実際に触れ、試しながら学ぶことのできる参加型構成としました。

主な展示内容は上記のとおりです。これらの展示を通じて、ヴァーチャル空間とリアル空間を横断する表現や、研究成果の社会実装、地域産業と結びついたデジタル活用の具体例など、多様なプロジェクトを総合的に発信しました。

来場者には、家族連れで体験型展示を楽しむ方々や、農業分野をはじめ地域産業へのデジタル導入に関心を持つ事業者など、幅広い世代・立場の方々が訪れました。本学ブースは、世代や分野を越えてデジタル技術の可能性について対話が生まれる交流の場となりました。

教員名	展示・紹介内容
倉本到 教授	大阪・関西万博にも出展された、献血や骨髄バンク支援の普及を目的としたインタラクティブゲームの体験展示 → P.48 大阪・関西万博での催事出展にかかる体験企画の開発・運用支援業務
橋田光代 准教授	自分の声に自動でハモリを合わせる「自動ハモリ機」による音楽体験
衣川昌宏 准教授	省力化を実現するデジタルサイネージの紹介や、FabLabにおけるものづくりの実践紹介
公手敏裕 DX アシスタントオフィサー	大学全体のDX推進に関する取組紹介 (FUJIN)



DXで地を究め 知を創るをテーマに多彩な展示を行った展示ブース全景



ゲーム体験を通じてデジタル技術に触れる児童とサポートを行う学生

成果や課題

得られた成果について

本学ブースでは、体験型展示を通じて子どもから大人までがデジタル技術の可能性を身近に感じる機会を提供することができました。

また、会場で研究成果や技術を直接紹介したことを契機に、地域企業からの連携相談が増えるなど、具体的な産学連携へとつながる動きも生まれました。本イベントは、本学の教育・研究活動を地域社会へ発信するとともに、新たな連携のきっかけを創出する有意義な機会となりました。

感想と今後の課題について

本出展を通じて、デジタル技術は専門領域にとどまるものではなく、地域産業や市民生活を支える基盤となり得るものであることを改めて実感しました。

今後は、展示をきっかけに生まれた関係性を一過性のものとせず、継続的な伴走支援や具体的な共同研究・事業化へと発展させていく仕組みづくりが課題となります。

引き続き本学は、地域とともにデジタル技術の活用を推進し、京都府北部地域の持続的な発展に貢献してまいります。

画像を用いた森林の生物データの取得及び管理システムに対する情報技術の開発と運用

対象地域

日本全域

担当教員／情報学部 教授 池野英利
 関係組織／兵庫県立大学、森林総合研究所、北海道大学、信州大学、宮崎大学、名古屋大学、京都大学

きっかけや背景

森林の樹木は、幹・葉・根などを通じて大気中の炭素を固定し、枯死や微生物による分解を経て再び大気中へ放出することで、炭素循環において重要な役割を担っています。森林における炭素循環の実態を把握することは、人為的要因と自然界の循環プロセスを統合的に理解することにつながり、地球環境保全に向けた施策の検討にも資するものと期待されています。

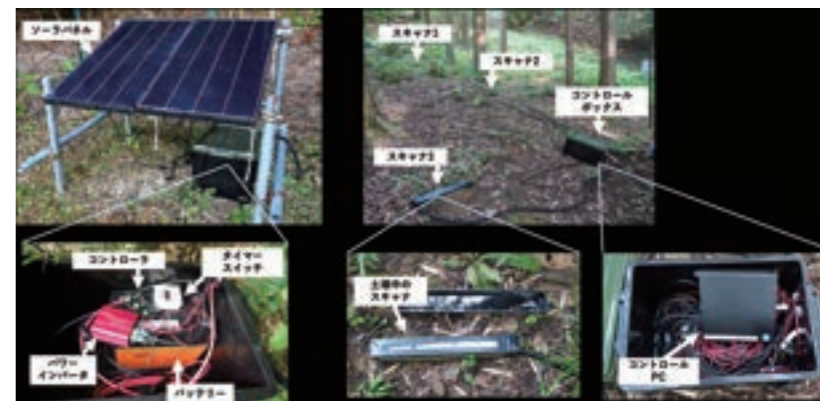
これまで森林の炭素循環機能は、主に樹木の地上部に着目して議論されることが多くありました。しかし近年では、地下部もまた炭素循環に大きく寄与していることが明らかになっています。地下部に存在する樹木の根系は、樹体を支持するだけでなく、土壌中の養分や水分を吸収する重要な機能を担っています。特に細根は、比較的短い周期で成長と枯死を繰り返す特性を有しており、その動態を把握することは、樹木および森林全体の炭素循環量をより精緻に評価する上で重要であると考えられます。

研究・事業内容

短期間で更新が進む樹木細根の動態を継続的に計測する手法として、これまでミニライゾトロン法 (Johnson et al., 2001) やスキャナ法 (Dannoura et al., 2008) が用いられてきました。しかし、いずれの手法も計測時に現地へ赴く必要があり、短時間間隔での連続観測や悪天候時の計測が困難であるという課題がありました。

本事業では、細根動態をより効率的かつ安定的に計測するため、Linux をベースとしたスキャナ画像の自動収集装置を開発しました。本システムでは、タイマー制御により定期的に PC へ通電し、USB ポートに接続されたイメージスキャナ (GT-S600, Seiko Epson Co., Suwa, Japan) を自動検出してスキャンを実行します。取得された土壌断面画像は、PC に接続された USB メモリや SD カードなどの外部記憶装置に自動保存される仕組みとしました。

さらに、インターネット接続が可能な調査地では、取得画像を兵庫県立大学に設置された RootNet クラウドシステムへ自動的にアップロードする機能も構築しました。開発したシステムは、本学裏山の試験地において実地テストを行った後、各地の試験地へ順次設置を進めました。



福知山試験地に設置された自動スキャニング装置

成果や課題

得られた成果について

福知山試験地で開発・検証した本システムは、北海道大学苫小牧研究林および中川研究林、森林総合研究所東北支所、信州大学手良沢フィールドなどへ設置を進めることができました。現在も各地で継続的に稼働しており、安定したデータ取得が行われています。

また、本システムに関する成果は、根研究会主催の根研究集会や、国立情報学研究所が開催した研究データエコシステム構築事業シンポジウム2025などで発表し、学術的・社会的な発信にもつなげています。

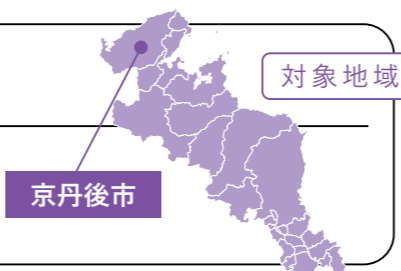
感想と今後の課題について

野外における長期計測は、気象条件の変動や野生生物の影響、機器の経年劣化など、さまざまな要因への対応が求められます。本事業を通じて、安定的な運用体制の構築がいかに重要であるかを改めて認識しました。

今後は、さらなる試験地への展開を進めるとともに、広域かつ長期的なデータの蓄積を通じて、森林地下部の動態解明と炭素循環研究の高度化に貢献していきます。

土壌水分量の可視化を目的とするIoTの研究

担当教員／情報学部 教授 井上一成
 関係組織／京都府丹後農業改良普及センター



きっかけや背景

昨年、井上教授は「防災・減災を目的とした地域情報の可視化やIoTに関する研究」について講演を行いました。その講演をきっかけに、参加者から「地域に関する別の情報についても可視化できないか」との相談が寄せられ、本研究が始動しました。相談内容は、農業分野における土壌データの可視化に関するものでした。

井上教授はこれまで農業分野でのIoT活用に関わった経験はありませんでしたが、この相談を契機に新たな研究の可能性を見いだしました。関係者との意見交換を重ねる中で、京都ブランド農作物が長年の経験と高度な栽培技術によって支えられていること、さらに近年の酷暑が農業経営に深刻な影響を及ぼしている現状を把握しました。こうした背景を踏まえ、「農業×IoT」という新たな研究テーマに取り組む意義を明確にし、本格的な検討へと発展しました。

研究・事業内容

土壌水分量は、農地栽培において極めて重要な管理指標です。特に近年の気候変動により、その重要性は一層高まっています。

水分量の測定には、TDR (Time Domain Reflectometry) と呼ばれる、電磁波の伝搬速度を利用した手法が広く用いられています。水は高い誘電率を持ち、電磁波の伝搬速度に影響を与える性質があるため、この特性を利用して水分量を推定します。しかし、TDR装置は高価であり、高度な技術も必要とされることから、設置できる地点が限定されるという課題があります。

一方、豆類の栽培現場では、1ヘクタール未満の農地であっても土壌水分量にばらつきが見られます。傾斜、土壌特性、耕うんの程度などが影響していると考えられ、特に夏季の水分不足は生育に大きな影響を及ぼします。そのため、多地点かつ経時的な測定が求められています。

今回対象とした黒大豆は、京都ブランド農作物の一つです。黒大豆は乾燥に比較的強く、水分が不足しても葉の色が大きく変化しないため、外観から状態を判断することが難しいという特徴があります。この点からも、客観的かつ継続的な水分データの取得が重要となります。

本研究では、静電容量方式による測定手法に着目しました。この方式は、電荷の充放電特性を利用して水分量を推定するもので、構造が比較的単純で低コスト化が可能です。電子工学の知見を活かせる一方で、マイコンや電源条件のばらつきによる出力変動、消費電力の増加といった技術的課題もありました。

学生とともに改良を重ね、現地実験を3回実施した結果、高価なTDR方式に近い測定精度を持つ、安価な静電容量型測定方式の有効性を確認することができました。



井上ゼミによる現地実験の様子



静電容量方式による測定手法

成果や課題

得られた成果について

本研究の成果は、高価な専用装置に依存しない「安価で簡便な土壌水分測定技術」の実現にあります。

その過程では、マクスウェル方程式に基づく電磁気学の理論、静電容量の基礎理論、電子回路設計、情報通信技術など、これまで蓄積してきた専門知識を総合的に活用しました。異分野に見えた農業分野であっても、基礎科学と工学の知識が確実につながっていることを実感する取り組みとなりました。

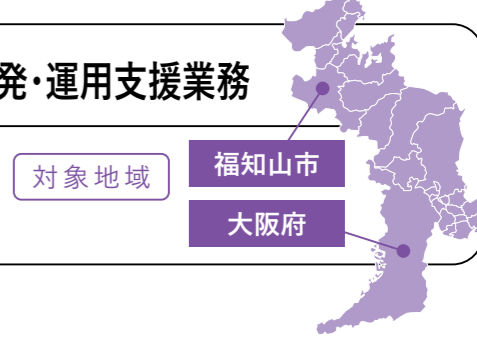
感想と今後の課題について

可視化はあくまで意思決定を支える手段であり、最終的に重要なのは、そのデータをもとにどのような行動を取るかです。

次年度は、センサーによる「計測」に加え、灌水などを制御するアクチュエータの研究にも取り組み、計測から制御までを一体化した実践的な農業IoTシステムの構築を目指します。データに基づく営農支援の高度化に向け、研究をさらに発展させてまいります。

大阪・関西万博での催事出展にかかる体験企画の開発・運用支援業務

担当教員／情報学部 教授 倉本到
 関係組織／福知山市健康福祉部健康医療課



きっかけや背景

2025年5月から10月にかけて、大阪・関西万博が開催されました。万博会場内で実施されるSDGs関連イベントへの出展にあたり、2025年3月、福知山市健康福祉部より本学に対し、福知山市が掲げる「献血と骨髄バンクの支援を広げる都市宣言」に関する体験型コンテンツの共同開発について相談がありました。

献血と骨髄バンクについて、来場者が「体験的に学べる」企画を通じて理解を深めてもらうことを目的とし、本プロジェクトが始動しました。

研究・事業内容

本プロジェクトは、2025年5月28日から6月1日に開催された、地方創生SDGsフェス(万博内イベント)において、福知山市ブースで展示する体験型コンテンツを開発するものです。

限られた開発期間の中で、子どもから大人まで直感的に楽しめることを重視し、以下の2種類のコンテンツを制作しました。

1. 血液ファクトリー

献血後の血液がどのように処理・活用されるのかを疑似体験できるミニゲーム。

- 血液工場の各工程をイメージした3種類のミニゲームを用意
- 体験時間は約2分に設定し、回転率と没入感を両立

2. 献血・骨髄バンククイズ

ゲーム操作が苦手な来場者にも配慮し、知識を楽しく学べるクイズ形式のコンテンツを制作。

開発体制は、福知山市側3人(企画2人、デザイン1人)、本学側2人(設計1人、開発1人)で構成されました。学内からはゲーム開発に強みを持つ学生1人が参画しました。

情報共有にはSlackを活用し、月2回のオンラインミーティングを実施。デザインデータや試作ソフトウェアもすべてオンラインで共有するなど、効率的な開発体制を構築しました。その結果、約2か月という短期間で完成度の高いコンテンツを2種類開発することができました。



地域創成SDGsフェス 福知山市ブース



「献血・骨髄バンククイズ」ゲーム画面

成果や課題

得られた成果について

開発したコンテンツは、5日間の会期中、一度もトラブルを起こすことなく安定稼働しました。期間中、約4,400人の来場者に体験していただき、特に「血液ファクトリー」は待機列ができるほどの人気を集めました。

また、万博終了後も本コンテンツは献血・骨髄バンク啓発イベントで継続的に活用されています。小学校や福知山イオンモールなど、市内外で2025年度中に少なくとも9回の体験展示が実施され、継続的な社会的効果を生み出しています。

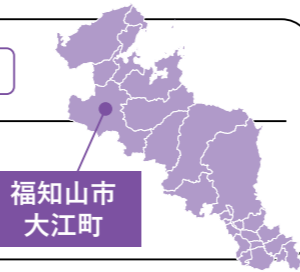
感想と今後の課題について

本プロジェクトは、ゲーム開発に高い技能を持つ学生の参画により、非常にタイトなスケジュールの中でも円滑に進行しました。また、Slackをはじめとするオンラインツールを活用した開発プロセスは、DX推進の観点からも有効であり、産学官連携の新たなモデルの一例となりました。

今後も、大規模イベントや社会的意義の高い事業において、大学および学生が持つ技術力を適切に発揮できる体制づくりを進めていきます。そのためにも、継続的な教育内容の充実と実践的な学修機会の創出に努めていきたいと考えています。

大江山みすずの村リサーチベース

対象地域



担当教員／情報学部 教授 山本吉伸
関係組織／チームみすず、福知山市役所大江支部、大江まちづくり協議会

きっかけや背景

人口減少や高齢化が進む中山間地域では、若者が日常的に地域と関わる機会が限られており、大学における教育・研究の成果が地域社会へ十分に還元されにくいという課題があります。こうした状況を踏まえ、大学生が継続的に地域を訪れ、活動し、学びを深めることのできる拠点を地域内に設ける必要性が高まっていました。

そこで2025年10月、大江山口内宮駅近くに地域の協力を得て「大江山みすずの村リサーチベース（ORB）」を設立し、大学と地域を結ぶ新たな実践拠点として運用を開始しました。

研究・事業内容

ORBは、地域社会の中で「サービス工学の研究成果を実践的に検証すること」および「IT技術に関する地域ニーズを発見すること」を目的とした研究・活動拠点です。サービス工学とは、人・モノ・情報の関係を設計することで、価値提供の生産性向上の仕組みを明らかにする学問分野であり、理論とともに現場での検証が不可欠とされています。

現在、ORBでは大学生が主体となって施設運営や企画に携わりながら、地域住民や観光客を対象とした小規模な実証実験に取り組んでいます。例えば、観光客と地域住民で価格差を設ける場合に、どのような提示方法や説明が納得感につ

ながるのか、あるいは食べ放題と従量課金のいずれが地域の実情や利用者満足度に適しているのかといったテーマについて、実際のサービス提供を通じて検証を行っています。

これらの実験は、既存の飲食店や商業施設では営業上の制約から実施が難しい場合もあります。しかし、自ら運営する拠点を持つORBでは、段階的な試行や改善を柔軟に重ねることが可能であり、学生にとっても実践的な学びの機会となっています。ORBは、教育・研究・地域貢献を一体的に推進する実践フィールドとして、着実に機能し始めています。



大江山みすずの村リサーチベース(ORB)での交流イベントの様子



学生の研究における実証実験の場としても活用

成果や課題

得られた成果について

ORBの設立により、大学生が地域に継続的に滞在し、実際のサービス提供を通じて学ぶ環境が整いました。これまで研究で扱ってきた理論を現場で検証することで学生の理解が深まるとともに、地域住民との対話を通じた新たな気づきも生まれています。また、大学の研究活動が地域課題と直接結びつくことで、大学の存在意義を具体的に示す効果も生まれています。

感想と今後の課題について

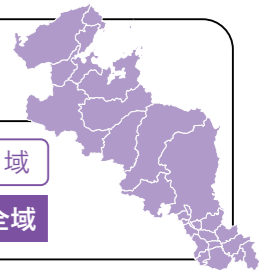
地域内に実践拠点を持つことで、研究と教育の可能性は大きく広がりました。一方で、継続的な運営体制の確立はまだ途上にあります。学生の入替わりを前提とした運営ノウハウの蓄積や、地域側の負担を過度に増やさない仕組みづくりが今後の重要な課題です。

今後もORBを、地域と大学がともに育てる拠点として発展させていきたいと考えています。

京都府PTA研究大会福知山大会のライブ配信、オンデマンド配信

対象地域

京都府全域



担当教員／情報学部 准教授 衣川昌宏
関係組織／京都府PTA協議会・福知山市PTA連絡協議会

きっかけや背景

京都府内のPTA活動において、研究大会は情報共有や交流を深める重要な機会となっています。しかし、会場までの移動距離や時間的制約などにより、参加が難しいケースも少なくありませんでした。

こうした課題を受け、京都府PTA研究大会福知山大会では、より多くの関係者が大会内容に触れられる環境づくりが求められました。そこで衣川ゼミでは、情報通信技術を活用したライブ配信およびオンデマンド配信を実施し、地域や時間の制約を超えて大会の成果を共有することを目的に本事業に取り組みました。

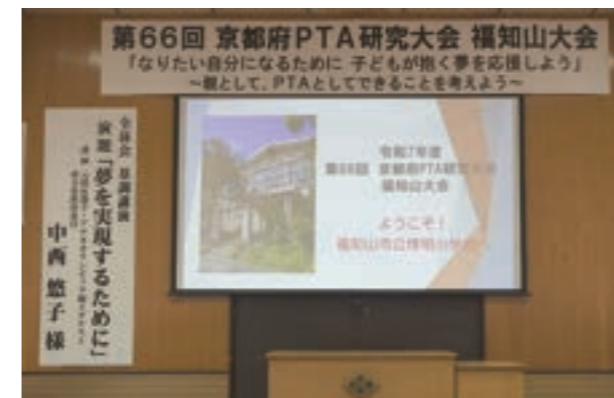
研究・事業内容

本事業では、京都府PTA研究大会福知山大会のプログラム全体を対象に、ライブ配信およびオンデマンド配信を行いました。会場に来場できない関係者や、後日視聴を希望する参加者が大会内容を視聴できるように、配信体制を構築しました。

配信にあたっては、講演や事例発表、意見交換などの内容が正確かつ分かりやすく伝わるよう、映像・音声の品質確保や進行との連携に十分配慮しました。当日は複数のカメラや音響機器を用いて撮影・収録を行い、安定したインターネット回線を通じてリアルタイム配信を実施しました。

さらに、大会終了後には映像を編集し、オンデマンド配信として公開することで、参加者が都合の良い時間に視聴できる環境を整えました。これにより、当日の参加が難しかったPTA関係者や教育関係者にも大会内容を広く共有することができました。

本学教員が中心となって配信の設計・運営を担い、学生も機材準備や操作、記録作業に携わりました。情報通信技術を地域行事に実践的に活用する取り組みとして、地域貢献と教育的効果の双方を兼ね備えた事業となりました。



当日の様子を記録した配信映像のアーカイブ



成果や課題

得られた成果について

本事業により、会場に来場できないPTA関係者にも研究大会の内容を広く届けることが可能となりました。ライブ配信とオンデマンド配信を組み合わせることで、時間や場所の制約を超えた参加環境を実現し、大会の理解促進と情報共有の充実にも寄与しました。

また、大学が有する情報通信技術を地域行事に活用する実践的なモデルとして、地域連携の新たな可能性を示す成果となりました。

感想と今後の課題について

本事業を通じて、配信技術の活用がPTA活動における参加機会の拡大や情報共有の促進に有効であることを改めて確認できました。一方で、安定した配信品質を維持するためには、入念な事前準備や明確な役割分担、運営体制の整備が不可欠であることも明らかになりました。

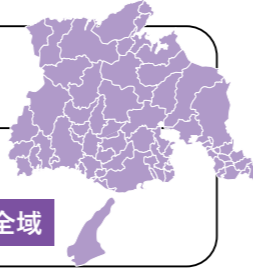
今後は、運用手順の標準化や学生を含む人材育成を進め、継続的かつ安定的に地域行事を支援できる体制の構築を目指します。

福知山商工会議所 FabLabで始める小さなデジタル革命

担当教員／情報学部 准教授 衣川昌宏
関係組織／福知山商工会議所

対象地域

北近畿全域



きっかけや背景

福知山公立大学では、大学の知的資源や設備を地域に還元し、産学連携の促進と人材育成に資することを目的として、北近畿地域に開かれた FabLab (ものづくり工房) を運営しています。

FabLab には、3D プリンタやレーザーカッター、UV プリンタなどのデジタルファブリケーション設備を整備しており、試作や製品開発、修理・改良などを通じて地域産業の課題解決や技術力向上に活用されています。

今回、福知山商工会議所からの依頼を受け、会員事業者を対象に FabLab の設備や具体的な活用方法を紹介する講座を実施しました。大学と地域企業が直接交流し、実践的な学びと連携の可能性を探る機会の創出を目的とした取り組みです。

研究・事業内容

本事業では、本学が運営する FabLab を活用し、福知山商工会議所会員を対象としたものづくり講座を実施しました。

講座では、3D プリンタ、レーザーカッター、UV プリンタといった各種デジタルファブリケーション設備について、それぞれの特徴や加工原理、対応可能な材料、精度、活用上の留意点などを分かりやすく解説しました。あわせて、製品開発初期段階での試作、治具や部品の製作、破損部品の修復といった具体的な活用事例を紹介し、地域企業にとっての実践的な活用イメージを共有しました。

さらに、設計データの作成から加工物の完成に至るまでの

工程をデモンストレーション形式で実施しました。これにより、参加者はデジタルデータを活用したものづくりの流れや、短期間で試作が可能となる FabLab の利点を体感することができました。

本学教員に加え、学生も運営補助や説明に携わり、大学で学ぶ知識や技術が地域産業にどのように応用できるのかを実践的に学ぶ機会となりました。本事業は、大学と地域企業が相互理解を深め、今後の連携や人材育成につながる基盤を築く取り組みとなりました。



3Dプリンタの特徴や活用事例を紹介する様子



座談会形式で実施した参加者間の交流の様子

成果や課題

得られた成果について

本事業を通じて、FabLab が地域企業にとって試作や修復などに活用可能な実践的なものづくり拠点であることを具体的に示すことができました。

参加者からは、自社での試作や業務への活用を検討したいとの声が寄せられ、FabLab の地域産業への有効性が確認されました。また、大学教員・学生と地域事業者が交流する機会を創出できたことは、産学連携および人材育成の両面において意義ある成果となりました。

感想と今後の課題について

本講座を通じて、FabLab の設備や技術が地域企業のものづくりや課題解決に対して高い関心を持って受け止められていることを実感しました。

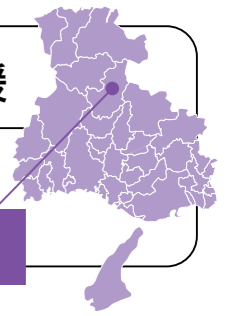
一方で、継続的な利用や具体的な製品開発につなげるためには、設備や支援内容のさらなる周知、技術相談や伴走支援体制の充実が課題です。今後は、継続的な講座の実施や個別相談の機会を設けるなど、地域企業との連携を一層深めていく必要があります。

兵庫県立和田山特別支援学校「わとくUDゲーム交流会」連携支援

担当教員／情報学部 准教授 橋田光代
関係組織／兵庫県立和田山特別支援学校

対象地域

兵庫県
朝来市



きっかけや背景

兵庫県立和田山特別支援学校より、「わとく UD (ユニバーサルデザイン) ゲーム交流会」への協力依頼があり、大学との連携が始まりました。同校は文部科学省の DX ハイスクール事業採択校として「ICT で社会とつながる」をテーマに、児童生徒と地域を結ぶ実践に取り組んでいます。

本交流会は、障害の有無や年齢に関わらず、誰もが楽しめるユニバーサルデザインのゲームを通じて相互理解を深めることを目的としています。昨年度は約 15 ブースを設置し、2025 年度は地域参加をさらに広げ、全 24 ブース規模へと発展しました。こうした取り組みに対し、橋田ゼミでは企画段階からの助言および当日のブース運営協力を通じて支援を行いました。

研究・事業内容

1. 交流会企画への助言

交流会の企画段階において、大学教員の専門的視点から、ICT やインタラクティブ技術を活用した体験型コンテンツの構成について助言を行いました。特に、

- 触れる・動く と反応が返る仕組み
- 障害特性に配慮したインターフェース設計
- 年齢差を超えて一緒に楽しめる体験設計

といった観点から、ユニバーサルデザインとデジタル技術を融合させたブースづくりを支援しました。

2. ゲームブース出展・運営協力

2025 年 11 月 28 日(金)に開催された「DX でつながるワトクの学び」に、橋田ゼミが参加しました。

会場では複数の体験型ブースが展開され、本学ブースでは、壁や床に投影された映像に触れると反応が返るインタラクティブゲームを実施しました。カメラが参加者の動きを座標として認識し、映像や音に変化する仕組みにより、全身を使って楽しめる空間を創出しました。

楽器を持った動物のイラストに触れると音が鳴る、紅葉に触れると葉が動くなど、視覚・聴覚・身体感覚を組み合わせた体験型コンテンツに、多くの児童生徒が夢中になって取り組む姿が見られました。

当日は児童生徒、その兄弟姉妹、保護者、地域住民の方々が参加し、にぎやかで温かな雰囲気の中で交流が広がりました。



壁に投影された映像に興味を示す参加者



床に投影された映像も触れることが出来る

成果や課題

得られた成果について

大学と特別支援学校が連携することで、ICT・デジタル技術を活用したユニバーサルデザイン実践のモデルを構築することができました。

児童生徒が主体的に体を動かしながら参加できる設計により、「できた」「楽しい」という成功体験を生み出すとともに、地域住民との自然なコミュニケーションの場を創出しました。

事後アンケートでも「楽しかった」「交流できた」「地域交流に有効」といった肯定的な意見が多数寄せられ、地域連携型 DX 教育の可能性が確認されました。

また、学生にとっても、専門知識を社会実装する実践機会となり、インクルーシブデザインの理解を深める学修の場となりました。

感想と今後の課題について

ICT を活用した交流は、障害の有無を越えた共通体験を生み出す有効な手段であることが明らかになりました。一方で、機材準備や運営体制の確保、継続的なコンテンツ改善など、持続可能な実施体制の構築が今後の課題です。

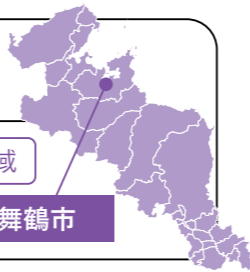
今後は、学校単独のイベントにとどまらず、地域資源や福祉施設、大学との連携をさらに深め、地域全体で「共に学び、共に楽しむ」インクルーシブな学びの場づくりへと発展させていくことが期待されます。

バイオリギング・データサイエンスを用いたオオミズナギドリの行動データの解析

担当教員／情報学部 教授 畠中利治、情報学部 講師 吉田誠
 関係組織／京都府立西舞鶴高等学校
 連携・協力者／京都冠島調査研究会 須川恒、狩野清貴

対象地域

舞鶴市



きっかけや背景

京都府立西舞鶴高等学校の冠島調査グループは、舞鶴市沖約15kmに位置する無人島・冠島において、「京都府の鳥」であるオオミズナギドリの調査および環境保全活動に取り組んでいます。本活動は1980年代より京都冠島調査研究会によって継続され、2006年からは同校も参画し、地域の自然環境や野生生物の保護・啓発活動を展開してきました。

本学との連携は、高校生の探究活動をさらに発展させることを目的に始まりました。AIやデータサイエンスを活用した調査データの高度な解析支援に加え、プログラミング指導などを通じてデジタルスキルの向上を図るなど、学際的な技術支援を行っています。



遠隔受信装置（ハブ）の設置作業

研究・事業内容

京都府立西舞鶴高等学校では、オオミズナギドリの特徴的な行動である「島まわり」に着目し、島周辺を反時計回りに飛翔する個体数の観察や、日周行動と照度の関係の分析を進めています。今年度からは新たに、動物装着型のGPSロガーを用いたバイオリギング調査を開始しました。繁殖期の個体の移動を長期的に追跡することで、行動圏や採餌域、さらには非繁殖期の渡り経路といった基礎的な生態情報の収集を目指しています。

本学は現地調査に同行し、個体数カウントや足環標識の確認、GPSロガーの装着、遠隔データ回収装置の設置などを支援しました。さらに、取得した移動データをGISで解析し、1日から2週間に及ぶ採餌旅行の行き先や海域ごとの利用頻度・滞在時間を可視化しています。また、日没前後に見られる帰島行動（島まわり）の飛行軌跡についても詳細な分析に取り組んでいます。

加えて、生成AIを活用した学習支援により、初学者である高校生が短期間で基礎知識や解析技術を習得できる環境を整えました。本学との協働研究を通じて、生徒たちは将来にも応用可能なデータ解析技術と科学的思考力を身につけています。本連携は、自然環境保全に資する新たな研究アプローチの創出と、生徒の探究活動の質的向上の双方に寄与しています。



GPSロガーを装着したオオミズナギドリ

成果や課題

得られた成果について

本調査を通じて、観察が難しい野生動物の長期的かつ高精度な行動把握手法の確立が進んでいます。特に、バイオリギング技術とGISを組み合わせた移動データ解析の導入により、高校生の情報解析スキルは大きく向上しました。また、多角的なデータ分析により、地域の自然環境保全へ科学的に貢献できる可能性が広がっています。本研究は、高校生が高度な研究手法を主体的に学び、実践する貴重な機会となっています。

感想と今後の課題について

無人島での野外調査では、不便な環境下にもかかわらず、高校生たちが朝から夜まで熱心に取り組む姿が印象的でした。その主体的な姿勢は、本連携の大きな成果の一つといえます。一方で、今年度から開始したバイオリギング調査では、ロガーの脱落や遠隔受信装置の動作不良（脱落やバッテリー切れ）など、技術的課題も明らかになりました。今後は機器運用の安定化とデータ回収率の向上を図るとともに、研究成果を地域や関係者へ効果的に還元する方法についても検討を進めていきます。

消防活動における AI 支援

対象地域

福知山市



担当教員／地域防災研究センター センター長 水口学
 関係組織／福知山市消防本部
 連携・協力者／福知山消防署警防課 救急担当課長・北近畿地域連携機構連携研究員 稲垣鎮、数理・データサイエンスセンター センター長 畠中利治

きっかけや背景

2024年4月、消防指令センターの共同運用が開始されました。「直近指令」や「ゼロ隊運用」といった広域連携型の出動体制の導入が検討され、最も早く現場に到着可能な隊の選定や、出動可能隊が不足した場合の柔軟な広域応援が可能となり、消防力の効率的な向上が期待されています。

一方で、こうした高度な運用を支えるためには、消防本部が保有する出動履歴や走行履歴、人口動態、地理情報など、多種多様なデータの高度な活用が不可欠となりました。

この課題に対応するため、2024年度より本学と福知山市消防本部との共同研究を開始しました。初年度は緊急走行推奨ルートへの提示、荒天時・災害時の安全走行ルートの検討、野生動物出没情報を含むローカルリスク情報の活用可能性などについて調査・検証を行いました。

2025年度は、実際の救急活動実績データ（2012年5月～2024年12月、約46,000件）を用いた本格的なデータ分析・シミュレーションおよびGIS活用へと発展させ、消防・救急体制の高度化を多角的に検討しました。

研究・事業内容

本研究では、消防活動の効率化と安全性向上を目的に、以下の課題について検討を行いました。

1. 救急車運用シミュレーションの高度化

救急通報の着信から出動、搬送を経て署に帰着するまでの、救急車の活動を再現するシミュレーターを構築し、現場到着時間、8分以内到着率、出動回数および出動不可事案の指標を用いて評価を行いました。車両削減時には到着時間延伸および到着率低下が顕著に見られる一方、増車のみでは大幅な改善が見られないことなどが明らかになりました。また、署の移転を行った場合の地域別影響を可視化するなど、シミュレーションの活用を検討に資する基礎資料を提示しました。

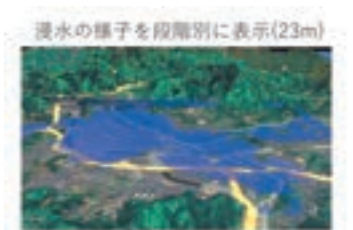
2. 防災情報可視化システムの開発

Google Earth Proや標高データを活用し、浸水想定区域、避難所、人口密度、危険箇所情報を統合的に表示する防災情報可視化システムを構築しました。

GPSログを用いた避難経路分析では、「標高差」に加えて「勾配」に着目した評価手法を導入し、車椅子利用者など避難困難者を想定した場合により現実的なルート選定が可能であることを示しました。



福知山市消防本部での成果報告の様子 Google Earth Proを活用し、水害を視覚化する



3. GISを用いた生活環境・商圏分析

人口メッシュデータ、道路ネットワークデータ、公共交通データを用いて、市内商業施設の到達圏分析を実施しました。ポロノイ分割およびネットワーク解析により、一次商圏（1000m）、二次商圏（2000m）の人口を算出し、人口減少・高齢化を背景とした生活基盤の地域格差を可視化しました。

本分析は、防災拠点配置や生活支援政策検討への応用可能性も有しています。

これらは、修士課程の学生が中心になって地理情報とシミュレーションを活用して構成したものです。実際の運用に則したシミュレーターを開発し、救急車の初期配置が到着時間などに与える影響など、計画の定量評価が可能であることを確認しました。成果の一部は学会発表を行い、消防本部への中間報告を通じて現場視点での改善点を整理しました。

成果や課題

得られた成果について

2025年度の取り組みにより、救急車運用変更の影響の定量的把握、署所配置見直し効果の可視化、避難経路評価手法の高度化、地域特性のGISによる客観的把握が実現しました。データ分析と現場の経験・感覚を組み合わせられた議論が可能となり、実務に直結する検討が進んでいます。

感想と今後の課題について

今後は、福知山市消防本部に加え、共同運用を行っている5消防本部（京都中部、舞鶴市、綾部市、宮津与謝、京丹後市）を対象とした広域分析への拡張を進めます。あわせて、道路混雑や走行速度を反映したネットワークモデルの高度化、出動準備時間や現場活動時間を組み込んだ分析の精緻化、さらに高齢者人口率などを考慮した需要発生モデルの導入にも取り組みます。

引き続き、データサイエンスと現場知を融合させ、実装可能な消防・救急支援モデルの確立を目指します。

小中高大連携

小学校との連携事例

施設見学 福知山市立大正小学校

2026年2月4日、福知山市立大正小学校2年2組の児童26人が、生活科「もっと知りたい たんけんたい」の学習の一環として本学を訪れ、キャンパス見学を行いました。

はじめに、本学地域経営学部の杉岡秀紀准教授および本学職員より、本学の概要や大学での学びについて説明を行いました。説明は、児童の皆さんが事前に準備してくれた質問に答える形で進められ、「どのような勉強をしているのですか」「全校で何人いますか」「仕事をされていてうれしいことは何ですか」など、たくさんの質問が寄せられました。児童の皆さんは、熱心に耳を傾けながら話を聞く様子が見られました。

その後、講義室やメディアセンターなどの施設を見学しました。メディアセンターでは、多くの書籍が並ぶ空間に関心を示し、「どのくらい本があるのですか」といった質問も寄せられるなど、興味深く見学する姿が印象的でした。



大学のメディアセンターに興味を持ち、質問する児童

中学校との連携事例

キャリア教育 福知山市立桃映中学校

2025年11月5日、本学にて福知山市立桃映中学校2年生79人を対象に、地域経営学部の杉岡秀紀准教授によるキャリア講演が行われました。

当日は、「探究の意義と問いの作り方～地域探究と自分探究～」をテーマに、自ら考え行動するための“問い”の力について学びました。講演に続くワークショップでは、「自分は何に関心があるのか」「どのような問いを立てれば探究が深まるのか」を切り口に、思考を広げる時間となりました。

生徒たちは、問いの立て方次第で見える世界が変わることを実感し、自分自身の将来像や関心テーマをあらためて見つめ直しました。



キャリア講演に意欲的に参加する生徒

学生交流 舞鶴市立和田中学校

2026年2月6日、舞鶴市立和田中学校1年生26人が、探究的な学習「和田クエスト」の一環として本学を訪問しました。

はじめに、杉岡准教授による講義が行われ、その後、杉岡ゼミの学生が各グループに入り、生徒の個人探究テーマについて意見交換を行いました。「なぜ舞鶴市には2つのまちがあるのか」「なぜ学校に行かなければならないのか」「どうすればいじめをなくすことができるのか」など、多様な問いをもとに、課題の整理や問いの深め方について学びました。

昼食は学内のPILLAR Diningで学食体験を行い、食後にはゼミ生による「大学ってどんなところ？」をテーマとした紹介がありました。

最後に、講義室やメディアセンターなどの施設を見学し、大学での学びの環境を体感しました。



PILLAR Dining（学生食堂）で学食を体験する生徒

北近畿の小学校・中学校・高等学校と連携し、本学のキャンパス見学や授業等の体験を実施しています。本報告書で紹介する6件のほか、高大連携として出張講義や高等学校の授業・イベントへの参加等も行いました。

高等学校との連携事例

協働支援 京都府立福知山高等学校

2025年11月22日・23日、本学地域防災研究センターと大門ゼミ、本学学生団体「七福ふっこう隊」が、京都府立福知山高等学校と協働し、石川県七尾市・輪島市・珠洲市において「次世代へつなぐ支援のバトプロジェクト」を実施し、被災地の現状を学ぶとともに、住民の方々との交流活動を行いました。

初日は、七尾市中島町にて輪投げ大会や緑日カフェなどの交流企画を実施し、避難生活や復旧への思いを直接伺いました。住民の方々との対話を通して、災害支援における人と人とのつながりの大切さを学びました。2日目は、輪島市や珠洲市の被災地を視察し、海岸隆起や火災跡などを自らの目で確認することで、復旧の現実と課題を実感しました。

本活動は、若い世代が被災地と向き合い、支援の思いを次世代へつなぐ貴重な学びの機会となりました。



七尾市での緑日カフェで交流を楽しむ参加者と学生

出張講義 京都府立亀岡高等学校

2025年11月18日、情報学部 衣川昌宏准教授が、京都府立亀岡高等学校にて、探究文理科1年生41人を対象に出張講義を実施しました。

講義は「3Dプリンタの仕組みの理解と活用について」と題して行われました。はじめに、3Dプリンタの種類や造形方式の違い、データ作成から出力までの基本的な流れについて解説し、デジタルものづくりの基礎知識を学びました。

続いて、3DCADソフト「Fusion360」を用いたモデリングに挑戦し、立体物を設計する際の考え方や操作方法を実践的に体験しました。作成した3Dデータは実際にプリントアウトし、データがどのように形となっていくのかを確認しました。

設計から出力までの一連のプロセスを体験することで、生徒の皆さんはデジタル技術とものづくりのつながりを具体的に理解し、情報技術の可能性や面白さを実感する機会となりました。



3Dプリンタによるプリントアウトに興味深そうに見つめる生徒

出張講義 京都府立綾部高等学校

2026年2月24日、情報学部 井上一成教授が、京都府立綾部高等学校にて、1・2年生429人を対象に講演会を実施しました。

本講演会は、令和7年度高等学校DX加速化推進事業（DXハイスクール）に採択されている同校において、生徒がAIリテラシーを理解し、主体的に活用できる力を育成することを目的として開催されたものです。

講演は「AI時代を生きるためのリテラシーと活用の視点」と題して行われました。生成AIごとの特徴や具体的な活用例、利便性と危険性について紹介があり、生徒たちは熱心に耳を傾けました。また、LINEやインスタグラムにおける位置情報の取り扱いに関する注意点や、各生成AIサービスでのプライバシー設定についても具体的な説明があり、身近な事例を通して理解を深めました。

今回の講演は、生徒の皆さんがAI時代に必要な視点を身につけ、自ら考えながら情報技術を活用していく姿勢を養う貴重な機会となりました。



AIの利便性とリスクについて学ぶ講演の様子

地域防災研究センター

センター概要

地域防災研究センターは、本学が有する地域経営学および情報学の専門的知見を活かし、これまで多くの災害を経験してきた福知山地域を中心に、防災に関するデータの収集・分析を行っています。

これらのデータをもとに、地域防災の現状を把握し、課題を明らかにするとともに、具体的な対応策の検討を進めています。また、研究成果を社会へ還元し、より実効性のある地域防災のあり方を提言することで、自治体の防災・危機管理の強化に貢献することを目的としています。

防災士養成講座の開講

近年、豪雨による災害が増加し、自然災害の頻発化・激甚化が懸念されています。こうした状況のなか、防災・減災について正しく学び、地域や職場でリーダーとして行動できる人材の育成が求められています。

そこで本学では、災害への理解を深め、自己防災能力を高めるとともに、地域コミュニティに貢献できる「防災士」の育成を目的として、防災士養成講座を昨年度に引き続き開講しました。

本講座は、本学の学生および教職員を対象に、座学を中心とした2日間の講義、普通救命講習を含む実践的なプログラムを組み合わせた、3日間の短期集中型カリキュラムで構成されています。

この取り組みにより、過去3年間で88人の防災士を養成することができました。今後、修了者が地域や職場において防災活動の担い手として活躍することが期待されます。



3日間の短期集中型カリキュラムで、防災士としての知識とスキルを習得

地域防災連続セミナーの開催

自然災害はいつ発生するか分かりません。日頃からの備えと正しい知識が、命と地域を守る力になります。

本セミナーでは、「災害と対応」「復興」「準備」「福知山」の4つのテーマを軸に、各回異なる専門家を講師として招き、多様な視点から防災について学ぶ機会を提供しました。地域防災に関する知識の向上と、具体的な減災対策の理解を深めることを目的としています。

また、地域の防災関係者や専門家と参加者が交流できる場づくりも重視し、講義内容を振り返りながら「自分ごと」として防災を考える機会を創出しました。

特別回セミナーの概要

特別回では、2023年8月に福知山・綾部地域で発生した「急襲型豪雨」による土砂災害を取り上げました。現地の地形や森林状況、避難の難しさ、放置竹林や中世山城跡といった地域特有の要素にも着目し、地域に潜むリスクとどのように向き合うべきかを多角的に議論しました。

当日は41人が参加し、市民と大学が共同で記録・分析した研究成果をもとに、地域の防災力や避難行動について意見交換を行いました。「山にも目を向ける必要があると感じた」「地域での防災の取り組みの大切さがよく分かった」といった声が寄せられ、災害を“我がこと”として捉える機会となりました。

地域防災連続セミナーを通じて、参加者が防災意識を高め、防災リーダーとしての第一歩を踏み出すきっかけとなることを期待しています。



市民交流プラザふくちやまにて開催された特別回セミナーの様子

[地域防災連続セミナー 講座一覧]

回	開催日	テーマ	講師
特別回	2025年 9月14日	後ろから来た災害 急襲型豪雨と避難の難しさ - 福知山・綾部の土砂災害から考える地域と命の守り方 -	大門大朗 (地域経営学部 准教授) 小滝篤夫氏 (京都府立大学 非常勤講師・共同研究員) 畑中英樹氏 (京都府中丹広域局森づくり振興課林業振興係) 仁張衛氏 (大江町藤原自治会長、福知山自主防災ネットワーク会長) 水口学 (地域防災研究センター長)
第1回	2025年 10月24日	災害時のリーダーシップについて - 2004年台風23号から20年 -	中貝宗治氏 (前豊岡市長/一般社団法人豊岡アートアクション理事長/本学客員教授)
第2回	2025年 11月7日	台湾における官民連携の災害対応 - 2024年花蓮地震を事例に -	李勇昕氏 (立正大学人文科学研究所 研究員)
第3回	2025年 11月21日	発災時における地域コミュニティの重要性 - 能登半島地震における避難所運営と復興について -	谷一浩平氏 (NOTORN 代表、七尾市中島町中島小学校避難所運営リーダー)
第4回	2025年 12月12日	KOBE から世界へ - 支え合い・学び合いの現場から -	吉椿雅道氏 (CODE 海外災害援助市民センター 事務局長)
第5回	2025年 12月19日	東日本大震災から15年を振り返る - チーム・オール弘前の原動力とその可能性 -	李永俊氏 (弘前大学人文社会科学部 教授)
第6回	2026年 1月9日	草の根の震災記録は何を駆動させるのか - 阪神・淡路大震災の体験募集事業「30年目の手記」から考える -	高森順子氏 (情報科学芸術大学院大学産業文化研究センター 研究員)
第7回	2026年 2月6日	令和元年台風から生まれた人形劇「やまのおおじゃくぬけ」	瀬尾夏美氏 (作家、画家)
第8回	2026年 2月27日	終わりの見えない災害、多重被災の実像	小林秀行氏 (明治大学情報コミュニケーション学部 准教授)
第9回	2026年 3月22日	能登半島地震支援活動報告会 - 福知山からの支援活動2年を振り返る -	水口学 (地域防災研究センター長) 大門大朗 (地域経営学部 准教授) 七福ふっこう隊 (本学学生サークル)

国際センター

センター概要

国際センターは、地域課題の解決に資する学術交流を推進するため、海外の大学・研究機関との連携事業を展開しています。これにより本学の研究力向上を図るとともに、日本の地域課題やその解決に関する知見を海外の研究者と共有し、国内外へ広く発信しています。

また、世界的な視野を持ちつつ地域社会で活躍できる「グローバル人材」の育成を目標に、留学プログラムの充実や国際交流機会の拡充を進めています。学生が国際的視野を養う環境を整備するとともに、海外の学生・研究者との交流機会を積極的に創出しています。

さらに、海外からの留学生受け入れ体制の整備を進め、地域の学生と海外の学生が互いに学び合う環境づくりを推進しています。あわせて、地域における多文化共生事業や国際交流活動への協力、教員の専門性を生かした出張講義や市民向け講演会の実施などを通じて、地域の国際化にも貢献しています。地域の学校においては、外国語教育支援や異文化理解促進にも取り組んでいます。

英語サロン

学生および地域住民の英会話力向上と異文化理解の促進を目的として、2025年4月から翌年1月にかけて英語サロンを実施しました。近隣地域のALT（外国語指導助手）であるネイティブ講師や海外大学教員、本学学生を招き、英語による交流の場を提供しました。

参加者は事前にテーマに沿ったプレゼンテーション資料を準備し、当日は挙手制で発表を行いながら英語で意見交換を行いました。本サロンは市民にも開放しており、さらにアジア地域の大学からオンライン参加もあり、国内外をつなぐ活発な交流の機会となりました。

2025年度の開催日程は、4月25日、5月30日、6月27日、10月31日、11月28日、12月19日、1月23日と計7回実施した。延べ参加者は本学教員13名、本学職員2名、ネイティブ講師16名、本学学生11名、市民41名、海外からのオンライン参加者52名でした。



オンライン参加者を交えて実施された英語サロンの様子

中学生短期留学プログラム

福知山市教育委員会が実施する中学2年生対象の短期留学プログラムに対し、本センターは昨年度より事前学習会で協力しています。

本プログラムでは、多数の応募者の中から選抜された15人の生徒が、夏休み期間中にカナダ・バンクーバーへ留学します。本センターでは、5月7日と6月11日の2回にわたり事前学習会を実施し、黄宏軒センター長およびWalsh准教授が指導を担当しました。

学習会では、自己紹介などの基礎的な英会話練習に加え、現地で発表予定の日本文化紹介プレゼンテーションの指導を行いました。また、帰国後の8月30日に開催された成果発表会にも出席し、生徒の発表を見守りました。

短期留学生受け入れ事業

交流協定のある海外5大学（静宜大学、国立台中教育大学、ディーキン大学、ECU、ベトナム銀行学院大学）に募集を行った結果、静宜大学から3人、国立台中教育大学から1人の参加希望がありました。

7月6日から7月19日までの2週間、短期留学プログラムを実施しました。留学生は市内でホームステイを行いながら、日本語研修、本学授業体験、福知山盆踊りなどの文化体験、本学学生との交流、舞鶴・夜久野への小旅行など、多様なプログラムに参加しました。



台湾からの交換留学生と本学学生の交流



福知山踊り体験会の様子

短期留学プログラム（オーストラリア）

本学と覚書を締結しているディーキン大学（オーストラリア・メルボルン）への短期留学プログラムを、8月12日から9月15日にかけて実施しました。本プログラムは語学力向上を目的としており、本センターは運営支援を行いました。

今年度から単位認定が開始されましたが、円安の影響もあり、参加者は昨年度より減少し5人となりました。帰国後の10月22日および10月29日には報告会を開催し、参加学生が留学成果や学びを発表しました。

英語によるスピーチコンテスト

12月10日、本センター主催で英語スピーチコンテストを開催しました。本学学生8人が参加し、アニメ監督宮崎駿さんに関するエピソードをベースとしたオリジナルな原稿を朗読または暗唱する形式で発表を行いました。審査は本学の教職員4人が務め、講評の後、最優秀賞、優秀賞、準優秀賞が発表され、表彰が行われました。



スピーチコンテストでの発表の様子



スピーチコンテストの参加者と審査員

短期留学プログラム（台湾）

2025年4月16日（水）および23日（水）、海外の大学や研究機関との学術・学生交流の促進を目的に、本センターが実施する「2024年度春期台湾短期留学プログラム」報告会を開催しました。

本プログラムは語学力の向上を主な目的として実施しており、8人の学生が参加し、台湾・台中市にある静宜大学において約2週間の研修を行いました。

報告会では、留学中の学修内容や現地での体験について発表が行われ、参加学生からは「価値観が広がった」「中国語学習への意欲が高まった」などの感想が寄せられました。

また、3月8日から3月21日にかけて「2025年度春期台湾短期留学プログラム」を実施し、今年度は6人の学生が参加しました。



留学中の体験について発表を行う参加学生

数理・データサイエンスセンター

センター概要

近年、生成 AI は目覚ましい発展を遂げています。その背景には、大量のデータを処理し、プロンプトに回答を生成する高度な数理モデルの存在があります。こうした人工知能の発展と活用を支えるため、我が国では 2020 年前後から官民一体となってデータサイエンス教育の充実が進められてきました。

本学では、2020 年に情報学部を設置し、翌 2021 年度よりデータサイエンス分野の教育・研究を推進する組織の設立準備を開始しました。そして 2022 年度、北近畿地域における教育・研究の拠点として数理・データサイエンスセンターを設立しました。

本センターは、本学の両学部をはじめとする学内外の多様な機関と連携し、地域におけるデータサイエンスの中核的拠点となることを目指しています。

また、人工知能の発展に伴い、統計学やデータサイエンスのみならず、数理モデルを扱う数理学の重要性も広く認識されるようになりました。本センターでは、社会に貢献するデータサイエンスの普及・推進に取り組むとともに、数理学分野の研究にも重点を置き、センター長を中心に本学教員の協力のもと活動を展開しています。

研究プロジェクト

本センターでは、数理・データサイエンス分野に関する共同研究を推進し、その成果を地域社会へ還元することを目指しています。

[主な研究プロジェクト]

研究テーマ	発表者	発表場所
オオミズナギドリの生態調査のための動画に基づく群れのサイズと飛行速度の推定	矢頭安樹、井手上哲士、田中彰一郎、畠中利治、本藤聡仁（京都府立西舞鶴高校）	第 26 回コンピューテーショナル・インテリジェンス研究会（7 月）
実データを用いた救急車運用シミュレータの妥当性検証	小川晃史、堀井一壽、田中彰一郎、畠中利治、水口 学	第 33 回インテリジェントシステムシンポジウム（9 月）
福知山市の救急出動データに基づく需要予測モデル構築のための基本的検討	堀井一壽、小川晃史、田中彰一郎、畠中利治、水口 学	第 33 回インテリジェントシステムシンポジウム（9 月）

2025 年 7 月に開催された第 26 回コンピューテーショナル・インテリジェンス研究会では、冠島のオオミズナギドリの生態調査に関する研究成果を、本学大学院生が発表しました。本研究は京都府立西舞鶴高等学校との連携のもとで実施したものであり、現在も協力関係を継続しています。今年度はバイオロギング手法を用いた生態調査を実施し、その成果を取りまとめています。

また、地域防災研究センターと共同で進めている「消防活動における AI 支援」に関する研究成果として、第 33 回インテリジェントシステムシンポジウムにおいて、本学大学院生 2 人が計 2 件の発表を行いました。さらに、福知山市消防本部にて本学学生 2 人、大学院生 1 人が計 3 件の成果報告を行いました。



→ P.54 消防活動における AI 支援



→ P.53 バイロギング・データサイエンスを用いたオオミズナギドリの行動データの解析

数理・データサイエンス教育

数理・データサイエンスセンターでは、本学におけるリテラシーレベルの数理・データサイエンス・AI 教育プログラムの履修促進に取り組んでいます。

本プログラムは、「数理・データサイエンス・AI 教育強化拠点コンソーシアム」が策定したモデルカリキュラムに準拠しており、一定の要件を満たした教育プログラムとして文部科学大臣の認定を受けています。

[数理・データサイエンス・AI 教育プログラム（リテラシーレベル）の科目構成]

履修科目（全学共通科目群）	単位数	担当教員
データサイエンス入門	2	畠中利治教授
情報リテラシー	2	衣川昌宏准教授
統計学	2	倉本到教授

本学では、全学共通科目群の指定 3 科目の単位修得者をリテラシーレベルの履修者とし、希望者には認定書を発行しています。2020 年度から 2025 年度前学期までに 632 人が履修認定を受けました。

2026 年度からのカリキュラム改訂により、リテラシーレベル科目は両学部 1 年次の必修科目となりました。今後は、卒業生全員がリテラシーレベルの履修認定を得られる体制の確立に向け、特に統計学を中心とした数理学系科目の学修支援を一層強化する必要があります。

そのため、教育方法の継続的な改善に加え、リメディアル教育や学修支援体制の充実を図っていきます。本センターは、本学のみならず北近畿地域における数理・データサイエンス教育の拠点として、社会人や高校生も対象とした教育活動を展開していくことが期待されています。

なお、文部科学省によるリテラシーレベルコースの認定は 2025 年度で有効期間が終了します。2026 年度からの再認定に向けて新カリキュラムに基づくコースを整備し、1 月に再認定申請を行いました。

福知山数理・データサイエンス研究会

情報学部および大学院地域情報学研究科における研究活動の活性化、特に在学生による数理学・データサイエンス分野の研究推進を目的として、2025 年度も福知山数理・データサイエンス研究会を 9 月 15 日に開催しました。

当日は、招待講演 2 件に加え、大学院生を含む本学学生による 11 件の発表を含む計 13 件のポスター発表が行われ、活発な議論が展開されました。

外部研究者による審査の結果、田中柊兵さんの発表「多目的最適化問題のランドスケープ分析」が優秀ポスター賞に選出されました。なお、田中さんには、2025 年 7 月にスペインで開催された ACM 主催の国際会議 GECCO 2025 への参加助成も行っていきます。

こうした支援を通じて、学生の研究意欲の向上と研究活動のさらなる発展につながることを期待しています。



福知山数理・データサイエンス研究会でのポスターセッションの様子

社会人向け教育

データサイエンスやデジタルトランスフォーメーション（DX）は、データ駆動型社会の実現に不可欠な要素です。一方で、従来の教育課程では体系的に学ぶ機会が限られており、社会人にとって学び直しのハードルが高いという課題があります。

本センターでは、福知山市が実施するシニアワークカレッジに参画し、データサイエンス講座の企画・運営を担当しています。今後も地域の学び直しニーズに応え、実践的な教育機会の提供を進めていきます。



→ P.23 シニアワークカレッジ

講演講師、委員等派遣実績

本学教員が、講師や委員等として派遣・委嘱等された主な実績です。

福知山市

組織名	協議会や事業等の名称	教員名
福知山市	福知山市指定管理者制度第三者評価委員会委員	井上直樹
	第 53 回京都府都市監査委員会事務局職員研修会講師	井上直樹
	福知山市上下水道事業経営審議会委員	齋藤達弘
	福知山市ふるさと納税業務委託公募型プロポーザル外部有識者	亀井省吾
	NEXT産業創造塾コーディネーター	
	福知山市自治基本条例推進委員会委員	木村昭興
	福知山市指定管理者選定委員会委員	木村昭興 星雅丈
	京都府立工業高等学校でのゲーム「血液ファクトリー」製作講演講師	倉本到
	ワールドマスターズゲームズ 2021 関西福知山市実行委員会幹事	黄宏軒
	「福知山市学校施設証明 LED 化推進事業」公募型プロポーザル外部有識者	
	福知山市環境審議会委員	中尾誠二
	令和 7 年度福知山市地域おこし協力隊受入候補団体ヒアリングアドバイザー	
	福知山市危機管理アドバイザー	
	福知山市避難のあり方推進懇話会委員	水口学
	福知山市大規模災害対応力強化検討会委員	
	花火大会検証会議委員	
	福知山市交通対策協議会委員	吉田誠
	探究活動「みらい学」講師	山本吉伸
	福知山市人権問題協議会委員	大谷杏
	福知山市企業交流プラザ基本計画策定委員会委員	佐藤充
	福知山市企業交流プラザあり方検討会委員	
	福知山市地域公共交通会議調整部会委員	佐藤恵
	福知山市まちづくり講座講師	杉岡秀紀
	福知山市避難のあり方推進懇話会委員	
	福知山市大規模災害対応力強化検討会委員	
	第 4 回福知山市大規模災害対応力検討委員会委員	
	第 3 回福知山市大規模災害対応力強化検討委員会出席依頼	大門大朗
	災害時ケアプランに基づく避難訓練振り返り会議ファシリテーター	
	福知山市雨水管理総合計画の策定に係る懇話会	
	令和 7 年度第 1 回福知山市都市計画審議会出席依頼	
	旧三和会館活用事業優先交渉権者選定会議	張明軍
	福知山市障がい者策定委員会委員	
	福知山市高齢者対策協議会委員	星雅丈
福知山市情報公開・個人情報保護審査会委員		
福知山市健康づくり推進協議会委員		
福知山市行政不服審査会委員	三好ゆう	
福知山市特別職報酬等審議会委員		
福知山市教育委員会	令和 7 年度「教育 DX 推進会議研修会」出席依頼	池野英利 倉本到 山本吉伸 橋田光代 吉田誠

組織名	協議会や事業等の名称	教員名
福知山市教育委員会	はばたけ世界へ中学短期留学事業令和 7 年度海外留学 事前学習会講	黄宏軒 Anthony walsh
	福知山市文化財保護審議会委員	小山元孝
	外国語指導助手 (ALT) 派遣業務の公募型プロポーザル外部有識者	渋谷節子
	福知山市社会教育委員	
	福知山市教育委員会事務点検評価委員	
	第 4 次福知山市子どもの読書活動推進計画策定委員	大谷杏
	はばたけ世界へ中学短期留学事業令和 8 年度海外留学生徒の 2 次選考面接官	
	福知山市教育委員会委員	大門大朗
	共に幸せを生きるまちづくり人権講演会講師	
	令和 7 年度中丹地方教育委員会連絡協議会委員研修会講師	福嶋真治
福知山商工会議所	令和 7 年度中丹教育委員会連絡協議会委員研修会講師	
	福知山商工会議所経営発達支援計画外部評価委員	佐藤充
福知山市議会	福知山市議会総務防災委員会研修会講師	川添信介
	福知山市議場音響システム等更新業務の公募型プロポーザル方式外部有識者	井上直樹
社会福祉法人 福知山市社会福祉協議会	福知山市災害ボランティアセンター運営委員会委員	大門大朗
	令和 7 年度「地域福祉フォーラム」講師	杉岡秀紀
交通対策協議会	福知山市交通対策協議会委員	吉田誠
	一般社団法人長田野工業センター 産業集積の類型と長田野工業団地の特徴講演	井上直樹
川合村史編さん委員会	川合村史編さん委員会専門部会委員	小山元孝
福知山観光協会大江支部	大江地域の観光振興に関する助言・提言アドバイザー	山本吉伸
福知山ドッコイセまつり実行委員会	令和 7 年度福知山ドッコイセまつり実行委員会委員	谷口知弘
うぶやの里フェスタ in みわ	うぶやの里フェスタ in みわ実行委員会出席依頼	小山元孝
株式会社むらいち	講演会「北近畿を日本一の観光地に！」パネラー	山本吉伸
京都府立福知山高等学校	福知山高等学校学校運営協議会会長	杉岡秀紀
	みらい学 I 講師	
京都府立大江高等学校	学校運営協議会委員	大門大朗
京都共栄学園中学校高等学校	「国際的な舞台で活躍するための力はどうにして培うことができるか」について講師	渋谷節子
川口地域公民館	令和 7 年度人権講演会講師	水口学

舞鶴市

組織名	協議会や事業等の名称	教員名
舞鶴市	舞鶴市史編さん委員会・専門部会委員	小山元孝
	令和 7 年度両丹文化財保護連絡協議会講師	
	令和 7 年度舞鶴総合防災訓練	水口学 大門大朗
	東西地域公共施設まちづくりワークショップアドバイザー	
	舞鶴市指定管理者選定委員会委員	杉岡秀紀
舞鶴自治連・区長連協議会	令和 7 年度教育講演会講師	
	自治会長・区長のつどい講師	杉岡秀紀
舞鶴市大浦小学校	防災研修講師	大門大朗
舞鶴市立和田中学校	校外学習講師	杉岡秀紀
舞鶴市立城南中学校	PTA 人権講演会講師	大門大朗
学校法人聖ヨゼフ学園	令和 7 年度文部科学省「新時代に対応した高等学校改革推進事業(普通科改革支援事業)」委員	大門大朗

綾部市

組織名	協議会や事業等の名称	教員名
綾部市	綾部市振興計画審議会委員	谷口知弘
綾部市	令和7年度綾部市職員政策形成研修講師	杉岡秀紀
	中学生みらい会議ファシリテーター	
	京都府北部地域連携都市圏形成推進協議会「高校生みらいの会議」ファシリテーター	
	綾部市行政不服審査委員会委員	三好ゆう
一般社団法人綾部青年会議所 株式会社あやべ市民新聞社 株式会社エフエムあやべ	綾部市長総選挙・府議員選挙公開討論会コーディネーター	杉岡秀紀
京都府立綾部高等学校	綾部高等学校学校運営協議会委員	谷口知弘

宮津市

組織名	協議会や事業等の名称	教員名
宮津市	宮津市特別職報酬等審議会委員	井上直樹
	宮津市自殺対策推進協議会委員	川島典子
	宮津市就学前施設の保育サービス拡充・適正化研究会アドバイザー	小山元孝
	宮津市庁基本構想等検討委員会委員	
	宮津市空家空地協議委員会委員	谷口知弘
	宮津市空家対策協議会委員	大門大朗
	島崎・浜町ウォーターフロントエリア活性化検討委員会委員	三好ゆう
	宮津市特別職報酬審議会委員	
宮津市持続可能な行財政運営有識者会議有識者	大門大朗	
宮津市自治連合協議会	自治会組織等が持つ課題解決のための取組みについてファシリテーター	佐藤充
京都府立海洋高等学校	海洋高等学校学校運営協議会会長	杉岡秀紀
京都府立宮津天橋高等学校	宮津天橋高等学校学校運営協議会会長	杉岡秀紀
	令和7年度京都府宮津天橋高等学校宮津学舎総合的な探究の時間中間報告会講師	

京丹後市

組織名	協議会や事業等の名称	教員名
京丹後市	京丹後市職員政策提言プロジェクト講師	杉岡秀紀
京丹後市教育委員会	京丹後市史跡整備検討委員会委員	小山元孝
	網野銚子山古墳史跡整備完了記念イベント出席依頼	大谷杏
	京丹後市社会教育委員会委員	
第17回全国水源の里シンポジウム実行委員会	第17回全国水源の里シンポジウム講師	杉岡秀紀
京都府立丹後緑風高等学校	丹後緑風高等学校学校運営協議会会長	佐藤充
	令和7年度第19回丹後活性化プレゼンテーション大会	福島真治
京都府立清新高等学校	校内支援スーパーバイザー・アドバイザー会議出席依頼	福島真治
京都府立峰山高等学校	峰山高等学校学校運営協議会委員	福島真治

伊根町

組織名	協議会や事業等の名称	教員名
伊根町	伊根町総合計画審議会委員	谷口知弘 佐藤充
伊根町教育委員会	伊根町いじめ防止対策推進委員会委員	福島真治
	伊根町小学校再編準備委員会委員	

与謝野町

組織名	協議会や事業等の名称	教員名
与謝野町	与謝野町空家対策協議会委員	谷口知弘
	与謝野町総合計画審議会委員	
	与謝野町住民参画まちづくり推進業務事業者選定委員	
与謝野町教育委員会	与謝野町ふるさとまちづくり活動応援補助金の令和7年度団体登録に対する意見徴取アドバイザー	杉岡秀紀
	与謝野町文化財保存活用地域計画推進協議会委員	小山元孝
	令和7年度与謝野町文化財保存活用地域計画推進協議会アドバイザー	大谷杏
	与謝野町教育委員会事務事業評価委員会委員長	福島真治
福知山公立大学 北近畿地域連携機構 学校組織レジリエンスユニットアドバイザー		福島真治
夢と希望の与謝野町をつくる まちづくりフォーラム実行委員会	夢と希望の与謝野町をつくるまちづくりフォーラムコーディネーター	杉岡秀紀

京都府北部（広域）

組織名	協議会や事業等の名称	教員名
丹後広域振興局	総合評価一般競争入札有識者	佐藤充
	令和7年度京都府地域交響プロジェクト交付金意見聴取会委員	杉岡秀紀
中丹広域振興局	中丹イノベーション推進プログラムゲストスピーカー	杉岡秀紀
中丹東保健所	中丹地域経済牽引事業促進委員会委員	杉岡秀紀
	令和7年度京都健康長寿・未病改善センター事業中丹東ブロック協議会及び糖尿病重症化予防地域戦略会議アドバイザー	岡本悦司
京都府中丹教育局	令和7年度中丹校長防災研修会講師	大門大朗
一般社団法人京都府北部 地域連携都市圏振興社	令和7年度「海の京都観光戦略改定委員会」委員	杉岡秀紀
	福知山観光協会土産品審査委員会委員	張明軍
京都府北部連携都市圏形成 推進協議会	環境・防災部会講師	大門大朗

北部以外の京都府下での活動

組織名	協議会や事業等の名称	教員名	
京都府	北近畿タンゴ鉄道生活交通改善事業計画に関する協議会委員	谷口知弘	
	京都府文化力チャレンジ補助金の交付申請に係る書面審査及び意見聴取会議	山田篤	
	京都府情報公開・個人情報保護審議会委員		
	総合評価一般競争入札外部有識者	佐藤充	
	令和7年度「子育て環境日本一・きょうと表彰」審査会委員	杉岡秀紀	
	「京都府子育て支援団体認証制度」認証団体の審査に係る検討委員会委員		
	令和7年度子育て団体交流会講師		
	京都駅周辺エリアまるごとゲートウェイ情報発信業委託事業者選定外部有識者 出席依頼		
	京都市	企業向けセミナー「人材確保塾」講師	大門大朗
		「子育てにやさしい職場環境づくりサービス創造補助金」事業者選定外部有識者	
京都府明るい選挙推進協議会委員			
令和7年度京都府防災士養成講座講師			
総合評価一般競争入札外部有識者		山田篤	
京都市選挙人名簿管理等標準準拠システム導入業務		谷口知弘	
亀岡市まちづくり協働推進委員会委員			
宇治田原町まちづくり総合計画審議会委員			

組織名	協議会や事業等の名称	教員名
精華町	精華町議会全議会研修会講師	木村昭興
精華町	精華町コミュニティホール指定管理者選定委員会委員 せいこまちづくり塾 2026 講師	杉岡秀紀
京都府教育委員会	「AL (アドバンスト・ラーニング) ネットワーク事業」令和 7 年度 京都府 WWL 高校生サミットアドバイザー	杉岡秀紀
丹波地区社会教育委員会	令和 7 年度丹波地区社会教育委員協議会研修会講師	杉岡秀紀
丹波地区社会教育委員協議会	令和 7 年度丹波地区社会教育委員協議会講師	杉岡秀紀
京都府総合教育センター	令和 7 年度京都府総合教育センタープロジェクト研究協議会講師	福嶋真治
大阪・関西万博きょうと推進委員会	大阪・関西万博における京都ブース企画・運営業務委託事業者選定外部有識者 第 23 回高大連携教育フォーラムコーディネーター	杉岡秀紀
公益財団法人 大学コンソーシアム京都	大学コンソーシアム京都コーディネーター 都市政策研究推進委員会委員	岡本悦司 木村昭興
京都府生涯現役 クリエイティブセンター	令和 7 年度京都府生涯現役クリエイティブセンター研修事業講師	亀井省吾 杉岡秀紀
公益財団法人京都府市町村 振興協会	令和 7 年度市町村職員等協同研修「チーム型政策研究プログラム」 講師	亀井省吾
けいはんな情報通信 オープンラボ研究推進協議会	けいはんな情報通信オープンラボ研究推進協議会モノづくり DX 準備 WG 主査	才木常正
KYOTO 地域文化をつなぐミュー ジウム プロジェクト実行委員会	丹後震災 100 年記念イベント「100 年超しのシャッター」講師	大門大朗
STS フォーラム支援京都実行委員会	省エネとスタートアップが支える京都の未来モデレーター	杉岡秀紀
公益財団法人京都 SKY センター	京都 SKY 大学講師	小山元孝
京都市動物園	市民講座「動物園 DE サイエンストーク」講師	吉田誠
京都府消防団 OB 会	令和 7 年度京都府消防団 OB 会研修会講師	大門大朗
京都府立高等学校 PTA 連合会	令和 7 年度京都府立学校 PTA 指導研修会 (両丹ブロック) 講師	大門大朗
宇治市災害ボランティアセンター	宇治市災害ボランティアセンター総会講師	大門大朗

丹波市

組織名	協議会や事業等の名称	教員名
丹波市	丹波市人権行政推進審議会委員 令和 7 年度市民のしあわせ実感モニタリングファシリテーター 第 1 回丹波市議会議員政治倫理審査会委員	渋谷節子 杉岡秀紀
丹波市立柏原中学校	丹波市立柏原中学校指定研修講師 3 年生発表パネルディスカッションパネラー	杉岡秀紀

朝来市

組織名	協議会や事業等の名称	教員名
朝来市	朝来市行財政改革推進委員会委員、生野高校コンソーシアム IKUNO 協議会委員 朝来市企業奨励措置審査会委員 令和 7 年度朝来市教頭研修会講師	倉田良樹 加藤好雄 福嶋真治

その他の兵庫県北部での活動

組織名	協議会や事業等の名称	教員名
豊岡市	豊岡市こども・子育て会議委員	川島典子
網野町郷土文化保存会	歴史講座「文化的景観という視点から見た浅茂川」講師	小山元孝

京都府と兵庫県北部以外での活動

組織名	協議会や事業等の名称	教員名
神戸市	神戸市公共施設包括管理業務にかかる委託事業者選定委員会委員	杉岡秀紀
佐用町	若者グループ活動応援事業審査員 佐用町まちづくり推進会議顧問	杉岡秀紀
枚方市	議員研修会「主権者教育から主権者『学(楽)習』へ」講師	杉岡秀紀
守山市	守山市豊かな市民活動のまち応援事業認定委員会委員 第 3 次守山市行政経営方針の策定アドバイザー	杉岡秀紀
石川区	石川区の運営に係る勉強会講師	杉岡秀紀
羽咋市	住民自治活動発表会 & 学習会講師	杉岡秀紀
稲沢市	令和 7 年度「主権者教育アドバイザー」講師	杉岡秀紀
長野市	長野市中山間地域のあり方研究会アドバイザー	小山元孝
山都町	山都町ふるさと納税に係る第三者委員会委員	井上直樹
福岡県	令和 7 年度政治学級活性化研究会講師	杉岡秀紀
生駒市教育委員会	多様な働き方を考えるセミナー講演会講師	杉岡秀紀
関西広域連合広域防災局	関西広域防災計画策定委員会委員	水口学
関西広域連合計画策定委員会	広域防災拠点検討専門部会委員 監督職研修講師	杉岡秀紀
兵庫県自治研修所	地域別研修人口減少時代の地方自治体の将来展望講師	杉岡秀紀
北大阪市監査委員会	北大阪市監査委員会第 3 回職員事務研修会講師	井上直樹
千里山コミュニティ協議会	第 23 回サイエンスカフェ「生体計測術が拓く、私たちの未来」講師	才木常正
三重県町村会	副町長会議講師	杉岡秀紀
石川地域づくり協会	令和 7 年度いしかわ地域づくり塾講師	杉岡秀紀
近畿都市選挙管理委員会連合会	第 76 回近畿都市選挙管理委員会連合会総会講師	杉岡秀紀
一般社団法人日本応用数学会	一般社団法人日本応用数学会学会誌編集委員会委員	渡邊扇之介
社会保険診療報酬支払基金	傷病名マスター作業委員会委員	佐藤恵
NPO 政策研究所	2025 年度市民自治講座 (第 3 回) 講師	杉岡秀紀
株式会社 自然総研	東大阪市「事業のスクラップ & ビルド研修」講師	杉岡秀紀
人材ニュース株式会社	経済産業省補助事業令和 7 年度「地域の人事部」事業講師	亀井省吾
総務省	大規模自然災害時の通信サービス確保のための連携訓練視察・講評	大門大朗
神奈川県立金沢文庫	学術指導会講師	小山元孝
キャリア JuicyColor's	キャリア JuicyColor's 勉強会講師	杉岡秀紀
株式会社日経コンサルタント	監査のポイント講師	井上直樹
株式会社ぎょうせい	令和 7 年度千葉県市議会議長会研修会講師	杉岡秀紀
自治体議員政策情報センター 虹とみどり	全国政策研究会コーディネーター	杉岡秀紀
議会コンシェルジュ	議会コンシェルジュ with Mielka 地方議会の勉強会講師	杉岡秀紀
大阪大学大学院人間科学研究科	Disaster Prevention and International Collaboration ゲストスピー カー	大門大朗
長野大学	生物環境学特別講義講師	吉田誠
国立大学法人一橋大学大学院	博士課程申請論文 (論文博士) 審査委員会委員	倉田良樹
岡山県立林野高等学校	「総合的な探究の時間」における教職員研修講師	杉岡秀紀
公立大学法人名桜大学	教養教育「大学と人生」講師	渋谷節子
南台科技大学	南台科技大学商業管理学院 EMBA 海外研修プログラム講師 南台科技大学商業管理学院 EMBA 海外研修プログラムコーディネーター	西田豊明 亀井省吾

2025 年度研究費獲得実績

科学研究費助成事業

研究代表者 ● 12 件 (11 人) 合計 12,810,000 円

地域経営学部 ● 6 件 (5 人) 合計 4,860,000 円

	教員名	研究種目	研究期間	2025 年度 直接経費	研究課題名
1	大谷 杏	基盤研究 (C) (一般)	2022 ~ 2025 年度	130,000 円	外国人の職業訓練に関する比較研究 - 職業訓練校に焦点を当てて -
2	大門大朗	挑戦的研究 (萌芽)	2023 ~ 2025 年度	800,000 円	防災環境論の探究: 「防災意識」から「防災環境」への転回を企図して
3	川島典子	基盤研究 (B) (一般)	2024 ~ 2025 年度	1,200,000 円	重層的支援における介護予防・防災機能付「独居高齢者の見守りロボット」の研究
4	大門大朗	基盤研究 (B) (一般)	2024 ~ 2027 年度	1,500,000 円	批判的防災論 - 防災研究の脱政治化に対する批判的アプローチ
5	岡本悦司	基盤研究 (C) (一般)	2025 ~ 2027 年度	430,000 円	所得と医療費との関連をめぐる傷病別マイクロ分析: 医療保険改革へのエビデンス創出
6	亀井省吾	基盤研究 (C) (一般)	2025 ~ 2029 年度	800,000 円	外部力と人的ネットワークが促進する地域スタートアップエコシステムの価値創出

情報学部 ● 6 件 (6 人) 合計 7,950,000 円

	教員名	研究種目	研究期間	2025 年度 直接経費	研究課題名
1	須志田隆道	基盤研究 (C) (一般)	2022 ~ 2026 年度	400,000 円	エネルギー最適化による細胞集団の形態形成モデルの数値的研究とその展開
2	衣川昌宏	基盤研究 (C) (一般)	2025 ~ 2027 年度	1,050,000 円	AIoT・情報機器への多周波電磁照射による情報流入攻撃の現象解明と対策手法の開拓
3	野村 修	基盤研究 (C) (一般)	2025 ~ 2027 年度	1,200,000 円	事後測的な認知処理に対して他者動作の視覚情報が与える影響の解明
4	田中彰一郎	若手研究	2025 ~ 2027 年度	1,000,000 円	大規模な多目的最適化問題のランドスケープに基づくアルゴリズムの自動推薦
5	吉田 誠	若手研究	2025 ~ 2027 年度	1,500,000 円	特定外来生物チャネルキャットフィッシュの侵入前線の検出とその形成要因の解明
6	才木常正	挑戦的研究 (萌芽)	2025 ~ 2027 年度	2,800,000 円	魚類遊泳コントロールのための脳波計測による視覚認知機能の解明

研究分担者 ● 18 件 (16 人) 合計 8,690,000 円

地域経営学部 ● 8 件 (8 人) 合計 2,430,000 円

	教員名	研究種目	研究期間	2025 年度 直接経費	研究課題名	研究代表者の 所属機関
1	杉岡秀紀	基盤研究 (C) (一般)	2023 ~ 2025 年度	110,000 円	総合的な探究の時間の「キャリアと社会課題の2つの探究」の可視化と支援に関する研究	京都橋大学
2	岡本悦司	基盤研究 (B) (一般)	2023 ~ 2025 年度	100,000 円	重層的支援における介護予防・防災機能付「独居高齢者の見守りロボット」の研究	福知山 公立大学 (川島典子)

	教員名	研究種目	研究期間	2025 年度 直接経費	研究課題名	研究代表者の 所属機関
3	神谷達夫	基盤研究 (C) (一般)	2025 ~ 2027 年度	270,000 円	所得と医療費との関連をめぐる傷病別マイクロ分析: 医療保険改革へのエビデンス創出	福知山 公立大学 (岡本悦司)
4	星 雅丈	基盤研究 (C) (一般)	2025 ~ 2027 年度	100,000 円	所得と医療費との関連をめぐる傷病別マイクロ分析: 医療保険改革へのエビデンス創出	福知山 公立大学 (岡本悦司)
5	川島典子	基盤研究 (C) (一般)	2025 ~ 2027 年度	100,000 円	所得と医療費との関連をめぐる傷病別マイクロ分析: 医療保険改革へのエビデンス創出	福知山 公立大学 (岡本悦司)
6	佐藤 恵	厚生労働行政 推進調査事業費 補助金	2025 ~ 2026 年度	350,000 円	ICD11 対応標準病名マスターの構造と作成に関する研究	東京大学
7	大門大朗	基盤研究 (A) (一般)	2021 ~ 2025 年度	900,000 円	災害対応システムと「援原病」に関する共創的研究	大阪大学
8	佐藤 充	基盤研究 (B) (一般)	2025 ~ 2027 年度	500,000 円	再生可能エネルギープロシューマを基盤とした脱炭素シナリオ構築に関する研究	京都大学

情報学部 ● 9 件 (7 人) 合計 6,060,000 円

	教員名	研究種目	研究期間	2025 年度 直接経費	研究課題名	研究代表者の 所属機関
1	倉本 到	基盤研究 (B) (一般)	2023 ~ 2025 年度	400,000 円	重層的支援における介護予防・防災機能付「独居高齢者の見守りロボット」の研究	福知山 公立大学 (川島典子)
2	渡邊扇之介	基盤研究 (C) (一般)	2023 ~ 2026 年度	150,000 円	Max-plus 方程式で記述される離散力学系の解析とその応用	芝浦工業 大学
3	池野英利	基盤研究 (B) (一般)	2024 ~ 2027 年度	450,000 円	根リターがもたらす炭素蓄積過程の環境応答モデルの構築	兵庫県立 大学
4	池野英利	基盤研究 (B) (一般)	2024 ~ 2027 年度	500,000 円	森林斜面地に生育する樹木根系構造の非破壊評価法の確立	名古屋大学
5	池野英利	基盤研究 (B) (一般)	2024 ~ 2026 年度	500,000 円	樹木根系の最適化による崩壊防止と生物多様性の両立	兵庫県立 大学
6	眞鍋雄貴	基盤研究 (B) (一般)	2024 ~ 2026 年度	550,000 円	SPDX を活用したソフトウェアエコシステム分析基盤の開発	立命館大学
7	前田一貴	基盤研究 (B) (一般)	2024 ~ 2028 年度	200,000 円	離散戸田格子の拡張による古典直交関数系と不変分布・一般化ギブス測度の新展開	京都大学
8	吉田 誠	国際共同研究 加速基金 (国際先導研究)	2022 ~ 2028 年度	3,000,000 円	国際的なバイオロギング研究の先導による人為起源海洋環境ストレスの影響解明	総合研究 大学院大学
9	島中利治	基盤研究 (B) (一般)	2025 ~ 2028 年度	310,000 円	共同体として有機的な学びを実現するデータサイエンス教育プラットフォームの創出	東京都立 大学

その他 ● 1 件 (1 人) 合計 200,000 円

	教員名	研究種目	研究期間	2025 年度 直接経費	研究課題名	研究代表者の 所属機関
1	川添信介	基盤研究 (B) (一般)	2024 ~ 2025 年度	200,000 円	西洋中世スコラ学における「倫理学を内在化する政治学」への批判的研究	早稲田大学

民間研究助成

● 2件 (1人) 合計 6,000,000円

	教員名	外部資金名称	研究期間	2025年度受入額	研究課題名
1	衣川昌宏	公益財団法人 電気通信普及財団	2025年度 (1年)	3,000,000円 ※1	高信頼 AI エッジコンピューティング の基盤となる AI ハードウェアセキュ リティの開拓
2	衣川昌宏	公益財団法人 旭硝子財団	2025～ 2026年度	3,000,000円 ※2	物理攻撃耐性を持った高信頼 AIoT/ サイバーフィジカルシステムを実現 する情報通信機器設計手法の開拓

※1 間接経費を含む

※2 間接経費なし

受託研究

● 9件 合計 3,814,010円

	教員名	委託機関	研究期間	2025年度受入額	研究課題名
1	木村昭興 教授	京都府中丹 広域振興局	2025年度	1,251,050円	中丹地域における U ターン者数等の 分析研究
2	畠中利治 教授	福知山市 (学校教育課)	2025年度	500,000円	ラーニングイノベーション・プロ ジェクト監修業務
3	小山元孝 教授	京都府立京都学・ 歴彩館	2025年度	200,000円	京都府の文化的景観についての研究
4	張明軍 准教授	京都府中丹 広域振興局	2025年度	319,000円	京都中丹いちおし商品のブランド価 値向上に関する研究
5	吉田誠 講師	京都府立西舞鶴 高等学校	2025年度	294,800円	京都府立西舞鶴高等学校における福 知山公立大学への研究教育委託業務
6	畠中利治 教授	株式会社クリア	2025年度	468,600円	紙ベース記録表をデジタル化による 業務効率向上の検証
7	佐藤充 准教授	京都府丹後 広域振興局	2025年度	297,000円	丹後地域における将来人口シナリオ に基づく地域経済・産業構造の動的 解析と予測モデリングの構築
8	山本吉伸 教授	福知山市農林振興課	2025年度	403,660円	有害鳥獣捕獲用わなの ICT 機器の設 置業務委託
9	山本吉伸 教授	福知山市農林振興課	2025年度	79,900円	有害鳥獣捕獲用わなの ICT 機器の保 守管理業務委託

※合計額：間接経費を含む

受託事業

● 9件 合計 12,815,000円

	教員名	委託機関	事業期間	2025年度受入額	事業名
1	池野英利 教授	福知山市 (大学政策課)	2025年度	1,529,000円	シニアワークカレッジ運営事業支援 業務
2	倉本到 教授	福知山市 (健康医療課)	2025年度	434,500円	大阪・関西万博での催事出展にかか る体験企画の開発・運用支援業務
3	亀井省吾 教授	福知山市 (産業課)	2025年度	9,115,000円	NEXT 産業創造プログラム等運営業務
4	池野英利 教授	伊根町	2025年度	1,140,000円	ジュニア IT 人材育成プロジェクト
5	山本吉伸 教授	公益財団法人 福知山市都市緑化協会	2025年度	170,900円	学生記者運用及びホームページ保守 管理
6	衣川昌宏 准教授	福知山市 PTA 連絡協議会	2025年度	150,000円	京都府 PTA 研究大会福知山大会のラ イブ配信、オンデマンド配信

	教員名	委託機関	事業期間	2025年度受入額	事業名
7	衣川昌宏 准教授	福知山市役所 夜久野支所	2025年度	25,600円	レーザーカッターを使った木製キー ホルダーの製作支援
8	衣川昌宏 准教授	福知山商工会議所	2025年度	150,000円	中小企業・個人事業者向けデジタル 工作機器活用体験セミナー
9	畠中利治 教授	北部地域連携都市圏 形成推進協議会	2025年度	250,000円	高等教育機関との連携による人材育 成事業

※合計額：間接経費を含む

共同研究

● 12件 合計 2,190,000円

	教員名	共同研究機関	研究期間	2025年度受入額	研究課題名
1	佐藤充准教授・ 谷口知弘教授	伊根町	2025年度	1,617,000円	持続可能なまちづくり調査研究事業
2	井上一成 教授	京都府丹後農業改良 普及センター	2025年度	0円	土壌水分量の可視化を目的とする IoT の研究
3	星雅丈 准教授	株式会社 アイトシステム	2025年度	0円	高齢者生活行動データの分析から高 齢者疾患（認知機能低下・その他疾 患）の早期の気づきを促す
4	水口学 特任教授	福知山市消防本部	2025年度	0円	消防活動における AI 支援
5	池野英利 教授	株式会社 SHIMADA	2025年度	120,000円	徘徊用昆虫捕虫器の改良開発
6	佐藤充 准教授	夕日ヶ浦観光協会	2025年度	150,000円	マーケティング・リサーチに基づく 地域ブランディングの構築手法に関 する研究
7	才木常正 教授	堺アルミ株式会社	2025年度	253,000円	熱エネルギー変換材料の放熱特性を 定量把握できる測定システムの構築
8	小山元孝 教授	株式会社両丹日日新 聞社	2025年度	50,000円	地域資料のデジタル化とデータベ ース構築に向けての研究
9	才木常正 教授	近畿大学農学部水産学科 漁業生産システム研究室	2025年度	0円	海洋生物の生体情報測定システムの 開発
10	井上一成 教授	福知山市	2025年度	0円	安心・安全なまちづくりのためのディ ジタルコンテンツ制作とフィールドワ ーク
11	才木常正 教授	兵庫県立大学院工学 研究科	2025年度	0円	パネを利用したリハビリテーション 機器の開発
12	吉田誠 講師	国立研究開発法人 国立環境研究所	2025年度	0円	琵琶湖・淀川水系の生物オープン データ収集・活用技術高度化

※合計額：間接経費を含む

包括協定団体

本学と協定を結んでいる団体です。

福知山市

締結団体	目的	連携内容
国立大学法人 京都工芸繊維大学	相互の研究教育の発展、 人材育成及び地域社会の発展	1. 教育に関する事項 2. 研究に関する事項 3. 教職員の相互交流に関する事項 4. 地域社会への貢献に関する事項 5. その他本協定の目的を達するために必要な事項
大江まちづくり住民協議会 三和地域協議会 夜久野町 みらいまちづくり協議会	相互の人材育成及び 地域社会の発展	1. 地域に関する情報の共有と活用 2. 地域・大学双方の人材育成 3. 地域社会の発展に資する調査・研究 4. 共同事業・共同プログラムの推進 5. 必要な施設・資源に関する便宜供与 6. その他本協定の目的を達するために必要な事項
京都北都信用金庫 但馬信用金庫 一般社団法人京都府北部 地域連携都市圏振興社	互いの資源や機能等の活用による幅広い分野における協力関係の構築及び地域社会の維持・発展	1. 地域社会の維持・発展に関すること 2. 地域経済の維持・発展に関すること 3. 地域人材の育成に関すること 4. 相互の資源を活かした交流に関すること 5. その他両者が必要と認めること
京都府 綾部市 伊根町 宮津市 舞鶴市 与謝野町 京丹後市		1. 地域の人材育成・定着に関すること 2. 地域の振興、情報化に関すること 3. 地域経済の発展に関すること 4. 地域の観光振興に関すること 5. 地域の保健医療福祉向上に関すること 6. その他両者が必要と認めること
朝来市 丹波市		1. 地域の人材育成・定着に関すること 2. 地域の振興、情報化に関すること 3. 地域経済の発展に関すること 4. 地域の観光振興に関すること 5. 地域づくりに関すること 6. 教育・文化・スポーツの振興及び健康増進、保健医療福祉向上に関すること 7. その他両者が必要と認めること
舞鶴工業高等専門学校		1. 地域の人材育成・定着に関すること 2. 地域の産業振興に関すること 3. 地域の課題解決に関すること 4. 地域のものづくりと情報化に関すること 5. 地域の保健医療福祉の向上に関すること 6. その他両者が必要と認めること
西日本旅客鉄道株式会社	互いの資源や機能等の活用による幅広い分野における協力関係の構築及び北近畿の地域社会の維持・発展	1. 地域振興に関すること 2. 地域人材の育成に関すること 3. 相互の資源を活かした交流に関すること 4. その他両者が必要と認める事項
京都府立福知山高等学校	学校教育の振興及び人材育成並びに地域社会の発展	1. 教育内容及び教育方法に関すること 2. 研究、探究活動に関すること 3. 授業、実習等の学習支援に関すること 4. 教員の支援及び研修に関すること 5. 授業等の聴講に関すること 6. その他前条の目的を達成するために必要な事項
京都府立工業高等学校	学校教育の振興及び実践的技術人材の育成並びに地域社会の発展	1. 教育内容及び教育方法に関すること 2. 研究、探究活動に関すること 3. 授業、実習等の学習支援に関すること 4. 教員の支援及び研修に関すること 5. 施設・設備の利活用に関すること 6. 地域社会の発展に寄与する取組に関すること 7. 授業等の聴講に関すること 8. その他前条の目的を達成するために必要な事項

2025年度 福知山公立大学 北近畿地域連携機構 年次報告書

2026年6月 発行

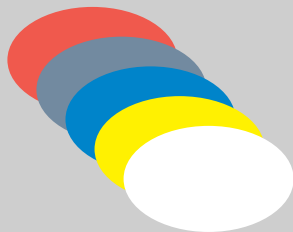
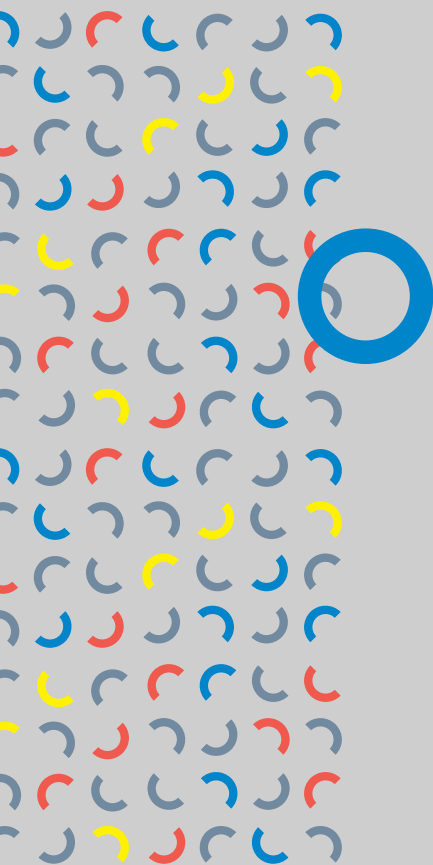
発行 福知山公立大学 北近畿地域連携機構
〒620-0886 京都府福知山市字堀3370
福知山公立大学2号館1階
TEL 0773-24-7151 FAX 0773-24-7152
E-mail kita-re@fukuchiyama.ac.jp

REPORT 2025

25

AL

RT



ANNUAL

REPORT 2

2025 ANN

REP

202

Kita-re
北近畿地域連携機構

〒620-0886 京都府福知山市字堀3370
TEL 0773-24-7151 FAX 0773-24-7152
Mail kita-re@fukuchiyama.ac.jp
<https://www.fukuchiyama.ac.jp>